

現代の日展作家たち — 日本の美

NITTEN Artists Today: The Beauty of Japan



鈴木竹柏 「陽光」 2016年 改題 新 第3回日展

日展一一〇年、作品の力が全て。

時代の名作を誇りに思い、過去に感謝して進む

今年、日展は一一〇年という節目の年を迎えます。毎年、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門にわたり1万点以上の応募をいただき、国立新美術館にて約3,000点を展示しておりますが、日展は長い歴史の中でその時代、その時代にすばらしい作品を残してきました。作品の力というのは何よりも、すべてだと思います。それが私たちの誇りでもありますし、大きな力、財産となっております。

日展は美を作って発表する作家集団であり、一人ひとりが純粹に仕事をし、お互いに切磋琢磨し、今年も各作家が一番良いものを出品すべく精進しております。

近年、日展はさまざまな問題をご指摘いただき、組織改革を行い、努力してまいりました。さまざまな指導を受け、それに応えていくのは大変なものでしたが、一一〇年間、先輩の先生方が守り続け、いろいろ残してくださっているものがあって今日まで続けてこれたと思っております。日展のたいへんな試練は私たちの力だけでは乗り切れませんでした。乗り切れたというのは一一〇年の歴史のおかげだと思います。少しも変わらずにとすばらしい日展を続けていけるということとは、やはりそういう時代の重みが支えてくれているのだと感じ、改組新第4回日展を一一〇年にあたる年に開催できることに感謝の気持ちでいっぱいです。

本来であれば一一〇年として、過去の先生方の作品も披露しなければいけないときですが、この5年間は改革を進めることが第一だと思います。そこで、小規模ではありますが、日展会期前の10月20日より10日間にわたって、銀座の和光にて、日展理事と顧問による「美の魁けー日展の現代ー」展を初めて開催いただけることになりました。来年以降も続けて、若い作家を中心にするなど、いろいろ変化をつけて開催できればと思っております。

今年の第4回日展は11月3日文化の日にスタートいたします。過去の偉大な作家たちが築いてきた道を、着実に、さらに発展できますよう歩んでまいります。日展を目標に日々制作を重ねてきた全国の作家の作品を、ぜひ多くの方にご高覧いただければと願っております。

公益社団法人 日展理事長
奥田小由女



日展会期中のイベント・開催概要 p90

10 人の作家のインタビュー									
書	書	工芸美術	工芸美術	彫刻	彫刻	洋画	洋画	日本画	日本画
									
芸術に理屈はありません	金石の「氣」を求めて	続けなければ評価にならない	古陶磁を愛した祖父の元で。この指先に心を集め	ロダンの彫刻の中に見つけた、誰かが仕事をした痕跡に感動	覚めやらぬ興奮、尽きない興味、飽くなき探究心	国際交流が大切な時代	風景をこちらに引き寄せる	作品は自画像にもなる	自由に好きなように描く喜び
田中徹夫	井上清雅	手銭吾郎	林 香君	紺谷 武	前芝武史	曾 剣雄	西房浩二	青木秀明	野田夕希
p86	p82	p78	p74	p70	p66	p62	p58	p54	p50

日展一一〇年年表 p48

8 人の作家のインタビュー							
工芸美術	日本画	書	工芸美術	彫刻	洋画	日本画	工芸美術
							
毎年違うものを、少しでもいいものに挑戦します	師の言葉―君の思うとおりにおやりやす	練磨考究して、線の中に自分の想いを封じ込める	「伝統」を飲み込んで「今」を創る	この世界は教えるものでも教わるものでもない。本人の努力次第	アンチテーゼがないと物事は進まない	「心の贅沢」という幸せなものに運命的に出会った	過去の偉大な作家たちへの感謝から始まる
故 三谷 吾一	故 中路 融人	井茂圭洞	大樋年朗	川崎普照	寺坂公雄	土屋禮一	奥田小由女
p44	p40	p36	p32	p28	p24	p20	p16

日展の顧問・理事・監事紹介



岩倉 寿
いわくらむさし
日本画 顧問

1936年、香川県生まれ。山口華楊に師事。1959年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）日本画科卒業。1961年、同大学専攻科修了。1958年、第1回日展初入選。1972年、第4回日展「柳図」により特選受賞。1976年、第8回日展「山里」により特選受賞。1988年、第20回日展「沼」により日展会員賞受賞。1990年、第22回日展「晩夏」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第34回日展出品作「南の窓」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



「風化」改組新第3回日展

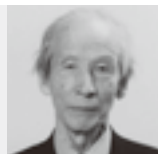


川崎 春彦
かわさきはるひこ
日本画 顧問

1929年、東京都生まれ。父は川崎小虎、父と義兄の東山魁夷に師事。1950年、東京藝術大学日本画科卒業。同年、第6回日展初入選。1961年、第4回日展「風の森」により特選・白寿賞受賞。1964年、第7回日展「孤島」により特選・白寿賞受賞。1983年、第15回日展「野」により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「朝明けの湖」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「富士」第43回日展



鈴木 竹柏
すずきちくはく
日本画 顧問

1918年、神奈川県生まれ。中村岳麓に師事。1936年、逗子開成中学校卒業。1943年、第6回新文展初入選。1956年、第12回日展「暮色」により特選・白寿賞受賞。1958年、第1回日展「山」により特選・白寿賞受賞。1962年、第5回日展「干潮」により菊華賞受賞。1981年、第13回日展「丘」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「気」により日本芸術院賞受賞。1994年、勲三等瑞宝章受章。1995年、日展事務局長。1997年、日展理事長。2007年、文化功労者。2009年日展会長。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「陽光」改組新第3回日展



土屋 禮一
つちやれいち
日本画 副理事長 事務局長

1946年、岐阜県生まれ。加藤東一に師事。1967年、武蔵野美術大学実技専修科日本画卒業。同年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「水たまり」により特選・白寿賞受賞。1976年、第8回日展「暮れて行く」により特選受賞。1985年、第17回日展「隠岐」により日展会員賞受賞。2005年、第37回日展「椿樹」により文部科学大臣賞受賞。2007年、第38回日展出品作「軍鶏」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長 事務局長、日本芸術院会員、金沢美術工芸大学名誉教授。



「雪餘」改組新第3回日展



山崎 隆夫
やまざき たかお
日本画 理事

1940年、新潟県生まれ。下保昭に師事。1967年、京都教育大学特修美術日本画専攻科卒業。1965年、第8回日展初入選。1972年、第4回日展「森」により特選受賞。1973年、第5回日展「トマト」により無鑑査・特選受賞。1992年、第24回日展「海游」により日展会員賞受賞。2008年、第40回日展「沼宴」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「海煌」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



「静閑」改組新第3回日展



福田 千恵
ふくだ せんけい
日本画 理事

1946年、東京都生まれ。佐藤太清に師事。1969年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。同年、改組第1回日展初入選。1981年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。1984年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。1996年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアニスト」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



「吾がいし」改組新第3回日展



渡辺 信喜
わたなべのぶよし
日本画 理事

1941年、京都府生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組新第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、京都精華大学名誉教授。



「芥子」改組新第3回日展

1938年、埼玉県生まれ。渡邊武夫に師事。1961年、埼玉大学教育学部美術科卒業。同年、第4回日展初入選。1987年、第19回日展「鉾山寥乎」により特選受賞。1992年、第24回日展「雪の選炭工場」により特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展「北海の岬」により内閣総理大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「古潭風声」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



ねぎし ゆうじ
根岸 右司
洋画 理事



「古潭風声」 改組 新 第3回日展

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学学芸学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、東光会理事長。



ちうてい け
佐藤 哲
洋画 副理事長



「アドウマン通り」 改組 新 第3回日展

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。現在、日展顧問、日本芸術院会員、白日会会長。



なかやま ただひこ
中山 忠彦
洋画 顧問



「衣裳室にて」 改組 新 第3回日展

1933年、広島県生まれ。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒業。1954年、第10回日展初入選。1962年、第5回日展「カニのある静物」により特選受賞。1986年、第18回日展「レリーフのある棚」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展「デルフォイへの道」により文部科学大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「アクロポリスへの道」により日本芸術院賞受賞。2009年、日展事務局長。2013年、日展理事長。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長、山梨大学名誉教授。



てらさか たかひろ
寺坂 公雄
洋画 顧問



「山麓春隣」 改組 新 第3回日展

1955年、静岡県生まれ。坪内正、伊藤清永、中山忠彦に師事。1979年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure(ラリユール)」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事。



ゆやま としひさ
湯山 俊久
洋画 理事



「Aube(夜明け)」 改組 新 第3回日展

1942年、神奈川県生まれ。榎原健三に師事。1975年、第7回日展初入選。1987年、第19回日展「北の倉庫」により特選受賞。1993年、第25回日展「北の教会」により特選受賞。2012年、第44回日展「白い函館」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、示現会理事長。



ひぐち ひろし
樋口 洋
洋画 理事



「三十三院春」 改組 新 第3回日展

1929年、石川県生まれ。小糸源太郎に師事。1950年、金沢美術工芸専門学校(現・金沢美術工芸大学)洋画科卒業。1951年同大学研究科修了。1949年、第5回日展初入選。1961年、第4回日展「河」により特選受賞。1968年、第11回日展「箱根新涼」により菊華賞受賞。1998年、第30回日展「春めく」により内閣総理大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「春耕」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。2011年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、金沢学院大学名誉教授。



むらた しようぞう
村田 省蔵
洋画 顧問



「収穫」 改組 新 第3回日展

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレーション パンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレーション・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレーション サンピターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



ふじもり かねあき
藤森 兼明
洋画 顧問



「喜多郎・シルクロードから天空へのオマージュ」 改組 新 第3回日展

1944年、岐阜県生まれ。清水多嘉示、木下繁に師事。1967年、武蔵野美術大学造形学部卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展「裸婦」により特選受賞。1978年、第10回日展「裸婦」により特選受賞。2006年、第38回日展「長風」により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「朝」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長、名古屋芸術大学名誉教授。



かんべ
みねお

彫刻
理事
神戸峰男



「由に」改組新第3回日展

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒業。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展「ひとり」により特選受賞。1967年、第10回日展「女」により特選受賞。1968年、第11回日展「女'68」により菊華賞受賞。1996年、第28回日展「告知」により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作「告知-2001-」により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授。



ひるた
じろう

彫刻
顧問
蛭田二郎



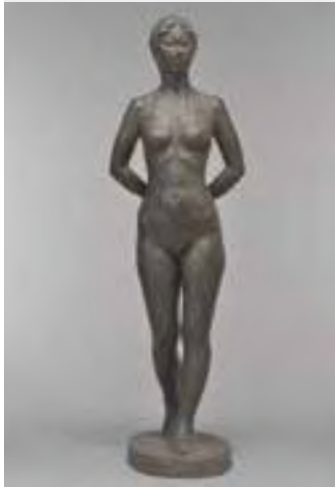
「聖家族」改組新第3回日展

1931年、東京都生まれ。斎藤素蔵、平野敬吉、進藤武松に師事。1961年、第4回日展初入選。1964年、第7回日展「暖流」により特選受賞。1993年、第25回日展「未来への讃歌」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「大地」により日本芸術院賞受賞。2007年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



かわさき
しやうしやう

彫刻
顧問
川崎普照



「微風」改組新第3回日展

1931年、東京都生まれ。父の雨宮治郎に師事。日本大学芸術学部卒業。1956年、第12回日展初入選。1958年、第1回日展「薫風に望む」により特選受賞。1963年、第6回日展「新世代」により特選受賞。1985年、第17回日展「道」により内閣総理大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作「想秋」により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



あめのみや
けいこ

彫刻
顧問
雨宮敬子



「未来に希望を」改組新第3回日展

1943年、広島県生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展「雄」により特選受賞。1990年、第22回日展「若人」により特選受賞。2012年、第44回日展「こもれび」により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組新第2回日展出品作「朝の響き」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



やまだ
ともひこ

彫刻
理事
山田朝彦



「兆映」改組新第3回日展

1941年、東京都生まれ。小森邦夫に師事。1964年、茨城大学教育学部美術科卒業。1962年、第5回日展初入選。1969年、改組第1回日展「窮」により特選受賞。1971年、第3回日展「省」により特選受賞。1990年、第22回日展「五月の女」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「悠久の時」により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「慈愛—こもれび」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員。



のうじま
せいじ

彫刻
副理事長
能島征二



「春風—さきがけ」改組新第3回日展

1930年、東京都生まれ。平櫛田中、澤田政廣、圓錐勝三に師事。1953年、東京藝術大学彫刻科卒業。1954年、第10回日展初入選。1966年、第9回日展「弧」により特選受賞。1970年、第2回日展「薫風」により特選受賞。1992年、第24回日展「清冽」により文部大臣賞受賞。1996年、第27回日展出品作「竹園生」により日本芸術院賞受賞。1999年、日展事務局長。2000年、日展理事長。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、東京学芸大学名誉教授。



はしもと
けんたろう

彫刻
顧問
橋本堅太郎



「一魂」改組新第3回日展

1926年、三重県生まれ。東京高等師範学校卒業。1950年、第6回日展初入選。1967年、第10回日展「華の譜」により特選受賞。1968年、第11回日展「想華の詞」により無鑑査・特選受賞。1969年、改組第1回日展「宴の華」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「星のいのり」により日展会員賞受賞。1984年、第16回日展「焦躁の旅路」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「朝の祈り」により日本芸術院賞受賞。1996年、中村晋也美術館を設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、文化功労者。2007年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、鹿児島大学名誉教授、筑波大学名誉博士。



なかむら
しんや

彫刻
顧問
中村晋也



「豊臣秀吉公」改組新第3回日展

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展「集積」により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展「間の實在」により特選受賞。1990年、第22回日展「巨木積雪」により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作「原生雨林」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



なかいていじ

中井 貞次

工芸美術

顧問



「峡谷」 改組新第3回日展

1927年、石川県生まれ。1949年、東京美術学校（現・東京藝術大学）工芸科卒業。1950年、第6回日展初入選。1956年、第12回日展「『風寒し』青釉花器」により北斗賞受賞。1957年、第13回日展「『鶏』緑釉壺」により特選・北斗賞受賞。1961年、第4回日展「釉彩『魚紋』花器」により特選・北斗賞受賞。1982年、第14回日展「『歩いた道』花器」により文部大臣賞受賞。1985年、第16回日展出品作「『峙つ』花三島飾壺」により日本芸術院賞受賞。2004年、文化功労者。2008年、金沢学院大学副学長。2011年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、現代工芸美術家協会理事長。



おおひとしろう

大樋 年朗

工芸美術

顧問



「飴釉『独楽』金銀彩丸壺」 改組新第3回日展

1936年、大阪府生まれ。1967年、第10回日展初入選。1972年、第4回日展「或るページ」により特選受賞。1974年、第6回日展「風」により特選受賞。1988年、第20回日展「海の詩」により文部大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作「炎心」により日本芸術院賞受賞。2006年、奥田元宋・小由女美術館開館。2008年、文化功労者。2013年、日展事務局長。2014年、日展理事長。現在、日展理事長、日本芸術院会員。



おくだ さゆめ

奥田 小由女

工芸美術

理事長



「三陸の海への祈り」 改組新第3回日展

1934年、京都府生まれ。1958年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）卒業。1960年、同大学専攻科修了。1957年、第13回日展初入選。1960年、第3回日展「青釉花器」により特選・北斗賞受賞。1966年、第9回日展「花器『藍』」により特選・北斗賞受賞。2007年、第38回日展出品作「扁壺『大地』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



もりの たいいち

森野 泰明

工芸美術

顧問



「白金泥彩扁壺『緑陰』」 改組新第3回日展

1952年、大阪府生まれ。1978年、東京教育大学（現・筑波大学）大学院修了。1976年、第8回日展初入選。1993年、第25回日展「横臥したポーズ」により特選受賞。1995年、第27回日展「仰臥した女」により特選受賞。2010年、第42回日展「夜の倚像」により日展会員賞受賞。2015年、改組新第2回日展「夕暮れの立像」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展監事、筑波大学教授。



しばた よしき

柴田 良貴

彫刻

監事



「消え入る倚像」 改組新第3回日展

1930年、大阪府生まれ。楠部彌弋に師事。1957年、広島県立竹原工業学校金属工芸科卒業。1953年、第9回日展初入選。1959年、第2回日展「焼〆『盤』」により特選・北斗賞受賞。1963年、第6回日展「『泥彩』壺」により特選・北斗賞受賞。1998年、「赫窯 雙蟹」により日本芸術院賞受賞。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



いまい まさゆき

今井 政之

工芸美術

顧問



「南風大血」 改組新第3回日展

1939年、愛知県生まれ。1963年、東京教育大学（現・筑波大学）教育学専攻科卒業。1962年、第5回日展初入選。1972年、第4回日展「生きがい」により特選受賞。1980年、第12回日展「ひたむき」により特選受賞。1992年、第24回日展「いい日」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「森からの声」により内閣総理大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「生生流転」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、名古屋市立大学名誉教授。



やまもと しんすけ

山本 眞輔

彫刻

理事



「心の旅―ポルトの丘―」 改組新第3回日展

1930年、京都府生まれ。山崎覚太郎に師事。1953年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸コース漆芸科卒業。同年、第9回日展初入選。1966年、第9回日展「刻象“大地”その内なるもの」により特選・北斗賞受賞。1968年、第11回日展「燦光」により特選・北斗賞受賞。1983年、第15回日展「収穫」により日展会員賞受賞。2004年、第35回日展出品作「スサノオ聚抄」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



いとう ひろし

伊藤 裕司

工芸美術

顧問



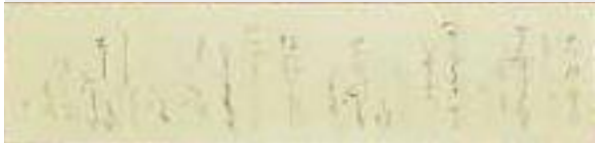
「額田女王」 改組新第3回日展

1924年、東京都生まれ。川口芝香に師事。1961年、第4回日展初入選。1979年、第11回日展「うなる子」により特選受賞。1981年、第13回日展「早春」により特選受賞。1996年、第28回日展「花」により日展会員賞受賞。2009年、第40回日展出品作「更級日記抄」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



書 顧問
こやま やすこ
小山 やす子

「天つ風」改組新第3回日展



1924年、京都府生まれ。廣津雲仙、辻本史邑に師事。1954年、第10回日展初入選。1963年、第6回日展「陸游の詩」により特選・苞竹賞受賞。1970年、第2回日展「青青邱詩 送陳少府赴嘉定」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「竹窓」により日展会員賞受賞。1986年、第18回日展「高青邱詩」により文部大臣賞受賞。1993年、第24回日展出品作「杜少陵詩」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



書 顧問
おのざき へっぽう
尾崎 邑鵬



「簞笥飾」改組新第3回日展

1937年、東京都生まれ。西川寧に師事。1966年、第9回日展初入選。1972年、第4回日展「九穀斯豊」により特選受賞。1978年、第10回日展「熱鐵」により特選受賞。1994年、第26回日展「雲龍風虎」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「盛稲梁」により文部大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「明且鮮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大東文化大学名誉教授。



書 理事
あらい こうふう
新井 光風



「観軌」改組新第3回日展

1928年、京都府生まれ。父の日比野五鳳に師事。同志社大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1975年、第7回日展「春」により特選受賞。1978年、第10回日展「春」により特選受賞。1987年、第19回日展「天の海」により日展会員賞受賞。1997年、第29回日展「三日月」により内閣総理大臣賞受賞。1999年、第30回日展出品作「花」により日本芸術院賞受賞。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



書 顧問
ひらの こうふう
日比野 光鳳



「十鳥」改組新第3回日展

1943年、京都府生まれ。佐治賢使、番浦省吾、上原清に師事。1961年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術コース漆芸科卒業。1963年、第6回日展初入選。1972年、第4回日展「陽の芯」により特選受賞。1982年、第14回日展「潮光空間」により特選受賞。2005年、第37回日展「耀貝二曲屏風 朝陽の響」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事。



工芸美術 理事
はつこりしゅんしょう
服部 峻昇



「耀貝華器 朝陽の波」改組新第3回日展

1943年、山口県生まれ。1969年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1975年、第7回日展初入選。1983年、第15回日展「夜明け」により特選受賞。1985年、第17回日展「曜」により特選受賞。1996年、第28回日展「萩釉広口陶壺『ある光景の印象』」により文部大臣賞受賞。2000年、第31回日展出品作「萩釉広口陶壺『曜'99・海』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事、山口大学名誉教授。



工芸美術 監事
よしかは たお
吉賀 将夫



「萩釉陶壺『爽』2016」改組新第3回日展

1940年、石川県生まれ。金沢美術工芸大学卒業。1963年、第6回日展初入選。1980年、第12回日展「容」により特選受賞。1986年、第18回日展「蒼い花器」により特選受賞。2001年、第33回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2010年、第41回日展出品作「湖畔・彩釉花器」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、金沢学院大学名誉教授。



工芸美術 理事
たけこし としあき
武腰 敏昭



「無鉛釉 王鳥」改組新第3回日展

1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展「四角柱イン・セクション」により特選受賞。1984年、第16回日展「無限標」により特選受賞。2000年、第32回日展「風の門」により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学(現・横浜美術大学)学長。2016年、改組新第2回日展出品作「宙の河」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、横浜美術大学名誉教授。



工芸美術 理事
はるやま ふみのり
春山 文典



「満天図」改組新第3回日展

芸術とは何か
創作とは何か

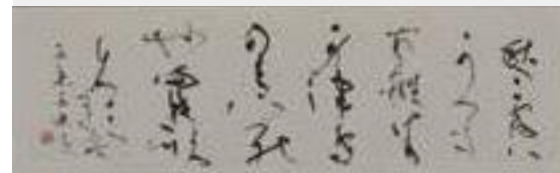
作家インタビュー集

日展

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本書芸院理事長。



黒田 賢一
くろだ けんいち
書 理事



「秋露」 改組新第3回日展

1936年、兵庫県生まれ。深山龍洞に師事。1961年、京都学芸大学(現・京都教育大学)美術科書道卒業。同年、第4回日展初入選。1977年、第9回日展「梅」により特選受賞。1979年、第11回日展「富士山」により特選受賞。1993年、第25回日展「無常」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展出品作「清流」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第33回日展出品作「清流」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、京都教育大学名誉教授。



井茂 主洞
いしげ ましろう
書 副理事長



「速總」 改組新第3回日展

1944年、栃木県生まれ。浅香鉄心に師事。1967年、立正大学卒業。1975年、第7回日展初入選。1990年、第22回日展「蘇東坡詩」により特選受賞。1992年、第24回日展「曾鞏詩」により特選受賞。2007年、第39回日展「李濂詩」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「小学之一文」により文部科学大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「李頎詩 贈張旭」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



星 弘道
ほし こうどう
書 理事



「麟鳳遊」 改組新第3回日展



幸福の苑 2017年



三陸の海への祈り 2016年 改組新第3回日展

中学生の時に見た上村松園の「序の舞」に大きな感銘を受け、どうしても自分だけの人形を探し当てたいと広島から上京。努力を続け、欧州の作品からも学び生み出してきた白い胡粉を用いた創作人形。その登場は新鮮で多くの人の注目を浴びた。日展に出品を続けて半世紀に近い。その間ずっと日展と日展を支える人たちを間近に見てきた。理事長として、今年、日展百年は、過去の偉大な作家たちへの感謝で始まると語る。

Profile

1936年、大阪府堺市生まれ。ほどなく広島県に移る。1955年、広島県日彰館高等学校卒業後、人形作家を志して上京。1966年、光風会展入選、1967年、日展入選、日本現代工芸美術展入選。1972年、日展特選、光風会会員となる。1974年、日展特選。1979年、日展審査員、1983年、光風会を退会、現代工芸美術家協会理事。1988年、日展評議員、同文部大臣賞受賞。1990年、日本芸術院賞受賞、1998年、日本芸術院会員、2008年、文化功労者。2014年、日展理事長に就任。三次市名誉市民として顕彰。現在、日本芸術院会員、日展理事長、現代工芸美術家協会副理事長。

名前に込められた父親の思い

父親は、千利休の文化が色濃い大阪・堺の和菓子屋の次男として生まれた。音楽や文学、映画が好きな粹な父親と、個性的な母親のもと、奥田さんは三人兄弟の末っ子として生まれた。名前は父親が一週間考えてつけてくれたという。しかし、幼少の頃に父親が亡くなり、母親の実家がある広島市の三次市へ移り住んだ。祖父は亡き父のことをたいへん気に入って元々三次市安田に別荘を用意していたのだ。それから祖父が父親代わりとなった。三次市吉舎町で終戦を迎える。祖母は広島市内で我が子を手けているうちに二次被爆し、原爆症で亡くなった。

小さい頃から絵を描いたり一人遊びが好きな少女だった。中学生の時、我が家に貼ってあった上村松園の「序の舞」のポスターに目が釘付けになった。「毎日その作品を眺めては女性でこれだけの格調高いものを描くんだというのが子供心に衝撃的で、やがて美術の道に入るひとつのきっかけになりました」。

さまざまなことを吸収した多感な高校時代

高校は日彰館という伝統ある個性的な私立学校だった。先生からはさまざまなことを学んだ。「いろいろな本を貸してくださり、特に三木清の『人生論ノート』はすばらしい本で、東京に出てから役に立ちました。クラブ活動は美術、音楽、演劇などに入っていて、東京に展覧会を見に行ったり、音楽会や劇団四季など、先生がいろいろな所に連れて行ってくれたのです。片道十時間以上かけて東京へ行きました。やはり時代が良かったのかと思います。本当に吸収するものがたくさんありました」。

卒業後、反対もあったが家族を説得し上京した。高校時代に東京で見た人形に心を奪われ、自分も独自の作品を作りたいと強く思っていたのだ。そこで美術学校を探したが、人形という科がどこにもなく、人づてに探しあてた沼袋にある創作人形の研究所に入った。「東京は生き馬の目を抜くような怖い所だと言われていましたが、当時は地方の人がみな東京に來ているという時代ですから、みな夢を求めている

ていい人ばかりで、東京はどうしてこんなにいい人ばかりいるのかというのが私の最初の印象でした」。しかし、研究所では竹久夢二の様なかわいい人形作りで、自分が漠然と思っていた「彫刻でもない絵画でもない何かを自分で表現できるもの」は見つからなかった。それで絵画や彫刻の先生に個人的にクロッキーやデッサンを毎週習い、自らの造形を探した。

二十代でヨーロッパへ

基本的な人形の世界や人形について二、三年で学ぶと、人形制作を行った。百貨店で販売する人形である。

「その当時はみな美しいものに飢えていて、作っても作っても売れてしまうという時代でした」。ただその人形が解体され、そっくりのものが作られたりする苦い経験もあったという。

そして一生懸命お金を貯めるとヨーロッパへ旅立った。まだ二十代で、一ドル三六〇円の頃、ソ連周りで一人旅だった。意欲的にあちこち見て歩いた。



愛の調べ 2017年
日本現代工芸美術展

「初めてで、見るものすべてにびっくりするのと感じ動するのとで、あらゆるものを吸収しました」

高校卒業後一人東京へ出て、目指す人形づくりを求め、さらにはヨーロッパへ一人旅。このバイタリティはどこからくるのだろうか。

「それが、すぐく行動するというのはなくて、夢を追っかけてしまうという感じなのです。夢をこうしたいとか、なりたいたいと思っていると、必ず実現してしまうのです。子どものときから夢はかなうものだと思っっているのです。だから、自然体でごく当たり前の感じで、進んできました」

入選六年目に斬新な造形作品 「或るページ」で特選を受賞

日展に応募する前に、光風会の工芸部に誘われて入ったのが三十歳前の時。自分自身のものをやりたいという想いが常に強くあり、オリジナリティを求めている。

ときに、杉山・河北倫明先生をはじめ高く評価してください、それが山崎先生としてはとてもうれしかったらしく、とにかくとてもかわいがってくくださったのです。皇室の方が見えても必ず『説明しなさい』と言われ、今考えると不思議です。杉山先生も河北先生も、山崎先生もずっと亡くなるまで見てくださいました」

奥田さんの活躍は、めざましかった。初期の頃、昭和女子大学の理事長が作品を購入。その後もずっと応援してくれたのだ。「一九七四年に特選を受賞した『風』」を展示していたときは真っ白いスーツに、真っ白い靴の紳士がいらして私の作品の前で『日本では特選なんて最高のように思っているけど、外国では一流の目利きの人が買ってくれなければ一流でない。だから私はあなたのを買ってあげます』と言われたのです。それが産経の鹿内信隆さんでした。箱根の彫刻の森美術館に入れてくださったのです。作品を求めたいと思ったださる方があるというのは作家としてはうれしいことでした」。

日展の先輩に生き方を学ぶ

日展での活動は、常に多くの著名作家のなかで学ぶ事が多かったという。

「杉山寧先生でも東山魁夷先生でも、非常に次元の高い毅然とした精神をお持ちで、作家としての姿勢をまざまざと見せていただき頭が下がるような感じでした。本当に高い理想を追い求めて立派な生き方だと思いましたね。日展とは、いろいろな先輩の

知り合いは、みな自分よりも早く日展に出していたが、小さくてもいいからアトリエができてから出したいと考えていたのだ。やがて奥沢に小さなアトリエを構え、日展へ。しかし最初は落選した。

日展は、ちょうど人形作家の堀柳女さんや、伝統工芸の松田権六先生などの後の時代だった。

入選六年目の一九七二年、「或るページ」で特選を受賞する。人形というとかわいらしいものが多かった時代、風でめくれる本のページを白く斬新な造形で表現した作品は大きな話題になった。杉山寧先生からは「あなたの作品は人形という名前が足を引っ張っているからもっといい名称を考えなさい」と言われたという。人形ほど幅広いジャンルのものはない。たとえば建築のなかに入るようなものに変わっていてもいいのではないかと思ったのだ。ヨーロッパの墓地で見た豪華な彫刻など、さまざまなイメージがあった。そして、日本画の素材であるもろい胡粉をいかに使えるか研究を重ねた。

「当時、工芸の山崎寛太郎先生は、何か面白いのが

先生方にそういうものを教わって育っていくところなんだと、私などはずっとそういう気持ちでいました。皆日展に対しての思いが非常に深く、そういう作家を見てきました。

一時は抽象や日本画滅亡論など、いろいろな芸術の流れがあり、日展の人も変わったのを描かされていた時代もありましたが、直ぐに元に返って、やはり日展は日展のカラーですと来ていますね」

毎年一万人を超える日展応募者と会員たちを率いる理事長の奥田さん。近年の日展問題について、「百十年もずっと守ってきたくださった日展の過去の作家たちに申し訳ないと思いました。世間にそう見られてしまったということは本当に残念だったと思います。でも回復して作品さえ本当にずば抜けて良ければどんな所においても陽が当たる。今は天才が見つけられない時代ではないですから。いろいろなことがあっても、最大限に命をかけた作品を皆が出してくればそれがよいと思うのです。

ただ、今は高齢化も経済的な問題もありますし、若い人も美術でないほうに進む人が多くなりました。どんなに機械化が進んでもデジタルになっても、人間の精神を込めた手作りのものは残ると思うのです。創作は自分自身をどんどん追い込んで、自分はいったい何なのかを探しているようなものですから、これからはそれが必要な時代になってくると思います」

今後のあるべき姿は海外にも向けられている。「かつて日本画が海外を目指したり、現代工芸などもドイツなどに海外展をしたりしていました。経費

いるぞという感じで、非常に目をかけてくださいました」。最初の頃は、工芸部門の竹や人形、革などは全部まとめて「雑」と呼ばれていたという。「私はそれがすごく嫌で、特選をいただいたときに山崎先生に思い切って『『雑』ではなく『人形』と呼んでいただきたい』と言ったら『それはそうだね』と言われて、その後はそれぞれの名前になりました。

また、日展のなかで日本画は一科で、工芸は四科、四番目というのが実に残念で、どなたにでも認めてもらうような作家になって、工芸はすばらしいということをきちんと証明するよう言われました。それでNHKの番組に若手として出演することになった



風 1974年 第6回日展特選

の問題などで難しいかもしれませんが、そういうことも考えていれば実現可能だと思います。やはり工芸の場合は特に、今、メトロポリタンで若い日展の工芸作家の竹の作品が大きなポスターになっていきます。そうしたことが刺激になって若い人がどんどん元気になって海外への道も開けてくるのではないかと思います」

そして話は作家としての原点へと帰った。

「文化功労者に顕彰されたときに三次の美術館で女流展を企画してくださいました。女性初の文化勲章受章の上村松園さんや片岡球子さん、三岸節子さん、秋野不矩さんなど、女性の作家を集めて私も入れてくださいました。あの時代で女性があれだけのものを残すというのは今と違い、強さも違うし、たいへんなことだったと思います」

中学生の時、上村松園のポスターを見て憧れたという奥田小由女さん。夢はかなうものと信じて行動してきたその生き方に多くを学ばせていただいた。



02 土屋 禮一

Reiichi Tsuchiya



日本画家・日展副理事長 事務局長



雲 1995年 第27回日展



水の風景 2010年 第42回日展

大学のある街、閑静な国立市の住宅街の一角にある、緑に囲まれたご自宅へ伺い、ルオーの自画像や棟方志功の作品、埴輪などが並ぶ重厚な雰囲気の間接間で話を伺った。父親の絵の制作を見て育った幼い頃から大学時代、師となる加藤東一先生との出会い、絵について考えさせられたさまざまなエピソードなど、話は多岐にわたった。

画家の父に反発しながら 多くを吸収した若き時代

岐阜県大垣市、中国の故事に由来する養老の滝のそばで生まれた。岐阜は前田青邨や川合玉堂など著名な作家を輩出しており、父輝雄氏は日本画家であった。父親は十四歳のときに雪の中で転んだのが元で股関節炎を患い戦争にも行けず、母親を早くに亡くし当時としてはめずらしい写真家の伯母の元で二十年間もの闘病生活を経て、川端龍子の青龍社に出品するようになった。毎日二回膿を抜いて痛み止めの注射を打つという辛い生活だった。結婚後、子供が生まれると、どうしても絵描きにしたかった。「小学校の時は絵を描かないと遊びに行かせてもらえず、心の中では絵描きにだけは絶対ならないと思っていました。ある時母から『禮一はどうも絵描きになりそうもないとお父さんが言ったことがあったよ』ということを聞くと、『ああばれていたのだな』と。父が生きていたら絵描きになつていない。高校一年の時、父親が僕を絵描きにするために死んだ、そういう感じがするくらいです」。また、

映画好きの父の松葉杖代わりになって一緒に出かけ、映画館の中で表現の喜び、悲しみの伝え方、自然の美しさの見せ方などを子供心にも学んだという。

高校を卒業すると武蔵野美術大学に入学し、形だけでも絵を勉強するといつて、東京に出て芝居をやるうと考えた。答えがほしくて劇団くるみに入ったが劇団を維持するだけで大変でバイトに精を出し、絵の方がおろそかになる。本当にこれでいいのかと悩み、もう一度絵と深く結びつくようになった。

父親は花鳥や静物が専門で、子供の頃からそれを毎日見て育ち、隣で絵の具ときや墨すりもやっていたので体に染みついていった。学校の課題は、画面上はそれなりに描けていた。ただ父親がやっていなかった裸婦になると描けなくなった。どうしたら感じたものを絵に描けるのだろうと悩んだ。人物は手の付き方や首が命の原点だから狂うとおかしい。自分で自分の力がわかる。モデル代は高いので手のデッサンを始めた。何枚も描くと手になってきて、手だけのスケッチブックを用意した。こうしてデッサンをする苦しみと喜びに出会えた。人物から始め、日展でも人物から出発することになったのだ。

Profile

1946年、岐阜県に日本画家・土屋輝雄の長男として生まれる。武蔵野美術大学卒業後、加藤東一に師事。1967年、「畑」で日展初入選。1969年、「水たまり」で日展特選・白寿賞を受賞。1996年より金沢美術工芸大学教授。2005年、「椿樹」で日展文部科学大臣賞。2007年、「軍鶏」で日本芸術院賞を受賞。同年、紫綬褒章受賞。2009年、日本芸術院会員となる。現在、武蔵野美術大学客員教授、金沢美術工芸大学名誉教授。日展副理事長、事務局長。

岐阜出身の加藤栄三・東一先生との出会い

学生時代、岐阜出身の日本画家加藤栄三、東一先生と出会う。先輩のつながりで会わせていただいたのがきっかけだった。「土屋君、岐阜か」の一言から生涯大事な縁ができた。それから加藤栄三、東一の兄弟と栄三先生の東京藝大の同期で義兄弟でもあった山田申吾先生。三人に作品を見ていただいていた。幸運なことに三人の意見はばらばらで、その表現がどれもその先生らしく、「参考になることはいろいろな人から勉強して、とにかく役に立つ人と出会いなさい」と言われ、「それで僕は僕になるんだなと思えました。先生方のスケッチについていくというホテルに泊まって、おいしいものが食べられる。絵を描かれる先輩方の横で見事な画面に魅せられ、私の中の真白な部分がまるで土が水で潤っていくかのように本当にいつも幸せな時間でした」。

一九六七年、二十一歳で日展に初入選したとき、都美術館の地下でカレーライスを食べていたら、目の前に山口蓬春先生が現れたことがあるという。「反射的に立って頭を下げると雲の上の先生が声をかけ

てください、僕の前に座ってコーヒーを御馳走してください。緊張の極致でしたが、その感動はいまだに宝物です。こうして日展でいろいろな人に会えて、みなさんに順番に育てていただけました。人間は誰かに会うか会わないかで大きく人生が変わります」。

その後、二十三歳の若さで特選を受賞。「少しずつ画商さんが声をかけてくださり、もらった画料で高い古本も買えるようになっていました。本当にありがたかったのですが、商品になる絵と僕が本当に納得する絵のギャップに、若いなりにこれではいけないと感じました」。菓子箱を持つて来年の展覧会は休ませてほしいとご挨拶に行つて、画廊の絵を描かない時代が続いた。春秋の日展だけに絞れて絵を描く喜びがまた何年か続いた。不安もないわけではなかった。

賞をいただいた後に落選もしている。東一先生へそのご挨拶に行つたら「俺は落ちたことないから人生片端なんだ。お前に人生先越されたな」と言われ、歌を教えてください。――春の夜の 闇はあやなし 梅の花 色こそ見えね 香やは隠るる――夜の梅は闇夜で何も姿は見えないが、匂いは隠しようがない。だから実力だけは隠しようがないんだ。世にわかられまいが、匂ってくるものだから自信をもて。力だけをつけなくてはいけないと。大いに励まされた。

「僕は木が好きで、日本一の梅やけやきを見に行きます。人間には老醜があるが、大木にはない。何百年何千年、木には威厳ばかり。そして見えている

めていたそう。観ていたら、絵はやっぱいいなと思って会場を出る頃には死ぬのを止めようと思ったという。絵のすばらしさは人の命を救うことがあるのだと。そんなことがあった。

時代は遡り学生時代、安保の後、武蔵野美術大学でも学生運動があつて、運動家が、「君たちは今こういう時代に絵なんて描いていいと思つていいのか」と言う。好奇心からそういう勉強会にも顔を出していたら、恩人の先輩が話してくれた。あるお金のないカップルが、暗い路地裏で千円拾つた。早速二人は肉屋で肉を買うのだが八百円分の肉しかなく、残つた二百円のおかげで誘われるようにその隣の花屋でバラを買う。その一輪のバラのおかげで二人の食事は今までにない幸せな食事であつたという。二人はお金がなくてもその後バラを買う事をやめなかつたという話だつた。「その時僕は絵という心の贅沢品がまだ深く絡んでいなかったのです。先輩の話がものすごく印象深かつた。『今絵を描いているときか』というアジターの言葉にひつかりそうになつたけれど、世の中の流れと自分の絵を描くことは違うこと。そうして先輩たちはしっかりと絵の歴史を築いてこられたわけです。生きることそのものが絵を描くことなんだと心に染みしました」。

日展一一〇年

最後に日展についての思いを語つていただいた。「日展はこれまで、保守的な考えと革新的な考えがぶつかりあつてきましたが、一一〇年先人がもたら

姿と同格の根っこが地中にある。僕たちは表に出るために根を張らなくてはいけないと思つているが、根を張ることが目的と思えばこれはむしろ面白い。絵を描くためではなくスケッチそのものが楽しい。贅沢品というのは必需品ではないけれど、心の贅沢が僕たち絵描きには全部必需品になつてしまった。そういう生き方に早く出会えたんです。

絵には全部人柄があらわれます。やっぱりこの人は育つなと思うのは、例えば、落ちたことが来年の意欲につながる、そういう人間性がそこに出てきます。心の贅沢を持つている人は心の中に自信があつて、自分が納得するように仕事をしているし、ものを一生懸命考へている人は一言がいいように受け取れる力を持つている。僕も入落よりは尊敬する何人かの先生にだけは恥ずかしい絵を見せたくないというのがありました」。

四十九歳で転機となつた墨の仕事

岐阜の瑞龍寺で、初の本格的な水墨画の仕事をしたいただいたのが転機となつた。東一先生に代わり、三年後の五十二歳が完成という約束だつた。いつか墨をやりたいかつたが墨はハードルが高く、悩んだという。

そのとき金沢美術工芸大学の定期健診で前立腺がんの症候があり再検査と言われたのだ。親父は五十二歳で死んでいるため、自分にも死があると感じに生々しくなつた。一週間後の検査で大丈夫だつたが、絶対的時間――死に向かつて気が付いた人が生きるといふ時間を持つ、というのが記憶にあり、描

してくれたのは母親のように温かく見守つてくれた団体展の組織のもつ大きさ、豊かさでした。しかし、ある自信、しっかりと自分の考へ方があるから未知なる不確実なものに戦いを挑める。日展にいることで不自由な人と、逆にいつも自由が感じられる人がいる。僕は若い頃は組織への疑問が少しあつたが組織にいるおかげで、我々は「個」をもう一度見直せると思います。

日展も東山先生や高山先生がいなくなられたけれど、いい絵が並んで、絵を描いている人の人柄や喜びが一点一点からわかる。戦後すぐに生まれた僕はいかに早く山に登るかという時代を生きてきたが、若い人たちは、田舎で自分らしい生活をして絵を描いていたり、身についた文化としてのレベルで絵を考へていく人もいる。そういう人が増えてほしい。何が本当に新しいのか、日本画はこうあるべきという深いところで生きる人が育つていかないといいです。

また動物や人間はどこにでも行けるが、自然や木は与えられた所で生きている。だから僕も日本に生まれたことの覚悟と同じように、入口は誰か先輩のおかげだが、日展でうまくいかないから他でうまくいくということはありえないと思う。思うようにいかないことをどう乗り越えるかが生きていることの醍醐味。若い人たちは「心の贅沢」という幸せなものに運命的に出会つたわけだから、これを大切にしたいです」

くべきだと決めた。それから研究のために中国で龍の作品を見て歩き、三年をかけて一点の仕事ができたということは幸せだったという。

絵の力について考える

金沢美術工芸大学には二十年通つた。「大変だつたけれど、いい勉強もさせてもらいました。若い世代は経験がない分まぶしいほど魅力的なものを見せられる。若い人と出会つたおかげで自分の時代を大事にしようというのがわかりました」。

定年の六十五歳の時、最後の出番で採点した後、東北の旅館の二階で地震に遭つた。東日本大震災である。天井から落ちてくる。窓ガラスが割れたときに、終わつたと思つた。宿のご主人から「逃げてくれ」と言われ、何も持たないで浴衣姿で飛び出して避難所生活になつた。寒くて震えていたら土地の人から毛布をもらい、生まれて初めて親切の有難さに出会つた。その時、自分の絵はこの毛布一枚の力と比べてどういう力があるかと考え込んでしまつたという。

不思議なことに前後して銀座で「先生」と声をかけられた。教えていた人だつた。その人が「先生のおかげで今生きています」と言う。聞くと、ご主人が友人の保証人となり、財産を全部取られて小さなアパートに移つた。うつ病になつたご主人を支え、仕事をしたこともない夫人が生命保険の勧誘の仕事をし、怒られ怒られ、もう死ぬしかないと追い込まれていた。そんなときに栄三先生の遺作展のチケットをあげたようだ。死はこの展覧会を観た後にしようと思



龍魚一阿 2012 年

龍魚一呼 2012 年

03 寺坂 公雄

Tadao Terasaka

洋画家・日展顧問

広島市内で生まれ育った寺坂さんは一九四五年、十二歳の時、原爆投下前に父親の実家の岡山に疎開し、命拾いをしたという。厳しい戦中戦後を経験し、夏目漱石の『坊ちゃん』の舞台ともなった松山中学に転校した頃、絵画に目覚めた。愛媛大学時代、日展に初入選。東京都の中学校美術教員、山梨大学教授、二〇一三年まで日展理事長と、常に全力で走ってきた寺坂さん。八ヶ岳南麓のアトリエは自身で設計し、四十二年になる。自然が破壊される危機感から日本の山の美しさを描く一方、都会の今も描いていきたい、双方が交響する美術をめざすと語る。



秋 木立ち 2014年 改組新第1回日展



激動の戦中戦後を経て、 絵画に目覚めた松山中学時代

父親は岡山出身で、四十一歳の時に広島の新中国新聞写真部長を辞め、市内に写真館と製版所を経営し財を築いた。NHKの目の前に会社と住居を構え、そこで寺坂さんは一九三三年、三男として生まれた。父親は書画の収集をし、長男に油絵を習わせていたが、戦争に行ったため、使っていたルフランの絵具箱を持って疎開したという。その後八月、広島に原爆が投下され、以前住んでいた場所は灰燼に帰し、知り合いはみな亡くなった。

「父は岡山の田舎に見渡すかぎりのたんぼを買ったのですが戦後の農地改革で全部取り上げられてしまい、母方を頼って松山に引っ越すことになったのです。長男は戦争に、次男は広島一中だったけれど軍需工場で働いて、末っ子の私は集団疎開で郊外のお寺に預けられたり、波乱万丈の若い頃でした。当時は自分自身、二十歳までしか生きられないと思っていました」

戦時中は「アメリカ人を見たら後ろからよじ登って首をかつきれ」という教育を受けて育った。しかし戦後は「アメリカ人と仲良くしろ」と全く逆のことを言われ、混乱し、何も信じられなくなった。そうしたなか、唯一信じられるのは物を作ることであった。松山中学（旧制）では美術部に入った。兄の絵具箱を使い、十三歳で油絵を始める。松原一先生のアトリエで描いていると、先生が耳元で「寺坂はうまいなあ。天才かも」とささやいた。中学二年で絵に夢中になり、才能を開花させ、美術部長を務めた。旧制松山中学校の最後の卒業生となったが一方、同窓生にはそうそうたる文化人が揃っていた。たとえば、正岡子規、秋山好古・真之兄弟をはじめ、同じクラスには広告批評の天野祐吉、演劇の安西徹雄、一級下には伊丹十三や大江健三郎がいた。美術部の先輩には二浪して東京藝術大学に入った中川宗弥がいた。夫人は『ぐりとぐら』の絵本を出した中川李枝子であるという。音楽家や評論家など、さまざまなジャンルで活躍する文化人を輩出する自由な風気がそこにはあった。

Profile

1933年、広島県生まれ。1954年、「画室の隅」が光風会展初入選。同年「室内」が日展初入選。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒。1988～1999年、山梨大学教授。2001年、「デルフォイへの道」で日展文部科学大臣賞。光風会常務理事。2004年、「アクロポリスへの道」で芸術院賞。同年芸術院会員。2013年日展理事長。現在、日本芸術院会員、日展顧問。光風会理事長。損保ジャパン日本興亜美術財団理事。

愛媛大学に授業料免除で入学。 恩師に押され日展へ

その後、松山東高校では愛媛美術展に出品し入選。松山市内高校連合展を結成し、代表として皆を率いた。

十八歳で、東京藝術大学を受験するが、洋画は大変な倍率でかなわなかった。戻って地元で松山城を描いていると、後ろで見ている人に「君、うまいね。愛媛大学に來ないか。今から苦学するよりも来たら応援する」と言われ、「お願いします」と答えた。成績優秀者として授業料免除、奨学金で愛媛大学教育学部美術科に入学・卒業したのだ。「その代わり年間八回東京へやってきました。堀君という、後に渋谷の日赤小児科部長になった東大の医学部生が夏休みに松山に帰るので、私は七、八月の家賃を払って東京に出て、研究所を回って絵を勉強したんです」。

愛媛大学では、四国国立大学連合展を企画し代表ともなった。才能を高く評価した木村八郎先生が「日

展に入るよ「東京に行かせなさい」と母親を説得し、墨書の紹介状を持たせてくれた。絵を五枚も背中に担いで、松山から普通列車で二十八時間かけて東京へと向かった。車中で四食食べたという。大学二年のときだった。しかし、東京の先生が言う作品を出したところ惜しくも落選。この年、愛媛県美術展の洋画部門でトップの知事賞を受賞。五万円の賞金を得た。翌年、光風会に初入選。翌年の愛媛県美術展では、家のふすまを外して横にして日本画でガスタンクを描き、また知事賞を受賞。皆を驚かせた。そして日展に静物画「室内」で初入選する。さらに翌一九五五年に出した作品は特選候補にも挙がった。以後連続入選し現在まで毎年出陳を続けている。

一九五六年に愛媛大学を卒業すると、東京都板橋区の中学校の美術教員となる。光風会と日展に毎年入選を続け、五八年には、職員室で隣の席の体育の教師であつた現夫人と結婚。その後三女に恵まれている。

一九六二年には早くも二十九歳で特選を受賞する。カニを机上に置いて描いた「カニのある静物」である。翌年は無鑑査となった。

恩師の大澤海蔵先生が亡くなった翌年一九七三年には、オマージュとして「武蔵野愁林」を描いた。「だいたいこういう世界は学園があります。私の場合は藝大でないですから、反発していろいろなことをやりました。藝大でない、学園ない、財もない。大学も国家のお金で行かせてもらった。嫌なことは嫌という、おかしいことはおかしいですよ。偉い先生を尊敬はしているけれど、曲がったことを我慢



デルフォイへの道 2001年
第33回日展 文部科学大臣賞



山麓春隣 2016年 改組 新 第3回日展

して「そうです」とは言わない。なぜかというと、それは戦争終戦を越えてきたから。絶対服従の戦時中の生活を知っていますから、やはり戦争は嫌だと言いたい。言わなくてはいけない。筋を通す。その国や組織を滅ぼさないためには本本当に優秀なトップが引つ張っていくことです。多数決よりもそのほうがいい。ただトップが年を取ってきたり、権力を持ちすぎると多数決をしたほうがいい。うまく使い分けられいいということです。作家は自分中心に物事を考えるので、組織のことも伝わりにくいです。だから外部の人のほうが客観性があります。私は、日本の国に経済的に応援していただいたので日本の国にお返ししたいと思っています」

一九七六年には、八ヶ岳の甲斐大泉駅前にアトリエを作る。これも松山中学時代の同級生が甲斐大泉で不動産業をしているご縁だった。百三十坪ほどの土地を買い、自分で設計図を引いて建てたアトリエは今年で四十二年になる。

一九八八年には山梨大学から教授として呼ばれた。「大学には週に二回行つて春・夏、試験休みがあつて、制作するのによかった。大学院にしてもらうための活動をして功績があつたのか、今も山梨大学名誉教授という称号があります」。

九十年代末からは古代ギリシャや彫刻のイメージシリーズを描き、二〇〇一年には「デルフォイへの道」で日展の文部科学大臣賞を受賞。二〇〇四年には「アクロポリスへの道」で日本芸術院賞を受賞している。

今、山の美しさを描いておきたい

現在、日展と光風会に作品を出しており、日展は山の風景を、光風会は肩の力を抜いたものを出している。日展ではオール日本を相手に、日本の風景は美しいということを知らせようと考えている。

「アトリエのそばは、以前は木がうつそうとして森の中に二、三メートルも入ることができませんでしたが今は三十メートルほど入っていける。大陸からの酸性雨、黄砂などの影響と温暖化で日本の山が荒れたんです。古来の花は弱いので全部枯れ、外来種の花が蔓延しています。私は今のうちに孫子のために日本はきれいだったということを絵に描こうと思っている。若い頃は野心があつて今までの日展にない絵を描こうとか、反日展だったんですが、日展で大臣賞をもらったときから変えました。今の時代に来たら今じゃないかと。保守的で古いと言われる

けれど、いいものを残す。その中に革新を少し入れればよいのではないかと考えています。日本の野山を日本画の作家は描くことがあるけれど、洋画の作家はあまり描かない。私は丸や三角などの抽象を勉強していて構成ができるので、新しいものをやろうということをして先に考えない。今、現在のテレビや新聞を見て今の本を読んでいる現代人が絵を描いているのだから、古い新しいは言わなくてよい。もちろん長い歴史や経験による引き出しの中からいろいろなものを自由自在に取り出す。日本の新しいわびさび、日本人がもつ良さを、風景を借りて描こうとしています。今、山の美しさを描いておかないとどんな山が荒れてきている。だから早く地球温暖化を止めてほしい。日本古来の繊細な美しい花がなくなりかかっています。これは大問題です。今や高速道の周りにきれいだと思つてメキシコの花の種をまいたのがあるいろいろな所に飛んで行つて咲いていますから。白樺の周りはピンクや白の楚々とした花しかなかったのに、今はメキシコの花が咲いている。それはないだろうと。絵だから描きませんけれど」

自分の生活にも絵にも嘘をつかない 都会と山を往復して交響する美術を

今後について尋ねると、「昔、夜はろうそくの明かりで過ごした。ところが今は二十四時間明るい所がある。特に夜の明るい風景は都会でしかない。最近はクリスマス時期には街路樹にLEDをつけてちよつと絵になる。安藤広重がかつて昼間に江戸の名所を描いたけれども、現代の名所を少し描こうと考えています。都会の仕事と山の仕事、両方を往復して交響する美術を考えたい。自分の生活にも絵にも嘘をつかないのが私の精神です。現代の人間はたまに頭を休めて考える必要もあるから、山奥に行つて鳥の声で目を覚まし、雨が降ったら本を読み、天気になったら絵を描きに出るという生活もいいです。でもそこだけでは感覚が鋭敏にならないから必要に応じて都会の真ん中で闘うのも必要。都会と山麓の生活を音楽のように交響していくのが、今やりたいことです。そうすると両方の仕事が発展する。なんでもアンチテーゼがないと物事は進まない。否定ばかりもいけない。融合させて前に進む。前に進むためには弁証法のように、仕事のためにわざわざアンチを自分で作つて、自分で元気づけています」。



東京都北区に生まれ育ち、現在もその地で彫刻家として活躍する川崎普照さん。戦争の惨禍を潜り抜け彫刻を始めたのは二十七歳。遅いスタートを取り戻すために、一日中、粘土と格闘した。義父である彫刻家の平野敬吉氏から木彫と彩色を学び、仕事で出会った彫刻家平櫛田中氏の彩色の影響も受けた。デビュー後は日展の特選をはじめ、日本芸術院賞、旭日中綬章受章などを重ね、現在八十六歳である。

棚には木彫の原型が並び、北側の高い天井から光の入る明るいアトリエでは、夏も冷房は入れないという。粘土が乾燥してしまつたためだ。黙々と制作に打ち込むが、いつも明るくおほらかなお人柄である。



春愁 1999年 第31回日展

Profile

1931年、東京都北区生まれ。武蔵丘高等学校卒。1952年、三美工芸に就職、1959年、彫刻家として活動をはじめる。1993年、「未来への讃歌」で日展内閣総理大臣賞、1998年「大地」で日本芸術院賞受賞。日展理事。2004年、日本芸術院会員。2007年、旭日中綬章受章。現在、日本芸術院会員、公益社団法人 日展顧問、公益社団法人 日本彫刻会常務理事、茨城県美術展覧会名誉会員、公益財団法人 北区文化振興財団理事。

戦後、家のために働き二十七歳から彫刻を

「振り返れば、私の小学校時代は音楽と図画と工作がなければ、本当に楽しかったです。それほど、その世界が好きでなかった」と語る川崎さん。ではなぜ彫刻へと導かれていったのだろうか。

川崎さんは昭和六年、東京都北区で六人兄弟の長男として生まれた。時代は戦争に向かっていくさなか。北区の自宅から富士見台にある学校までの長い距離を毎日歩いて通った。帰り道の途中、高田馬場で、飛んでいる戦闘機に乗っている操縦士の姿や爆弾が落ちるのを見た。しかし、死ぬのは怖いと思っていなかったという。

「二年上の人たちは特攻隊に行っていました。そういう世代です。終戦当時は中学二年で、板橋の駅前の防空壕を掘っていました。その日、『重要な放送があるからお昼までいい』と言われて、何のことがわからなかった。そのまま家に帰らず田舎の農家にアルバイトに行きました。その頃は大根でも何でも売ってくれないですから労働力を提供して、いただいた野菜をリュックサックに入れて帰ると親が喜んで。汽車は超満員で網棚に乗って帰りました」

高校の成績は特、上下十段階に分かれていて、百七、八十人の中でいつも一番上の特であった。将来は一橋大学へ行き、実業家になって好きな本を買おうというのが人生設計だった。しかしどうしても家の事情で大学進学を諦め、十年ほど家のために働くことになる。

「当時はアルバイトといっても家庭教師か新聞配達でした。勤め先の平野敬吉氏が平櫛田中先生の彩色をやっていて、それで『田中先生の彩色を手伝ってみろ』と言われ手伝っていました。できるようになったら『すぐお金をくれるから先生に届けて来い』と。僕が二十代で先生が八十代でした。彩色を届けて先生からいただいたお金は想像よりはるかにあって、彫刻を覚えていたら得するかなという気持ちで始めたんです。ですから、美術を志してというのはなかったんです。正直言って」

その後、太平洋美術学校の夜学に通って、初めて粘土を触った。二十七歳と八カ月が過ぎていた。しかし入ってから猛烈に勉強した。生徒がお互いに顔のモデルになって作り、石膏をとったり色をつけたりして学んだ。

「そして『作ったら展覧会に出すものだ』と言わ

れて、僕の周りは日展、日洋会、太平洋会とあって、最初に日洋会に出したら、奨励賞をくれたんです。賞金は千円と石膏二十五俵でした。石膏屋に八百五十円で買ってもらってうれしかった。それから始まったわけです」

始めたのが遅かったため、どうしても少し余計にやらなければついていけないと思い、モデルはずいぶん頼んだという。「バーやパブに行くときみな女の子と話しています。僕はそこでモデルの交渉をして三人か五人にひとりモデルを決めていました。もっと簡単なのは大学に行つてスポーツ選手を見つける。男ならもっと安いです。それでずいぶん作りましたね」

周りを見渡しても美術関係者は誰もいなかった。やがて勤め先の彫刻家平野氏の娘さんと結婚することになる。「作家としての影響は筆使いの達者だった義父のほうかはるかに大きく、義父の後を継ぐような形になりました」。ただ平櫛先生が百七歳で亡くなった後、みなが彩色を頼みに来たという。

若い頃、平櫛先生について出かけると、法隆寺や中宮寺など、年に一回しか開かない秘仏を開けて見せてもらえることがあった。「彩色の参考に見たほ

うが勝ちだと思つて、すぐ飛び込んで見ると、『その若い、まず拝んで、先輩の後に見るように』と言われました」。二十代三十代の頃、そうした経験を積んでいった。

当時は義父のアトリエを借りたり、学校で制作をし、自分のアトリエを建てたのは、昭和五十年頃だった。忙しいという感覚はなかったが休みはなく制作を続けた。

この世界は教えるものでも 教わるものでもない

初めてプロのモデルで制作を始めて八割できた頃にモデルが来なくなつたことがある。「女房が子供をおぶつてモデルを探して連れてきた記憶があります」。初入選は昭和三十六年、三十歳のときで早かった。二十七歳から彫刻を始めて三年である。その代り、粘土をいじらない日はなかった。一方、食べるために、朝五、六時から自ら半日モデルのアルバイトもした。

「ワンポーズ百円くらいで六百円もらえるのがすごくうれしくて。十二時前には寝たことなかったですね。彩色もあれば風呂敷に絵を描いたりブローチを彫つたり」

初入選から四年目に特選を受賞。当時は賞金が一万円であつたという。

「僕は一回しか特選をとつていないのに翌年が無鑑査で、すぐに委嘱にされて、四十三年、八年めで審査員になつていた。ちょうどタイミングが良かった

ブロンズで売れるのは九十五パーセント女性だという。

川崎さんは木彫も手がける。粘土で原型を作るのは同じである。ただ木を彫つても彩色ができる人がいないという。「独特の眼が必要で、仏像でも白鷺時代、天平のものはいいですね。鎌倉になると落ちると思つています。天平、白鷺を参考にしますね」。

「年間の制作は教室でヌードが二つ。首が二つ、稼ぐ仕事はやらなくても、アトリエでは大きい作品を半年くらいかけて制作します」

地元では上級中級初級と小さい子どものための教室を五つほど持つている。忙しい毎日で、代わりたくても代わる相手がないそうである。

自然を追求する

川崎さんが制作にあたつて常に念頭においているのは「自然」である。

「小さい頃から山が好きで、赤ん坊を背負つて山登りしたくらい自然の姿が好きです。女性のヌードも共通したところがあるんですね。ですから今でも気をつけて自然を見るようにしています。自然を追求するような作品を一生かかっても作りたい。自然がもっている構造の美しさを学ぶことが何よりも彫刻の基本であると思います。その偉大さ不思議さを作家として素直に訴えられればと思い、また大切にしたいと思つています」

また彫刻について次のように語っている。
「例えば花を見て花そのものの形状を考える前に直

だけです。ただ十人いれば五、六人は負けたくないと思うではないですか。学校に行つてもこの世界は教えるものでも教わるものでもなく、本人の努力次第なんです。努力が作品に出る。自分でわかうとしないとかわからない。若い人の作品に手を加えると、そのときはいいが、その後戻つてしまう。それは本人が何も学んでいないということです」

美術に対する理念を考えたことはなかったという。
「ずいぶん長い間デッサンの研究ばかりです。結局はデッサン力しかない。そればかり勉強しました。今でも考え方は変わっていません。これはというきっかけはなく、一回一回をきつかけと考えて取り組んできました」



微風 2016年 改組新第3回日展



未来への讃歌 1993年 第25回日展内閣総理大臣賞

感的に美しいと感じます。造形はこのような生活体験で生まれる驚きや喜びを形にして感情と生命感を独自の技法と素材によって表現する世界です。

人体をフォルムとして捉え、その生き生きとしたものを造形化し、さらに対象の心を感じ取ることは彫刻では大事なことです。

人体はこの世の中で最も複雑で微妙で特に若い女性の体は美しい。彫刻の世界ではこのように素直な対象は昇華させやすく、僅かなバランスの乱れもよくわかり難しい仕事ですが、人間の内部に眼を向ける上で格好のお手本であり最高の自然なのです」

ヨーロッパで古典に出会う

審査員になつた後、ヨーロッパで彫像を見る機会を得た。強烈な印象を受けたことが作品に生かされていく。

「昭和四十七年、今から五十年前に三十一日間、ヨーロッパ各国を旅しました。初めてロンドンの美術館やルーブルに行つて作品を目の当たりにしました。ギリシャ、イタリア、フランス、イギリス、スイス、オランダです。その四、五年後にも、お寺の僧侶がヨーロッパで勉強したいからということで一緒に行了きました。向こうでは、こんなにできる人がいるのか、これに追いつくのは大変だと思ひました。帰つてきてもつとやらなくてはだめだと思ひました。ギリシャ、イタリアがよかつたですね」

今年の作品について何うと、「今年は女性ですが、モデルが来てからでないと決まりません。モデルを選ぶことはなく、見てからいろいろ考えるわけです。頭の中で思つていたのと全然違う人が来ることもあるがそれもよいと思つています」。

初日は一日中いろいろなポーズをしてもらう、そうすると思ひがけずその人の特徴が出るものがある。粘土をつけるのは三、四回後からという。

人物像でも男性女性とは全然違い、男性は筋肉などよく見えるのでわかる。男性像なら、全日本ボディビル選手権大会で全国優勝した人をモデルにした。実際よりも脚は長くする場合もあるとのことだ。ただ、女性のほうがまとまりやすく、置けるような

努力は作品に現れる

日展をめざす若い人へのアドバイスを伺つた。

「人間はみな違いますが、若い人にはもうちよつと自分を生かす努力をしてほしい。世の中は昔より便利になつて楽をしすぎです。人の意見を聴かない、自分で考えない、努力しない。僕の子供のころは『人間は人の話をよく聴いてかみしめて努力しなさい』と言われ、それが基本だった。今はそれがほとんどない。氣に入らないことはやらない、ではなく、努力しないとだめです。努力した人の作品は見ればわかる。この仕事には地道なものが必要ですね。人間がやっているから。」

また個展は自分だけです、団体展でいいことは、いろいろな人の作品と比べて勉強できます。日展は出品料だけですし、人の作品と比べられる展覧会は勉強になりますね」

最後に鑑賞者へのアドバイスを伺つた。

「それは押しつけるものではないと思ひます。全員違います。彫刻には説明はいりません。花に接したと同じように自由に見てくだされば十分なのです。各自で考え方が違うし。一＋一＝二みたいにかないんです。日展では私は彫刻以外にも全部見て自分なりにいい悪いを決めます。書を見ても、いろいろな考えがあつて面白い。絵でも工芸でもデッサン力をもとだと思つていますし、昔からそれは変わらないです」

05 大樋 年朗

Toshiro Ohi

陶芸家・日展顧問



金沢で三五〇年の歴史をもつ大樋焼はロクロを一切使わず、手で捻り、飴釉を特徴としている。その十代目となる大樋年朗さんは文化勲章を受章。伝統と現代を融合させた新しい大樋焼を提案している。武家屋敷を再現した大樋長左衛門窯の敷地内には美術館もあり、初代から現代までの大樋焼作品と加賀藩に縁の深い茶道具類などを展示している。伝統ある陶芸の家に生まれた八十九歳の大樋さんが強調するのは、「創」とは創意工夫であり、伝統ではないということだった。



夢見る童 2014年 改組新第1回日展

Profile

1927年、石川県に、九代大樋長左衛門の長男として生まれる。1949年、東京美術学校工芸科（現東京藝術大学）卒業。1950年、「双魚置物」で日展初入選。1982年、「歩いた道」花器で日展文部大臣賞。1985年、「『峙つ』花三鳥飾壺」で日本芸術院賞。1988年、金沢大学教授就任。1999年、日本芸術院会員。2004年、文化功労者。2008年、日展顧問。金沢学院大学副学長就任。2011年、文化勲章。現在、文化勲章受章者、文化功労者、日本芸術院会員、石川県名誉県民、金沢市名誉市民。1987年大樋焼十代長左衛門襲名、2016年、大樋陶冶齋襲名。日展顧問、現代工芸美術家協会理事長、米国ロチェスター工科大学名誉博士、台湾国立台南芸術大学名誉博士。

た学校で学んだ者が東京の美術学校（現東京藝術大学）を狙って来るわけです。東京、大阪、京都、名古屋、金沢で五つの都という言葉があります。そこにはお能とお茶の文化があり、伝統的に古いものから掘り起こして、現時点の作家に注文して作るといふ、根っこがあります。五都の中で金沢は、前田家のおかげで工芸の産地として大きな組織だったかもしれない。私のところは初代から茶碗が主力で、基礎的に学問的にやるというものではありません。しかしながら私は高校卒業を待たず東京の美術学校に行きました。昭和十九年のことです」。

東京美術学校の鑄金科へ

東京美術学校には陶芸という科目がなく、鑄金と彫金と鍛金があり、鑄金に入った。そこでは針金をデザインする、図面で描く、ブリキを切ってそれを板に張り付けて型を作らなければならない。だから一ミリの問題点も出てくる非常に工学的な面もある。鑄物では銅像、置物、レリーフ、花瓶、香炉、なんでも作る。

受験の時、工芸科だけは構成図案の試験があつ

た。正円直径三十センチに家紋のごとき文様を描くというもの。家紋はシンメトリーで、六時間かけて描く。人のものを見て真似する者はいない。みな誇りを持っていた。デッサンというのは空気を読まなければならぬ。入学後のある時、図案科の学生は教授から「お前ら点数が悪い。鑄金に一人九十五点のやつがいる」と言われた。それは大樋さんのことだったという。

美術学校時代は京都から来た加山又造さん、勅使河原宏さんが同窓生で仲良くしていた。学徒動員も軍事訓練も一緒だった。

上野の山が赤くなった—— 過酷な戦争をくぐり抜けて

昭和二十年の春に学徒動員で広島県の呉に行き、大尉中尉少尉のいる士官宿舎に泊められた。「誰も負けると思っていないし負ける材料が表に出ない。全部陸海軍で仕切っていてマスコミもその通りに書いた。終戦は二十年の八月。代々木の練兵所へ行くために鉄砲を持って国電に乗ったこともありました。それでも町には喫茶店と映画館があった。銭湯



金沢の陶芸の家に生まれて

陶芸の家に生まれ、石川県立工業学校へ進んだ。この学校の歴史は古く、当時、日本の基幹産業は焼物、塗り物、織、染で、納富介次郎という官僚が、政府に働きかけて一八八七年に設立し、校長になった。焼物・漆・図案のクラス、染と織と木材工芸のクラスに戦時中は応用化学が加えられた。その後、隣の高岡に金属と漆の学校、有田に焼物の学校を、高松に彫金や漆、金属の学校を作った。「そういつ

もあつた。日比谷の音楽堂では音楽もやっていた。文部行政というものがそこまで取ってしまつたら終わりです。これだけは僕は立派だと思います」。

戦時中は下宿を探すのが大変だった。大空襲では、上野の山が赤くなり、大空襲で時計の秒針までわかるくらい明るくなった。十時頃に必ずB 29が一周する。空襲で、ガス、水道、電信柱、いっぺんに全滅。しかし九死に一生を得た。何か虫の知らせで、朝十時頃、下宿屋の前の防空壕に入つて助かつたのだ。防空壕は穴を掘つてミカン箱の板で上をかぶせてあるだけのものだった。

卒業後に京都陶磁器試験所へ

美術学校を卒業すると、京都の陶磁器試験所に行った。「京都は文化があり、そういう意味ではナンバーワンですからね。そこで多くの美術館を巡り、仁清、乾山を学び、まるで日本文化のすべてが、この地にあるように思えました」。

陶磁器試験所にある図書館は普通書庫にまでは入れてくれないのですが、私があまりに熱心に通うので、係の人は根負けしてしまいました。そこで世界の焼き物の本や日本の伝統の本を見て大いに刺激を受けたわけです」。

置物で特選を二度目は鶏のモチーフで

その後、金沢に戻ると、家の裏に染物の先生で日展の作家がいた。審査員を一回やった人で、どうせ

スライドで写真を撮っていたので、帰国後は全国から講演に来てくれと言われました」。

外国の焼き物については、学生時代から積極的に学んでいた。「外国の書物は丸善に行つて買いました。本は好きでしょっちゅう神田に行きました。昔の学生は不良になろうと思つてもなれない。バーもなにもない。だから神田しか行く所がないんです。神田に行つて本を見て、それから美術館などを回つて歩きました」。

昭和四十八年、愛知県が中日国際陶芸展が始まつた。「当時、日本のあけぼの時代を感じました。これで日本民族が立ち上がらなければならないと『よしやつてやる』という気持ちになりました」。

創意創作

『「創」ということは創意創作で、伝統という問題ではない。伝統というのは日本人は好きですね。それはそれとして立派なもので評価すればいいが引つ張る必要はない」。

例えば伝統のもので箱がある。あれは昔ちよつとものを入れたり、大きな箱だつたら衣装箱のような、実用があつて作つたものですが、今はいらない。美術学校のときに前田泰次という東大を出た先生の工芸史の講義があり、その時すでに面白い話が出ていました。いわゆる具象よりも抽象、伝統よりも革新という時代。その先生が、『今の時代、飾り箱に何を入れるのですか。昔と同じものを作り続けることを君らどう思う』と言つた。『用途の無いものを

作るのなら日展に出したらどうかということになつた。家の窯は温度が低く大きなものを作るわけにいかないの、小型で金魚の置物や魚の流線型のもの、犬や猿など作つた。最初は「双魚置物」で初入選した。「僕の置物はスマートだからみんながすごいなと言つたらいいです。魚のうろこは数えません。魚と一緒にのものを作つても何もならない。それが造形なのです」と語る。

次に「特選という制度があるのでそれを取らなければならぬ」ということになって、置きものだけで四年間ほど作つた。昭和三十年に作つたのはレリーフで鳥が飛んでいるもの。それが準特選の北斗賞を受賞し、翌年三十一年に特選を取つたら、みなびつくりした。「石川県の金沢ですごい奴がいる」と、一躍有名になつてしまつたという。

「そうなら僕も頑張らなければならぬでしたね。その頃日本とロシアの初の国際陶芸展があり、僕の北斗賞の作品は買い上げられて、今ロシ



作る必要がない』。そこまで言つた貴重な話でした。具象よりも抽象、抽象よりもつとモダンなものはなんであるかという時代でしたね」

伝統を飲み込んで「今」を創る

一一〇年を迎える日展について尋ねた。「僕には曖昧に使われることが多い伝統という言葉には抵抗があります。今様に改革を続ける。絶えず改革を続ける。何がいいか、どうすればいいか、危機感を持つて続けるということでしょうね。堂々と。常に堂々と。長く引つ張るものじゃない。決断もある。同じ平均的なところにおいて堂々とすつきりとした審査会をやるということではないでしょうか」。

金沢では、金沢大学、金沢美術工芸大学、金沢学院大学で長年教鞭を執つた。



船袖 独楽 金銀彩丸壺 2016年
改組新第3回日展

ア、レニングラード美術館にあると思います。それからは本窯を築き、ずっと大きなものばかりです。今は金彩流行りですが、二回目の特選は鶏をモチーフにした四方の大きな作品で金箔を使いました。先駆けて光るものを取り入れた珍しい作品でした。

僕は鶏を養っていたからよく写生をしたし、鶏がどんな顔かわかっている。胴体二つに首を三つつけてトサカが飛び出ている。動くものをとらえこんなものを表現する人はいなかった。だから引き出しをたくさん持っていたというのは事実です。無から有をいかに創るか。想像することは作家の命です」。

一九六五年に海外へ 日本のあけぼの時代

その後、さらに見聞を広めるべく、昭和四十年、三十代後半の時、ヨーロッパへ行く機会を得た。二十何か国で、デンマーク、イラン中近東、スペイン・ポルトガル、フランス、ドイツ、ロンドン、イギリス、ローマからギリシア全部回つて一か月くらいかかった。その頃はアンカレジ経由。ドイツの首都に着くはずが飛行機の都合でケルンに着いた。このとき見たケルンの塔のイメージは、芸術院賞受賞作品のヒントにもなった気がします。『これは日本人の作品でない。外国人かと思つた』と言われました。ケルンからベルリンに行つて世界中回つてきました。見たいのと、ただ見るのとではたいへんな違いですから。意欲的に見たいと積極的に回りました。

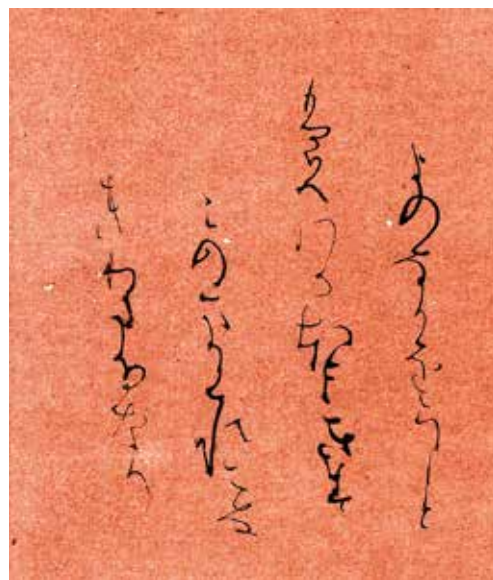
「これから美術を学ぶ人たちは、『どうすればいいか』を絶えず考えなければならない。僕が学生に教えたのは、制作のテーマは『風』だ。風というところうそくに火をつけて燃えているのも風です。『空気』でもいい。表現できないものを課題し、考えさせることが大事です。それは僕の問題でもあるわけです。図案の本を見てもそこまで突っ込まなければいけない。松を見て松の木を描きましたというそのまの絵ではだめなんです。テーマを与えて、それから意匠化することです」。

今の若い人もなかなか面白いものを作っています。作るといふことは粹なものを作らなければいけません。平安や室町、そんな古いものをつくる必要はない。それを飲み込んで他のものを作ればいい。時代は明治、大正、昭和、平成と来て、何を作るべきか、何を作るつて『今』を作るのです」



大槌花三島壺 時つ 1985年 日本芸術院賞受賞

新神戸駅から車で三十分ほど、閑静な住宅地の一画に井茂圭洞先生のご自宅がある。神戸で生まれ、小学校時代は戦争で姫路に疎開。医学へ進むか家業を継ぐかと考えていた矢先、きれいな字を書きたいと思って入った高校の書道部で生涯の師となる深山龍洞先生に出会う。それが全ての始まりだった。日展初入選は若山牧水の和歌である。若き時代に培われた書への真摯な姿勢が、ひとすじの道となり、貫かれていった。



ほととぎす（良寛 現代書道20人展 2002年）



Profile

1936年、兵庫県生まれ。高校在学中に書を始め、1954年より深山龍洞に師事。1957年、京都学芸大学(現・京都教育大学)美術科書道入学。1961年、日展初入選。大学卒業後は高等学校の書道教師となる。1969年、退職して書に専念。1977年より17年間、母校である京都教育大学の助教授を務める(1991年教授)。1977年および1979年に日展特選を受賞。1993年、日展会員賞。2001年、日展内閣総理大臣賞を受賞。現在、日本芸術院会員、日展副理事長、京都教育大学名誉教授、読売書法会最高顧問、日本書芸院最高顧問、全日本書道連盟名誉顧問、全国書美術振興会名誉顧問、兵庫県書作家協会顧問、一東書道会会長。

戦後めざした医学の道

昭和十一年、姉二人第一人の長男として神戸で生まれ、戦時中は三年ほど姫路に疎開していたという。「疎開中は艦載機による機銃掃射の心配がある中、畑の中を歩いて小学校へ行かなければなりませんでした。私は当時右足が結核性関節炎で松葉杖をついていたのでそんなに早く歩けず、学校に行けなかったのです。命には関わりませんでした、治療もよくできず、そうした自分の苦しい経験を少しでも他の人の役に立たせたいと思い、医学の道を考えていました」

医学部を目指そうと兵庫県立兵庫高校(神戸二中)に入学。しかし、進路指導の教師からは解剖ができて体の中がわからないと医者にはなれないと言われていた。解剖は苦手だったのだ。

高校一年で深山龍洞先生との出会い

一方、入部した書道部で出会った深山龍洞先生にたいへん感銘を受けた。校長から専任を所望されてもそれを受けず、しかし学校の授業と書道部のほか、空いた時間は一般の人に書道を広めようと企業

を回ったり、先生の日常は忙しく、たいへん充実しているように思えた。

「一生懸命教えていただけるし、教員室へ行くと熱心に書道の話をされる。当時は急速に西洋文化が取り入れられ文字もアルファベットに替えるという人までいた時期ですから、先生には次の時代に書道がなくなるという危機感があつたと思います」

しかし、一年の終わりに深山先生は高校を退職された。当時先生は五十一歳だった。不思議に思っていたところ、その秋に先生は日展の特選を受賞されたと伺い、疑問が氷解した。その後は先生の一番弟子である難波祥洞先生が専任で来られ、三年まで習った。

その後も深山先生に時々お会いすることがあり、ある日、「私は伝統文化の書道を続けるために一生懸命やっている。できたら君もそういうことをやらないか」と言われた。不躰にも「書道で食べていますか」とお尋ねしたところ「高校の先生にはなれる」とのお答えだった。実家は神戸の果物の卸売市場の仲買人をしており両親は後を継いでほしいと思っているし、医科に行きたいと言いながら、半分は後を継ぐことを考えていた。

そうしたなか尾上柴舟先生が審査長の第二回日本

学書展、また日本書藝院学生展でもかなの第一席を受賞。輝かしい成績を残した。しかし、自信がなかったという。先生の手本とご指導でもらっただけだと思った。まして書道で生きていくという自覚もない。最終的には先生から「書道の仕事をしてください。書道は私が教えるから、免許状はしかるべき公の所であつていらつしやい」と背中を押された。「それで免許状をいただける京都学芸大学へ進学しました。考えてみますと医科はどうも自分に向いていない。深山先生のような充実した人生を送りたい。そして先生のお言葉。いろいろ重なって、書の道を選んだのです」。

京都学芸大学美術科書道へ進学

大学入学後は神戸の深山先生の塾へ通うようになった。しかし、すぐに「もう手本は書かないよ」と突き放された。「何と愛情のない先生かと思いました、そうではなかった。ありがたかったのです。ずっと手本をもらっていたら、ものまねは上手になっても自分で書けるようにならなかった」と振り返る。

手本はただけなかったものの、もちろん勉強の仕方は示され、作品の添削をしていただいた。「先

生はその作品の一番悪いところを一か所だけ直されるので、次に行くまでにそこを直すと、その時の一番悪いところを直していただける。つまり、何回もの添削の結果、最終的には手本をいただいたのと同じになります。もちろん最初から手本をいただいて制作するのと、一か所ずつ何度も添削していただくのは一見同じように見えるが、まとまったものをまる覚えするのでは応用がきかないのと同様で、実力のつき方が全く異なると感じております」。

日展には、大学の二年から挑戦するように指導を受け、自分なりに書いて出品して、二、三、四年生と落選し、卒業した秋に初入選。書いた和歌は、若山牧水の「けふもまたこころの鉦を打ち鳴らし打ち鳴らしつつあくがれて行く」。毎日心を奮い立たせて自分の思いに憧れて生きていくという、自身のモットーにもつながる歌であった。

高校教員の後、母校の大学でかなの教師を

大学卒業後、私立の女子校の書道教員として九年間勤めた。日展は三十六年から八年間連続で入選したが、九年目の改組一回展は落選。それが転機だった。「このまま高校の先生をやっていたらだめだ」と思い退職届けを出しました。当時は塾が盛んな頃で、家内と二人で教えていこうと、選肢はそれしかありませんでした」。

その八年後に、思いがけず母校の大学にかなの教師として奉職の機会を得た。専任で週に三日勤め、五十七のときには、人事権と財務権がある企画委員

葉集」、さらに素朴な内容の「古事記」、現代歌なら牧水、そして良寛などを書くことが多い。

ひらがなのルーツ

生涯取り組んでいるかな文字について、ある考察をしている。日本には漢字が伝来するまで固有の文字はなかったが、弥生時代に作られた銅鐸の絵の中に、かなを彷彿とさせる線を発見したのだ。

漢字の場合、元の字は亀の甲羅などに書かれた甲骨文字で、線の質が直線的で鋭い。一方かなは曲線が主体で豊潤にしてあたたかい。

「かなは漢字の草書を簡略化したと言われていますが、かなは線が少なく字の間や字の周りが非常に明るいのです。神戸市灘区の桜ヶ丘古墳から出土された弥生時代の銅鐸には、広い空間の中に驚、亀、脱穀などが直線や曲線で描かれていますが、その線は豊潤にしてあたたかく、かなの線のルーツを思わせます。わびさびを好む日本人のアイデンティティが安土桃山時代に茶の湯を完成させたと同様に、曲線美に対する感性が平安時代十一世紀にかなを完成させたのではないかと私は考えています」

日展一一〇年。

才能がある人を押し出すシステムを

今年一一〇年を迎える日展について伺った。「主義主張がはっきりした芸術団体で一一〇年会が続くという事は大変なことだと思うのです。伝統の



秀綱（古事記）2013年 第45回日展



連總 2016年 改組新第3回日展

力は大変意義があると思いますが、時代に即して発展していかなければなりません。そしてそこで生まれるデメリットの面は自浄能力で改善したいと思います。また時代時代で、日展自身が話題の人を作ります。出し、才能がある人を押し出すシステムを作らなくてはいけないと思います。かつて豊道春海先生が文部省に働きかけてくださり書道を日展に入れていただいたのが昭和二十三年です。戦後、食料がない時に日展を開催した人たちは、おそらくひもじい思いをはねのけて作品を書かれたわけです。作家精神が一番大事です。そして多くの方に展覧会をよく見に来ていただくことです。このふたつがうまく重なると、日展に出品する新しい作家が増えることにつながると思います」

練磨考究して、線の中に自分の想いを封じ込める

書家は線の行者ともいわれる。しかし見えるのは形で、形の美しさと、書線で書かれていない部分、余白がある。「師匠の深山先生はこれを『要白』と命名しました。余ったではなしに実際は『要白』のです。そして一字しっかり書く周囲の『要白』がきつちりとしまるわけです。そういうことで書には造形面と線の中に思いを封じ込めるということがあります。以前、海外で書のデモンストレーションしたときに、『書はジャパニーズカリグラフィでなく『書』と訳してください』と言いました。カリグラフィというのは形のみです。形の修業に比べ、

長に指名された。「それは教授会で根回しが必要な仕事で、そんなことをしていたら字を書けない。学長になる一つの道ではありましたが、これは私の仕事ではないと思って大学教授を辞任することにした」。常に書を第一に考えての選択であった。

かなの特徴とかなを学ぶ難しさ

大学に勤めたとき、学生が高校生を指導するために「かなとはどういうものか」をまとめた。これ以上簡潔にはできないかなの美しさを「至簡の美」、一番かならしい「流麗の美」。そして「間の美」、あるいは「切断の美」。墨は無彩色のため雲にも岩石にも書ける「墨法の美」。そして書かれていないところを美しく見せる「余情の美」（散らし書き）である。さらに、料紙の工芸美との調和もある。これらは、以後自分の制作に違った意味でのアドバイスとなったという。

「深山先生からは、流麗の美を学ぶために『関戸本古今集』を勉強するようにと言われました。一つの字を覚えてそれを並べて集団にするのですが、そう簡単に流れがでない。単に文字を連続させるだけではなく、字の傾きや最終画と次の初めの画を有機的につなげる、そこがかなの難しさです。それでひとつひとつの字が独立した『伝藤原公任筆十五番歌合』や『伝小野道風筆秋萩帖』等で勉強しました。時間をかけることで、かならしいかなも、切ったかなもどちらも書けるようになったわけです」。

素材としては、豊かな人間性を素直に表現した「万

書として自分の想いを線の中に封じ込めるためには年単位の修業が必要です。皆が毎日一步一步精進して一人でも多くそのような作家が増えることを祈っております」。

そして、書の作品を読めれば書がわかったとは言えないと語る。「文字は意思伝達の記号です。しかし『練磨考究しなければ書にならない』というのが岡倉天心先生の言葉です。そしてどんなことがどんなふうに書かれているかわかって初めて書が鑑賞できたといえます。作品の見分け方の一つは、書の商品に対面し、二分でも三分でも見ていることができる、何か吸い込まれるように、頭がすっきりし、どこか親しみがある書が理屈なしに良い作品です。

ペンや鉛筆は動かしながら他のことを考えられませんが、毛筆は他のことを考えながらでは動きませんので、書は頭の健康法ともいえます。精神を統一して筆を進める書は、子どもの頃から始めることが重要です。小学校の書写教育の充実の思いが実を結んで、今度、十年に一度の指導要領の改訂がありまして、小学校一、二年生に軟筆が入り、中学生に書初めが奨励される予定です」。

高校一年での恩師との出会いから、書のひとすじの道を歩んでこられた井茂さんが、ある先生から書は「楽しいですか」と尋ねられ、「楽しくないのです」と答えたそうだ。「では止めようと思われたことはありませんか」。「それは一度もないです。なぜなら山を越えた途端に次の山が見えて、楽しいと思う間がないのです」。この言葉は、まさに書家の生き方を表していると感じた。

追悼

中路融人

Yujin Nakaji

日本画家・日展顧問

2013年のインタビューを掲載しています。



風声 1985年

淡紅垂咲く石庭 2016年 改組 新第3回日展

Profile

1933年、京都市生まれ。京都市立日吉ヶ丘高等学校日本画科卒業。デザイン事務所に勤務。1949年、晨鳥社入会、山口華楊に師事。1956年、「残照」日展初入選。1962年、「郷」日展特選・白寿賞。1995年、「輝」日展文部大臣賞。1997年、「映象」日本芸術院賞。1998年、京都市文化功労者。2001年、日本芸術院会員。2012年、文化功労者。文化功労者。日本芸術院会員、日展常務理事、金沢学院大学教授。2017年7月逝去。

桜の花を描くには、咲く前の木を描くことから始める。京都画壇の重鎮中路融人氏は、高校時代から画家という一筋の道を目指し、日本画塾晨鳥社で食欲に学び、師の教えを受け継いできた。母の故郷の滋賀の風景を経て、いま京都の風景に挑む。

山口華楊先生との出会いから日展へ

公募展に出すにもいろいろ塾がありましたが、私は不思議なご縁で美術学校の恩師が三人共日展系でした。文展、帝展から全部出された山口華楊先生です。私は高校を昭和二十七年に出てデザインの仕事をしまして、二十九年からお世話になったのです。私は大学に行かず、四年早く社会へ飛び込みました。高等学校は美術の特殊な学校で、今は銅駝美術高校といえます。その後、恩師の推薦で山口華楊先生の塾である晨鳥社というところへ行きました。晨鳥社は昔から純粹な研究団体でした。先生のご子息は二人共学者で、芸術家でなかったためもあってか潔癖というか、常に公平で、弟子に手伝わせたりもせず、絵に対して、すごく自分に厳しい先生でした。私にとって先生の生き方は即勉強の指針でした。

商売人の家に生まれて

我が家は絵の関係と全然違う酒屋で、私は商売人の息子でしたので家の跡継ぎをさせるために旧制の

第一商業に行かされ、二次大戦が終わった年の春に小学校を卒業しました。第一商業では美術部に入っていました、小学校のときから絵は学校で一、二番で、あまりに絵が好きなので親父は諦めて「商売はむかん。家の商売は弟に継がして」ということになりました。当時の京都はご存知のように友禪の着物が華やかでしたから、着物の下絵の仕事がお金になってよいだろうと思つて友禪の大家の宅に私を連れて行つた。そこで絵描きの道が開けたんです。その先生が「この仕事をやるには美術学校で日本画の手ほどきを受けなさい」と言われた。思つてもいなかった。渡りに船というか、自分の意志ではなく、うまい具合にその人がおつしやつて、そういう道へ神様が運んでくれました。

京都は着物の文化の町。撮影所もたくさんあるし。高峰秀子さんなど一流の女優さんの撮影などに使う着物に絵を描いていましたが、時代の変遷とともに着物の文化はだめになりました。もちろん芸術の世界も至難なことで、京都では絵描きとしての生活ができる芸術院会員の先生は福田平八郎先生をはじめ十人あるかなしかでした。絵描きになりたくても初めから依頼が来るはずないし、私は自分が自分のスポンサーになって自分のことは自分でしなくてはと思います、高校一年のときに覚悟を決めました。

学校に入つて一番初めに円山応挙先生の写生帳から抜粋した落葉や桜の葉、松かさ、椿の花などを手本に習いました。こういうものの見方があるのかと思ひ、とても驚きました。夢中で模写をして、どうしても絵描きになろうと決心しました。この思いは

今でもぶれていません。絵のために苦勞したと思つたことはない。苦勞は当たり前で出来なかつたら自分が怠けている。その頃、生涯この道でいけたらという願望でした。

日展での紆余曲折の道のり

日展には何回か落選しています。初入選は昭和三十一年、「残照」という作品。卒業してすぐには模写の失敗した紙を継ぎ合はして祖母を描きました。十八のときです。その頃は人物を描いていましたが、それから激しい歩みをしているのです。抽象のような作品など、やりたいことをやって、日展で一度問うてみたかったです。

一回目の特選から二回目まで十三年あいていますが、この期間が自分を鍛えさせてくれました。面白い歩みをしているのです。その時その時に自分が一杯、大いに意欲を燃やす。絵に完成というのは生涯ありえない。常に挑戦者でありたいと思つて努力しました。

初めの特選のときは大阪の商社向のデザインの仕事をやっていまして、親方が特選とつたと商社に自慢して廻りました。私の仕事仲間にはデザインをやっているが工芸や洋画をやっている者もいて、一流になっています。親がかりでやっているのはいなかった。自分で自分のことを全部やる。そうすれば誰にはばかることなしにのびのびとやることができる。ノルマはきついいけれどそれは当然でした。

描きたい風景

滋賀県の風景を取材して描き、半世紀以上過ごしています。初めは人物画でしたが、描こうと思う魅力ある人になかなか出逢わない。舞妓さんのようなきらびやかなところを描こうとも思わなかったし、自分が感じて描けるのはやはり風景が一番。自分が納得できるところまでいいきたい。絵描きとしてちよつとでもいい絵が描けたらという気持ちです

名刹いろいろ、長年描いてきた滋賀県もしだいによい風景がなくなってきました。それで今度は一度京都に目を向けようと思っています。一番通俗的で誰でも知っている清水さん。霧雨の清水寺。季節を変えて全部見て回ったけれど、色々の角度を変更して見たり。やはり舞台が一番魅力。自分の心がちよつとでも入りやすい構図を回ってねり歩く。それがまた作家の美的感覚だし。どこまで挑戦できるか。通俗的かもわからないけれど京都を敢えて挑戦してみる。

今年になって春に桜を描きました。京都仁和寺、御室というのですが、その桜は最良なんです。五重塔があり皇室ゆかりの寺で、天皇のお手植えの桜もあります。今年の園遊会に招かれて赤坂御苑に行つたときに「御室を描いています」と言いましたら、喜ばれましたね。

私は桜が咲く前から、骨格をしつかり描いています。それから強めていく。見えないところがつながつ

いと思う。あまり几帳面に描いた絵は堅苦しくて、面白くない。うまく描こうと思わず、自分が感じたものを出すために努力しなければいけないけれど、うまく形を写す、それだけではないです。

自分の好きな道で最後まで挑戦

私は晨鳥社に入つて結構もまれて厳しい中で育ってきました。先生はあまり助け舟を出さない。以前てかてかの絵などを描いていましたので、ものすごい攻撃を受けました。全部を敵に回した様なもので、「こんなのは日本画でない」と皆から酷評でした。とにかく自分の思ったことを堂々と人を気にせずにやってみた。だからこれくらいやつたら失敗だということがわかつただけ成功だと思う。現在後悔はしていない。むしろよい体験をしたと思つている。一回入選したら後生大事にそれだけをやるということはできなかつたんです。

やはり考えながら工夫しながらやつていかなないと、年とともに見る目、考え方色々変わってきているし、それをうまく生かすようにしていく。前よりは多少ものがわかるというか、世間でいうただ物分りがいいとかそういうものではなしに、作家としての経験を踏まえて前よりは多少、自然に對して見えるようになってきている。今年誕生日がきたら八十。だから人生に悔いがないです。自分の好きな道で、どんな形で終わるのかわかりませんが最後まで挑戦者でいたい。横道は一切考えたことはありません。

ていなければだめです。普通の木であつても枯れ木の骨格をよく描くというやり方をやっています。今回の桜は花びらは描いていません。ものの存在感をしつかりつかんでいなくてはと思うから、誰も言わなくてもやっています。

心を動かされたものにぶつかってほしい

若い人には、いわゆる自分が本当に感動したものに思い切りぶつかってほしい。テクニクや先入観でなく、初めから作らずに自分が心引かれたものに遠慮せずにどんとぶつかって行くこと。まず基本は自分の情熱。魅力を感じたものに心で見なければいけないということです。自分の気持ちを画面に投入して皆さんにわかつてもらえるまで努力しなければ。簡単にやつても人はそんなもので動かされない。魅力を感じるものにぶつかってほしい。どうも平均的に今の若い人はおとなしい。燃えてほしい。上手に描いたというのは逆にマイナス点。そういうものでなしに心を揺さぶつたものを思い切りぶつけてもらいたい。それが一番。生涯貫いてもらいたい。

日本の湿潤ある空気。心で感じる捉え方

私はアトリエでは自然光で仕上げます。たとえ小品であつても、自然光です。自然光でしつとしていたらどこに出してもいい。

先般久しぶりにイタリアに行ってきましたが、向

君の思うとおりにおやりやす

みな、いろいろな人が話をしているのを全部よく聞いて自分の役に立つことがあつたらそれを参考にしたい。人の批評を聞かないのはいけない。歌舞伎と一緒に盗むということ。幕間から誰かの演技を見て盗む。そういう意味ではいろいろなことを勉強しなければいけませんね。

二、三枚持つてきて「先生どれがいいですか」と自分の作品を先生に選んでもらう人がいる。先生に選んでもらつて、だめだったらそういう人は必ず「先生が言つたから」と言う。こういうのがもつてのほか。私は今指導して一切言いません。同じ形で色だけ替えるのは心構えが悪いですね。「もう一度しつかり勉強してこい」と言います。

私は山口華楊先生に「私の今年の絵はどうですか」と聞いたことはあまりない。先生から思わず何か言いたくなる作品を描かなければと。先生に相談すると、「君の思うようにおやりやす」と言われる、初め、先生は私を捨てているなど思いました。

晨鳥社に入つて最初の頃、出品前に見てもらうときに、私のところは三人の先生に見てもらいました。山口華楊先生、麻田弁次先生、猪原大華先生です。皆個性があつて、山口先生は一番教え方が堅実でした。麻田弁次先生は感覚的に批評する。猪原先生は細かいところまで言い過ぎで、三人性格が全部違ふのを把握して「誰が一番自分の考えに合っているかというのをある程度定めて聞きなさい」と友達

こうは湿度が少ない。日本は春夏秋冬あるし、湿度を含んだ空気がある。それを私は絵に表したい。私の絵は霧や雨、曇りなどが多いし、それを大いに大事にしたいんです。日本は魅力的ですね。

また、細かく描いていても消して、また描きます。消し方がまた難しい。そこがまた苦勞であり、その人の力量、腕の見せ所。最後に筆を置くときは、自分で何かちよつと気持ちが入つたかなと感じるときで、そこまでやります。うまく描こうとか度外視して、そのために木の成り立ちから骨格から、花が咲いて、変遷を見て、気持ちを語り合わせる。目で見ているというより半分心で感じているというものの捉え方です。人は心で動かされる。初めからぼかして描いたら存在感がないので、描いて消す。その消し方も向こうにやるように消す。そしてまた起こしたり消したり。さりげなくやりましたと絵に出たらいけない。ものを言わずに感じさせる。言うのは楽ですが。それを嫌がらずに手間と思わずに喜びを感じなければいけない。そこまでいつていない人が多い。自然は皆同じように見せてくれるからこちらが大きくならなければ。描くのは自然と自分との距離を縮めている作業です。語り合いをやつて色々な発見がある。私もやつと八十近くなつて少しづつ分かつてきたと思うくらいで、なかなか天の声は聞けない。こちらが精進しなければ教えてくれない。

いわゆる優等生はほめられたものでないと思う。絵描きはその人の個性。定規で測つたような、ものを正確に写してというタイプではない。もつとはみ出す性格をもつて生き生きしているほうが面白

に言つていた。

あるとき先生が私の「冬田」の絵の上部左方に「なんか向こうにほしいな」と言われて、絵に無かつたものを加えた。そうしたら二度目の特選になつて、先生はこのとき審査に出ていなかったけれど「あれうまく入つたな」と言われた。良かったら先生のほうから言われる。「君の思うようにおやりやす」と言われたのは、言つても私がこれやろうと思つているということをご存じで、たとえこの作品が失敗してもこれが力になると思つていらした。「君、好きなようにおやりやす」。初めは疑問を感じたけれど、やはり気にしてくださつてゐる。君がやりたいことをやつてゐるのを常に見ているということも全部承知の上、そのくらい先生には幅広く見ていただいてありがたかつた。常に求めて食欲にやつて、そうやつたら見えるときがきつと来ると思っています。



冬田 1975 年

追悼

三谷 吾一

Goichi Mitani

漆芸家・日展顧問

2016年のインタビューを掲載しています。

Profile

1919年石川県輪島町(現輪島市)に生まれる。33年、沈金師・蕨舞洲に師事。38年、前大峰に師事、41年、沈金職人として独立。42年、新文展初入選。65年、日本現代工芸美術展現代工芸大賞・読売新聞社賞受賞。66、70年、日展特選北斗賞受賞、78年、日展会員賞受賞、88年、日本芸術院賞受賞、2002年、日本芸術院会員となる。2015年、文化功労者。日本芸術院会員、日展顧問、現代工芸美術家協会常任顧問。2017年7月逝去。



蝶の楽園 2016年 改組新第3回日展

「輪島で三谷先生を知らない人はいませんよ。実は私も伝統工芸保存会の職人なんです」。行き先を告げて能登空港から乗ったタクシーの運転手さんの第一声である。緑に囲まれた一本道を抜けて二十分ほど、輪島市内に入ると、輪島塗美術館の看板や、道の駅、輪島塗の店があちこちに見えてくる。駅前通りを少し入った静かな住宅街にある三谷先生のお宅に伺った。

小学校六年で沈金師前大峰氏との出会い

お孫さんのご案内を受けて二階のアトリエに上がると、やさしい笑顔で迎えてくださり、上品な物腰でお話を始めてくださった。「輪島は塗りの町ですから、仕事は輪島塗り関係の職人がほとんどだったんです。嫌な人はよそに行くしなかったんです」。そうした時代、大正八年に輪島に生まれた三谷吾一さんが、小学校六年生のときのことだ。輪島の沈金師前大峰さんが昭和五年の帝展で特選をとられて小学校で講演会を行った。その話を聞いて大いに感銘を受け、塗師の家に生まれた自分も作家として特選がとれるようにしたいと強く思った。それが出発点だった。そのときの志をずっと貫き通して今日まできた。小学校六年生のときに一生の仕事を決めたのである。しかし、その道のりは決して平坦なものではなかった。

十四歳で蕨舞洲氏に弟子入り

絵が好きで、小学校で賞をとるほどの画才を発揮した三谷さんは、輪島塗りの職人の木地作りから始

まり下地、塗りなどのさまざまな工程のなかでも、加飾を、そのなかでも華やかな蒔絵ではなく、沈金の道を選んだ。半年から一年かけて何層にも塗り重ねられた輪島塗りの漆塗の面に、鑿風の刀で文様を彫りつけ、これに漆を擦り込んで、金箔や金粉を刀痕内に押し込んで文様を表す技法である。「沈金は比較的安価にできたんです」。高等小学校の高等科を卒業すると、十四歳にして、自分の布団を持参して住み込みで沈金師蕨舞洲氏の徒弟に入った。家はご近所ではあったが、親元を離れ、十月く三月の繁忙期は夜も仕事をするのがあった。その修業は仕事だけではなかった。挨拶の仕方からお茶の出し方、お客様への対応の仕方など、社会人としての心得を教えこまれる厳しいものであった。

十九歳から前大峰氏のもとで修行。 二十三歳で独立

こうして五年の徒弟を終えたあと、舞洲氏と兄弟弟子関係にある前大峰氏のもとでさらに修行を重ねた。

昭和十五年に紀元2600年奉祝美術展が東京都美術館で開催され、初めて、着物に下駄の出で立ち

で東京の文展にでかけていった。二十一歳のときである。作品の多さにびっくりした印象があったという。昭和十六年、沈金師として独立する。

昭和十七年、いよいよ日本は戦争のさなかであったが、このとき二十三歳で二度目の東京へでかけている。第五回新文展に出品の「沈金漆筥」が初入選。アヤメの花を描いた手箱である。

戦時中は、なんとか輪島を離れずに仕事を続けたかったために志願して軍需工場に勤めながら制作を続けた。昭和十八年は落選だった。昭和十九年、戦火は激しくなっていく。

戦後の苦しい二十年間

二十六歳で終戦を迎え、翌二十一年には新文展から名前を改め日展となり、春と秋の二回行うことになった。そして秋には入選を果たす。

しかし、ここからは、自分の想いを制作していきたいと言うことでスランプに陥り連続して落選するということもあり、成果が上がらず苦しい時代になった。

終戦直後の混乱期には東京芸大出身の吉田丈夫氏、三輪智一氏が輪島に疎開されており、その折に

若い作家が、図案の作り方や考え方など、多くのことを学ぶ機会を得たという。

四十六歳で現代工芸大賞。 翌年日展の特選受賞

二十年もの苦しい時代を経て認められたのは昭和四十年、四十六歳のとき、第四回日本現代工芸美術展で「飛翔」が現代工芸大賞・グランプリを受賞したのである。そして翌年の第九回日展で「集」が特選に選ばれた。十四歳のときに憧れた恩師前大峰と同じ特選を受賞したのだ。それまでの作品づくりはスランプと、経済的にも厳しく、たいへん辛い日々であった。戦後のものがない時代、しかし歯をくいしばり、自分の考える作品を作り続けてきた。結婚したのは二十八くらいで遅かったが、それは、結婚すると仕事ができなくなるという考えがあったことによるという。周囲の反対もあったが結婚し、「女房の支えがあったから乗り越えることができたんです」。どんなときでもいつでも応援してくれた奥様は昨年、他界され、いまはお孫さんが食事を用意してくださるそうだ。

毎年違うものを、 少しでもいいものに挑戦

作品制作にあたっての根本的な考え方は「毎年違う物をつくりたいんです。少しでもいいものをもと

独特の美しい色彩と点彫りの抒情詩

また三谷作品の特徴は細かな点彫りにある。点で彫っていく。そこには深い、浅い、間隔をあける、つめて彫るなどによって、柔らかい、堅いのさまざまな表現の違いができてくる。印刷がドットでできているのと同じ手法を彫りで進めているということだ。気が遠くなるような細かな手仕事である。

隣の畳の部屋のアトリエに何うと、現在制作中の細かな点彫り作品を披露してくださった。輪島塗りの漆器は、木型に布をまいて漆を何層にもかけてかけてという柔らかなあたたかみを感じさせる器である。その上に細かな細かな絵柄をのみで彫って、そこに金箔などを埋め込んでいく。

グランプリを取ってからは、本格的にこの点彫りを進めてきた。「細かいものはこのめがねをかけて見るんですよ」と笑う。

発想の元になるのは、絵本が多いという。もともとと絵が好きで入った道。油絵を描きたいと思ったこともあるという。作家では特にクレイが好きで画集もいろいろ持っている。いろいろな作品を見てそれを自分のなかに取り込んでそれから発想する。「漆の手法で絵を描いているんですね」。

花や蝶、鳥、うさぎやきつねなどの動物たち、空、雲、月など。優美な姿が点彫りで描き出されていく。作品のなかには、三谷さんの穏やかな優しさが表れているように感じられた。

長男の三谷慎さんは造形大を出て彫刻家になり、



黄昏 2015年 改組新第2回日展

強になる。仕事はその積み重ねなんです。一つ一つ勉強して前に進むんです」。穏やかな面持ちのなかにそうして前向きにまっすぐ進んでいらした強い意志。十四歳から八十三年間にわたって漆と向き合っ

てこられたわけである。真つ白なさらさらの髪の毛につやつやした肌。瞳がきらきらと輝いている。「金の上にプラチナを乗せて漆で押さえて、エルジー粉、パール粉で微妙な色を出す、この方法を主体に行っている。これは私が初めてつくったものです」

これは、三谷さんの作品がもつ独特の美しい色彩の秘密である。黒地に金ではなく、プラチナ箔や色のついた粉を使うことで、柔らかな色調と細かな濃

イタリアに十一年滞在した後、輪島の伝統とイタリアの伝統を組み合わせたモダンな、しかし父親の芸術との共通点を持つ作品を作られている。二人展をときどき東京でも行われているという。

終始、優しい笑顔できらきらと瞳を輝かせておだやかにお話しくださった。戦後の苦しい時期を乗り越えて、しかし、そうした時期があったからこそ、と振り返って「この年まで健康で作品をつくることができて幸せなことです。好きなことをしているから、誰にも指図されることなくできているから長生きできているのかもしれないね」。

畳のアトリエとロフトのような木のぬくもりのある応接に大きなランプと天井にスピーカーが設置されている。息子さんがイタリアから運んできたという。「こういう仕事を一日中しているとやっぱり音楽を聴くんですね」。ゆったりとした時間が流れているのを感じた。

作品を通して人間の考え方を作る

日展について何うと、「人材を育てること、いい人を見つけてバックアップすることが大切だと思います。審査員が育てていなくてはね。若い作家でこびたくないとか反発する人のほうが優秀だったりすることもあるから、そうしたいいい人を潰してしまわず、探して育てることですね」。

若い人へのアドバイスを尋ねると、少し間を置いて、「これは本人のやる気の問題ですね。作家としての考え方ができていること。そしてやる気がある

淡の調子を実現した。

沈金一筋に歩みながら、三谷さんの作風は、伝統的な輪島塗の絵や意匠とは全く異なり、師の大峰氏の作風とも異なるものであった。

「職人に大切なのは、考え方と技術ですが、私の場合はまず考え方を優先させて、そこに技術をもっていく。でも伝統工芸というのは技術優先で進むことが多いんです」。技術に考えを合わせていくやりかたである。しかし、まず構想があつて、それをどう技術で折り合いをつけていくか。三谷さんは常に作品のことを考えて考えて、新しいものを生み出そうとしている。そこが作品に大きな違いを生んでいる。

こと、叩かれても叩かれても根性がないとね。作品を通して人間の考え方をつくるということですね」。徒弟時代に休みというのはお盆と正月とお祭りのときしかなかったという。それが普通だった。だから今みたいな休みにはなかなか慣れることができなかったと語る。

「グランプリをとってから、ずっと休むことなく五十年作り続けてこられたのは、奇跡のようなものです。人によつては病氣したり、家の事情でできなかったりしますから、私は幸せでした」

今後の抱負をうかがうと、「今後は、年に一点いいものを、力を入れて作っていききたいと思っています。もう日展のみに絞りましたので、いいものを、そして常に違ったものに挑戦していきたいんです。好きなことをしているので、ストレスもなく、できているのは本当に幸せです」。

独立してから七十五年という長い年月に作られた作品の数々には、常にいつも新たな物を作ろうとする姿勢が貫かれている。伝統工芸の世界にあつて、常に新たな色彩と構成で、抒情的な作風をもつ、この作家の限らない創造の源を垣間見せていただいた。



日展110年の歴史

1907	明治40年	定期的に開催される全国規模の美術展の誕生。美術審査委員会官制が制定され、これに基づき、第1部（日本画）、第2部（西洋画）、第3部（彫刻）の三部制により、文部省第1回美術展覧会（文展）が開かれ、大正7年 第12回文展まで続けられた。その間、第6、第7回文展において、第1部は、第1科、第2科の2科制であった。
1919	大正8年	帝展誕生。新たに帝国美術院規程が制定され、帝国美術院第1回美術展覧会が開かれ、大正12年の関東大震災の年を除いて、昭和9年第15回帝展まで続けられた。その間、昭和2年より第4部（美術工芸）が設けられ、また第2部の中に、創作版画が加えられた。
1927	昭和2年	第8回帝展 第4部（美術工芸）の新設。
1935	昭和10年	新帝展に対して美術界紛糾。新たに帝国美術院官制が制定される。
1936	昭和11年	改組帝展、文展鑑査展、文展招待展開催。新規定の交替制によって、日本画、彫刻（木彫）、および美術工芸の改組第1回帝国美術院展覧会が春に開かれたが、1回限りで廃止。美術展覧会は文部省主催に変わり、秋に文部省美術展覧会が、鑑査による展覧会と、招待による展覧会に分けられて、相次いで開かれた。
1937	昭和12年	再び文部省主催の美術展（新文展）開催。新たに帝国芸術院官制が制定され、改めて第1回文部省美術展覧会が開かれ、昭和15年、紀元2600年奉祝美術展覧会が開かれた年を除いて、昭和18年第6回（新）文展まで続けられた。
1944	昭和19年	美術展覧会取扱要綱によって、一般公募の美術展覧会は禁止されたが、文部省主催により、戦時特別美術展覧会が開催された。
1946	昭和21年	第1回日展開催。文部省主催により、第1部（日本画）、第2部（西洋画）、第3部（彫塑）、第4部（美術工芸）の4部制によって、春に第1回日本美術展覧会（日展）が開かれ、同年秋第2回日展を開いて、昭和32年第13回日展まで続けられた。

社会・文化の動き

1907	東京勸業博覧会開催 日本彫刻会結成	
1914	日本美術院再興	
1919	森鷗外帝国美術院初代院長	
1923	関東大震災	
1930	大原美術館開館	
1931	満洲事変	
1936	新文展に反対派が新制作派協会を創立	
1937	竹内栖鳳、横山大観、岡田三郎助、藤島武二、初の文化勲章を受章 日中戦争始まる	
1939	第2次世界大戦	
1940	川合玉堂、文化勲章を受章	
1941	太平洋戦争始まる	
1943	和田英作、文化勲章を受章	
1945	広島・長崎に原爆、終戦	
	 	第1回日展会場風景（1946-昭和21年春 毎日新聞社提供） 第1回日展陳列品目録表紙（1946-昭和21年春）

1947	昭和22年	帝国芸術院は、日本芸術院と改称される。
1948	昭和23年	第4回日展は日本芸術院主催に変わり、第5科（書）が新設される。
1949	昭和24年	日展運営会の発足。日展の運営が文部省から日展運営会へ移行。新たに日本芸術院令が制定され、また同年、日本芸術院会員の有志によって組織された日展運営会が設立されて、第5回日展より第13回日展まで、日展は日本芸術院と日展運営会の共同主催であった。
1958	昭和33年	日展が民営化され、新日展始まる。社団法人日展が創立し、日本芸術院と分離し、完全なる自主的経営機関として、改めて第1回日本美術展覧会が開かれ、昭和43年第11回日展まで続けられた。 
1969	昭和44年	日展改組、人事刷新される。役員改選を機に従来の日展の展覧会名称を改組日展と改め、改組第1回日本美術展覧会として開かれたが、翌年の昭和45年、「改組日展」の展覧会名称を再び「日展」と改めて第2回日展を開き、平成25年第45回日展まで続けられた。  
2007	平成19年	日展100年、国立新美術館に会場を移す。「日展100年」展を国立新美術館、宮城県美術館、広島県立美術館、富山県立近代美術館で開催。
2012	平成24年	日展105年、公益社団法人日展となる。公益法人制度改革に伴い、内閣府より公益社団法人への移行認定を受け、4月1日より「公益社団法人日展」として新たに出発した。
2013	平成25年	第45回日展開催。
2014	平成26年	日展改革、人事組織の大幅な改組に伴い名称を改組 新 日展と改め、改組 新 第1回日展として開かれる。
2016	平成28年	改組 新 第3回日展 東京都知事賞新設。
2017	平成29年	日展110年、改組 新 第4回日展開催。

社会・文化の動き

1947	日本国憲法施行
1948	上村松園、安田靫彦、朝倉文夫、文化勲章を受章
1949	法隆寺から出火 湯川秀樹日本人初のノーベル賞受賞
1950	小林古径、文化勲章を受章
1952	梅原龍三郎、安井曾太郎、文化勲章を受章 東京国立近代美術館開館
1953	板谷波山、香取秀真、文化勲章を受章 NHK、民放テレビ放送開始
1954	鍋本清方、文化勲章を受章
1955	前田青邨、文化勲章を受章
1956	坂本繁二郎、文化勲章を受章
1957	西山翠峰、文化勲章を受章
1958	松林桂月、北村西望、文化勲章を受章 東京タワー完成
1959	川端龍子、文化勲章を受章
1961	堂本印象、福田平八郎、富本憲吉、文化勲章を受章
1962	奥村土牛、中村岳陵、平衛田中、文化勲章を受章
1964	吉田五十八、文化勲章を受章 東海道新幹線開業、東京オリンピック
1965	山口蓬春、小糸源太郎、文化勲章を受章
1966	徳岡神泉、文化勲章を受章
1967	林武、村野藤吾、文化勲章を受章
1968	壁山南風、浜田庄司、文化勲章を受章 文化庁が文部省の外局として発足
1969	東山魁夷、文化勲章を受章 アポロ11号月面着陸
1970	棟方志功、文化勲章を受章 大阪・万国博覧会開幕
1971	荒川豊蔵、文化勲章を受章
1972	岡鹿之助、文化勲章を受章 高松塚古墳発見
1973	谷口吉郎、文化勲章を受章 オイル・ショック
1974	杉山寧、橋本明治、文化勲章を受章
1975	小山敬三、田崎広助、中川一政、文化勲章を受章
1976	小野竹喬、松田権六、文化勲章を受章 NHK日曜美術館スタート
1977	山本丘人、文化勲章を受章
1978	楠部彌弐、文化勲章を受章
1979	澤田政廣、文化勲章を受章
1980	小倉遊亀、丹下健三、文化勲章を受章
1981	山口華楊、文化勲章を受章
1982	高山辰雄、文化勲章を受章
1983	牛島憲之、小磯良平、文化勲章を受章
1984	上村松篁、奥田元宋、文化勲章を受章
1985	西川寧、文化勲章を受章
1986	荻須高德、文化勲章を受章 チェルノブイリ原発事故
1987	池田遙邨、文化勲章を受章
1988	圓鐔勝三、文化勲章を受章
1989	片岡球子、吉井淳二、富永直樹、文化勲章を受章 昭和天皇崩御 平成改元 ベルリンの壁崩壊
1990	金子鷗亭、文化勲章を受章 湾岸危機 バブル経済破綻
1991	福沢一郎、蓮田修吾郎、文化勲章を受章
1992	佐藤太清、青山杉雨、文化勲章を受章
1993	森田茂、帖佐美行、文化勲章を受章
1994	岩橋英遠、文化勲章を受章 円高百円を突破
1995	佐治賢使、文化勲章を受章 阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件
1996	伊藤清永、浅蔵五十吉、森英恵、文化勲章を受章
1997	高橋節郎、文化勲章を受章 香港返還
1998	平山郁夫、村上三島、文化勲章を受章
1999	秋野不矩、文化勲章を受章
2000	杉岡華邨、文化勲章を受章
2001	守屋多々志、淀井敏夫、文化勲章を受章
2002	藤田喬平、文化勲章を受章
2003	加山又造、文化勲章を受章
2004	福王寺法林、小林斗盞、文化勲章を受章
2005	青木龍山、文化勲章を受章
2006	大山忠作、文化勲章を受章
2007	中村普也、文化勲章を受章 国立新美術館六本木に開館
2010	安藤忠雄、三宅一生、文化勲章を受章
2011	大槌年朗、文化勲章を受章 東日本大震災
2012	松尾敏男、文化勲章を受章
2013	高木聖鶴、文化勲章を受章
2014	野見山曉治、文化勲章を受章
2015	志村ふくみ、文化勲章を受章
2016	草間彌生、文化勲章を受章
2017	

野田夕希



多摩美術大学の二部で学び、研究生へ進んだ野田さん。大学受験の頃は第二次ベビーブームで日本画科の倍率も非常に高かったという。東京の緑豊かな郊外、八王子に生まれ育ち、自宅から二時間かけて上野毛校舎へ通った。卒業後もこつこつと日本画を描き続け、入選から特選へと一気に進んできた。謙虚なお人柄ながら、絵を話るときの表情は明るく生き生きと輝いていた。

マチエールや柄があるものに
絵を描くのが好きだった子どもの頃

思い起こせば幼稚園の頃、新聞紙に落書きをするのが好きだった。親がスケッチブックを買ってくれたが、なぜか新聞紙が気になっていたという。もともとマチエールや柄があるものに絵を描くのが好きだったのだ。

小学校のクラスでは特に目立つほうではなかったという。好きな教科は美術で、高校時代に

美大を目指し予備校へ通うようになった。夏休みに予備校の基礎科に行き、最初は油画を志そうと思ったが、デザイン、彫刻なども学ぶ。そのなかで水彩画を選び、それが日本画に繋がった。受験は鉛筆デッサンだったが、木炭の方が好きだった。下図を描くときは色鉛筆やパステルを使うことが多く、絵柄はざっくりした感じが好みだという。

二浪目のときに多摩美術大学の二部の存在を知り受験し、入学した。大学を卒業して学部研究生になり、大学院生と一緒に一年間学んだ。それまでとは違うメンバーとの制作や批評会は良い経験だった。作品も制作姿勢も自由な雰囲気になか、伸び伸びと描いた。

卒業後に出会った絵の仲間

日展には研究生のときに初めて出品した。いくつかの団体展を見たが、日展は繊細なものか

りました」

一生に一度くらいは入選させてもらえるように頑張ろうという意気込みで制作を続け、初入選は「雨の日」という題名で傘をさした人物を描いた。三十一歳の時だ。「初入選はとにかくびつくりしました。有難くて全部の運を使い果たした感じがしました」。しかし、そうではなかった。二年後の二〇〇四年、すぐに特選を受

雨 2005年 第37回日展



賞。「入選するだけで嬉しいという時代に特選と言われても、なんだか有難すぎて実感がなかった」と言う。その後は一度落選もあったが、順調に進んでいった。

転機は人物以外の作品を描いたとき

いろいろなモチーフを描いてはいたが、初入選も二〇〇四年の特選「休日」も人物画だった。他の公募展の多摩総合美術展と臥龍桜日本画大賞展も人物画で入賞したため、自分が入選するのは人物画だけだと思い込んでいた時代がある。

特選の次の年は無鑑査で落ちることはないの、人物ではなくオオニバスに雨が降り注いでいる風景を描いたところ、楽しかった。入選したいと思うとしつこく描きすぎてしまうが、それまでと違い、自由に描けたという感覚だった。この感覚が転機となった。しかしその後、また入選を意識して人物を描き、二〇〇九年に「待ち合わせ」で特選を受賞。それ以降は人物以外にも自由に描き始めた。

日展のほかには新日春展といくつかのグループ展に参加している。大きな作品が多く、日展・院展・創画・無所属三〇四十人で構成されているグループ展、隔年で開催している少人数の小作品展、開催は不定期で、日本画だけでなく油画や版画、工芸にインスタレーションなどの作家も参加するグループ展などである。「日展の作品制作だけでなく作品サイズもメンバーもさ

ら半抽象の作品まで幅が広い。その事が今後どちらに振れるかわからない学生には決め手の一つとなった。しかし、落選。卒業後は指導者がいないため、疑問点を聞けないまま何年も落選が続いた。

「批評してもらえたり、一緒に勉強する仲間が欲しいと思い、土屋禮一先生や米谷清和先生の勉強会を見学させていただき、そこで仲間もできました」

当時、米谷先生のもとで日展の反省会が行われていた。展覧会が終わった後、選外だった人も入選した人も一五〇号の絵を持ち寄り批評し合っていた。見学に行き、参加させてもらいたいと思ったが、その会は解散してしまった。だが、そこで知り合った人と繋がった。

「その会のメンバーで作っているグループ展に、その後参加させていただいたのです。仲間がいると制作を続けていく励みになり、また日展だけでなく、さまざまな作風の方がいて勉強にな

まざままで楽しく描いています」。

親族にも画家はおらず親も干渉せず、自由に制作している。作品提出の期日が近くなってくると、職場に行く前に一色塗り、帰宅後ふたたび制作することもある。絵具を乾かすのに時間がかかるためだ。だが、できれば休みの日に一日通して集中して描きたいという。

「夜遅くに見た色と朝見た色は違って見え、夜、色に違和感があり洗ったら、朝もつとひどい色になっていることがあります。焦ると、そのような事が頻発するので、搬入直前は『落ち着け』と自分に言い聞かせながら描いています。下図があつても制作時は迷いますが、最初のイメージを優先したほうがうまくいくように最近感じます」

勉強のためにはたくさん描かなければと思

い、パネルは常に用意しているという。

見た感覚、「塊」を描きたい

昨年は、アマゾンの古代魚ピラルクを描いた。「水族館では暗くて見えづらく、不審がられるくらいずっと水槽の前にはいましたが、思うようなポーズをとってもらえなかったり、見落とし

たりで、何度も通いました」
基本はごちゃごちゃとしてい



水辺 2012年 第44回日展



深閑 2016年 改組 新第3回日展

硯といった画材に精通している人もいるという。描き始めるとどうしても細かいところまで描いてしまうが、本来はざっくりとした感じに描きたい。思っているのは常に「塊」の表現。そして、人が無意識に感じる空気感や雰囲気のような感覚的なものを描きたい。さらに抽象的にしていきたいが、なかなか勇気がないという。鳥を何枚も描いているが、なかなか思うようにならない。「だからといってすぐにモチーフを替えてしまうと、私の場合、中途半端になってしまふ気がするので、何年か同じものを描きたいと思っています」。

しかし納得がいかないまま停滞しているので、少し休もうと思ひ、最近木を描き始めた。都心にある古い柳の木を、一年を通して見続けている。

盛り上げてから、洗ったり削ったりして描く

作品は、絵具を洗ったり削ったりしながら制作するため、下地をしっかりと定着させる必要がある。その手段として日本画の画材の胡粉を下地に使用しているという。胡粉は塗った直後より、時間が経過したほうがより強固なものになるため、下地は制作を始めるより数カ月前に準備しておく。そして最初に盛り上げてマチエールを作ってから、洗ったり削ったりして描いていく。「洗って最終的に見えているのが、一番下の白くて鮮やかな胡粉の輝きだったりするんです。それは狙ったわけではないのですが。」

ました」

きれいな絵に憧れながらも

今後について尋ねると「今まで描いてきた鳥や魚以外にも描いていこうと思っていますが、技術的な勉強もしていきたいです」。

絵のトーンは初めの頃は黄土っぽい色だったという。

日展について尋ねると、「若い作家も、今は画材もテーマもいろいろな幅があるので、自由に好きなように描いたらいいいと思います。展覧会では日本画以外にも楽しく見えます。書は篆刻がすてきだなと思うし、工芸も楽しい。せっかく五科あるのもっと勉強して、見る目を養いたいと思います」。

自分の作品についてはいつも厳しく評価している印象を受けた。

「出品したからには『完成』なのですが、会場では自分の絵は怖くて見れないです。期日がなかったら、もっと描き続けていると思います」

日展の先生とのエピソードを語った。

「ある日展の先生の個展を見に行ったときのこと、私が制作に行き詰っている話を聴いてくださり『今まで鉛筆でスケッチをしていたなら、ペンに替えてみては？ そういったちよつとしたことでも変わる』とアドバイスをくださった。実践してみると、すぐに絵に反映されるわけではないけれど気持ちが変わった。常々懇意にしていただいているわけではありませんが、親身になつてくださり、日展の先生方は優しいと思い

「わびさびみたいなそんな高尚なものではないですが、子どもの頃から苔など、年寄りじみたものが好きでした」

しかし、一方、きれいな絵にも憧れる。

「私の絵はきれいな日本画の絵具がくすんでしまします。鮮やかな作品や丁寧な薄塗りの作品を羨ましく思います。古い絵は当然古色を帯びていて好きですが、近代・現代の作品は鮮やかなものも多く、惹かれます。いつかは色のきれいな絵を描いてみたいと思っています」

野田 夕希

Yuki Noda

1971年、東京生まれ
1997年、多摩美術大学研究生修了
1997年、多摩総合美術展大賞受賞
2003年、臥龍桜日本画大賞優秀賞受賞
2004年、第36回日展特選受賞
2009年、第41回日展特選受賞
2014年、公募団体ベストセクション美術2014



青木秀明

大阪市南部、J R環状線桃谷駅から商店街を少し行ったところに、青木さんの絵画教室がある。新潟に生まれ大阪で育った青木さんは、京都精華大学で学び、その後、長らく母校で講師を務めた後、近年、大阪に戻り、実家の元空手道場で絵画教室を開いている。日展のために制作中の大作を前に、話を伺った。

二十一歳で青垣二〇〇一年展 優秀賞をきっかけに

子供時代、絵が好きで、よく落書きをしていたという。中学生の頃は教科書の後ろに載っているプロファイル写真の下に胴体をつけて遊んだりするのが好きで、その教科書が話題になってみなが借りに来るという状況が楽しかった。今思えばそうした楽しさが絵を描くきっかけだったと振り返る。

その後、芸術への道は不思議と開かれていった。大阪の工芸高校の写真科へ進んだが、それは私学受験

で落ちたのがきっかけだった。「受験が間に合うという情報を父親が見つけてきてくれて、そこにたまたま入ったんです」。しかし高校時代はラグビーに明け暮れた。芸・美大への憧れはあったが、当時工芸高校では美術科かデザイン科でないと芸・美大に行けない雰囲気があった。三年時に進路を決めるとき、ラグビーの顧問の先生に話せば推薦で製鉄会社に行けるだろうということになった。一生ラグビーをやるかと社会人チームの練習を見学に行つて、レベルの高さについていけないと思い、初めて挫折を経験。一転して美大の進学を決めた。現役では全部落ちたが美術予備校で一年間デッサンなどを学び京都精華大学へ。

日本画を選んだのは自然の流れだった。予備校に日本画の先生が多かったのだ。しかし、日本画は姿勢でお習字やるかくらいいの認識で、受験科目も日本画科だけはデッサンと着色デッサンのみでシンプルで、それですつと入つていった。

入学時は画家になるという意識はなかった。二年

時に自分で選んで描くことになり、徐々に気持ちに変化が生まれた。元来負けず嫌いであつた。先生たちは作品をほめてくれたが、なんとか世に出たいと思い、二年と三年の間にコンクールに出す。しかし、立て続けに三つ落ちた。自意識が高かつたので悔しかった。

しかし、次に大きなチャンスが訪れる。四回目に描いた作品が公募展「青垣二〇〇一年展」で二等の優秀賞に輝いたのだ。賞金は百万円。三回落ちて自信喪失していたので、とてもうれしく、そこではつきり絵を描いていこうと決意した。二十一歳のときである。ちょうど神戸の震災の翌年で、壊れたアパートの渡り廊下を描いた。図録の審査評には、「大賞は破綻がない良い作品。二等賞は、構想に不鮮明なものがある。ただ作家のひたむきな態度を評価しました」とあつた。絵だけでひたむきな態度がわかると言われて、感動に近かつた。完璧でなくても一生懸命やれば評価してもらえる。頑張ろうと背中を押してくれた。それが一番の思い出になった。そ

れがなければきつと絵を描いていないというくらい大きかった。

日展の出品を意識したのは二年生。そのとき専任の先生が日展作家だった。大学では日展と創画の先生が同時に見るのでなんとなくその存在はあつたが、会派に所属するという奇をてらう意味ではなく、コンクールの一部として出品していた。その後、研究を進めたい気持ちがあり大学院へ。初入選は大学院一年のときである。

大学院を出てからは中学の非常勤講師や予備校の講師、母校の大学の非常勤講師、特任講師でそれぞれ五年、実家で絵画教室を始めたのは最近のことだ。

日春展は一度落ちたが、秋の日展は初入選以来無鑑査となる二回目の特選までずっと続いた。十年目で一回目の特選を、五年後にもう一回特選を受賞。一回目の特選はハゲコウという鳥の絵である。「土屋禮一先生が、選評で『写生の意味をしっかりと理解し、この作品の命の輝きは特別である』とコメントしてください。過去の尊敬する作家もみな土屋先生が推してくださいだったので、とてもうれしく報われるような想いがしました」。

二十代後半で、海外へ一カ月ほど出たこともある。非常勤の仕事と絵とで忙しく切羽詰まつて現実逃避でバルト三国に行った。言葉も通じなかったが、好きなクリムトとシーレを見ようと途中でウィーンへも行った。「ウィーンでクリムトの『接吻』の本物を眼の前にした時の衝撃は今も深く心に刻まれています。『いい作品というのはあつたと言っただけものが言えなくなる。どうだこうだと言える絵は大し

た絵ではない』という横山大観の名言があるんですが、まさにその通り、その場に立ちつくしました。いつか自分もそんな境地までたどり着きたいと、その時の衝撃を思い出しては自分の作品を眺めています。が、まだまだ道のりは長そうです」。

絞らず固まらず画風をもたないのが 若い時の自分のスタイル

制作過程を尋ねると、「僕は、こだわらないのがこたわりなんです。モチーフにこだわらない、絞らない、固まらない、画風をもたないのが若い時の自分のスタイルと思つている。学生の頃『絵描きは四十歳からが新人』と先生に教えられて驚いたことがあります。それまではいろいろなものを吸収して、しっかり時代を見て柔軟な姿勢で取り組みたいと思つていました。四十を過ぎた今もその気持ちに変

わりありません」。

一作品を描くのに二十―三十枚もの下絵を作るという。同じモチーフで位置か色を変え、作品に至るまでに何十ものスケッチや下絵があり、厳選したものをひとつ選ぶ。「写生を基本としながらも色を無造作において、その色模様からアイデアを出してみたりと様々な表現を楽しみながら可能性を探っています。計画なしに本画を始めると最初の想いとかけ離れて收拾がつかなくなることもあります。勿論そこから面白い表現が生まれることもあるんですが、学校を卒業し、働きながら絵を描くとなると、ある程度コンセプトをまとめておかないと仕上がりにまで到達しないこともあります。自分にとって下絵作りは長く安定して作品を描いていくための礎といえます。本画制作になれば直感的に進めるのではなく、予定外も多々ありますが、基本的には下絵を元に計画的に進めていくタイプです。大学、



跡 1999年 第10回青垣2001年日本画展



f i v 2006年 第38回日展 特選

大学院時代に諸先生方からしつかりご指導いただきました。

日展には年一枚、日春展、グループ展のほか、日展、創画、院展の十人を集めて現在日本画研究会で大きな作品の展覧会をしている。そこでは七メートル三十の作品を出した。「四十代は自分の表現を突き詰められる状況にあるので、一人よりもグループで切磋琢磨表現していきたいというのがあり、東京と京都で展覧会を行いました。出品作品は抽象的な表現ですが、主題を『時代』として、向かって右から過去・現在・未来という意味を持たせています。画面の所々に今住む大阪の町並みや有刺鉄線等々を具象的に描き込んで日々の生活の中で思うこと、感じることを散りばめています」。五日程展開した抽象表現の集大成ともいえる作品です。

Heisei Chaos 2016年 現在日本画研究会展

作品は自画像にもなる

作品制作にも流れがあつて、都度モチーフを変えてきていた。猛禽類を描いて特選を受賞してから抽象に行き、動物の二回目から、一気にシフトチェンジした。そのときは気持ちの鮮度が保てずに動物・鳥を描けなくなってしまうと同時に仕事が変わり、結婚し子供が生まれ、環境が一変した。その環境・状況の変化に抗うことなく身を任せ、自身の作風を一新し、五年ほど抽象的展開を試みたのだ。そして時間を寝かせ、またハゲコウが翼を広げ飛び立つ姿を描いている。「大きな鳥で、天王寺動物園やリトアニアの動物園にもいました。写生から入ったものと、抽象の色面分割から入ったのを合わせてみようということ楽しんで見せる絵であると同時に、これは自画像という気がします。環境が変わり、色々なものを背負っていく上で飛び立つ自分。自分の中にある情熱や願い、言葉にならない何かも乗せて表そうと思いました」。

作品の裏側にある美意識や生活感を感じてほしい

日展の魅力を尋ねると、「魅力の一つは多様性です。一定のレベルに達した作品であることはもちろんですが、日展は鮮度のある若々しい作品に寛容です。昔ながらの古い形式もあるがそれ以上に新しいものを望む気風が日本画にはありますね」。

きりです。そういう意味でも団体展が作家を育てるともいえると思います。『若い時の苦労は買ってでもしろ』といいますが、打たれ強くなつて、落選を恐れずにチャレンジしてほしい。その見返りがしつかりあるのが発表の場としての団体展です」。

鑑賞者の人には、「とりあえずは好き嫌いで見ていただいて、ただ、百五十号一作描くの一年かける人もいれば、自分の人生をかけてそれだけのためにつき込んでいる作家がたくさんいる。そういう濃い作品が並んでいるので、足が止まったならば、その人の絵の裏から出る生活感や美意識も感じていただければ、作家は描きがいがあると思います」。

「ここは父の空手の道場だった所です。両親には感謝しています。僕には自分ができなかった好きなことをして生きてほしいと、よくバックアップしてくれました。今、描けているのは両親のおかげで、両親の理解は深いです。だから僕は恵まれています」

画家である夫人の影響もあり、色を描くようにもなったという青木さん。「互いの作品を批評しあうことはありませんが、行き詰まった時に良いアドバイスをもらうことが多く、助けになっています」。常にしなやかにさまざまなことを吸収しながら新たな挑戦を続けていく。

学生の時はクラスの三分の一は団体展に出したが、今は大学でも大学院生でも団体展に出す学生は少なくなった。AO入試もあり、大学に入りやすくなったのと同時にすごく臆病だと感じるという。「学生に『なぜ出さないの?』と聞くと『めっそもない』と謙虚で従順な子が多い。でも若い時はもつと図々しく大きな気持ちを出しても許されると思います。団体展で面白いのは学校の先生や第一線で活躍する作家の作品の横に自身の作品が並ぶ可能性がある。それが大きな希望になった。今の子ももつとぶつけていく環境であつたらいいのに、団体展日展は敷居が高いというイメージを勝手に作ってしまったて美術館よりギャラリーのほうが近い気がしている。団体展はいいものを描けば発表が約束されるわけで、自分を成長させるきっかけもあるのに見過ごしている気がします」

若い人へは、「日展に合わせようとするのではなく、日展になかったものの、僕らが理解できないものを目指して発表してほしい。新しい価値観を提案するくらいの心意気があれば最高です。簡単には入選できませんが、しっかりと自分の身の丈で自分の環境でしか描けない作品を描いて入選できれば、それが発表されて巡回されるわけだからもつと広がる可能性がある。もう一つ、制作に没頭すると知らず知らずのうちに独りよがりになり突き進んでしまう危険があります。そんな中、一定のレベル以上の作品が並ぶ会場で、自作を客観的に見れる『場』をもつというのは非常に大きい。自宅で見るとは全く異なつて見えることがあり、初入選から二十年以上経つ今でも展覧会場で自作を見ると反省し



青木 秀明

Hideaki Aoki

1975年、新潟県生まれ。1996年、第10回青垣2001年日本画展 優秀賞。2000年、京都精華大学大学院芸術学部日本画コース修士課程修了。2001年、第36回日春展 奨励賞(08日春賞)。01,京都日本画家協会新鋭選抜展 京都府知事賞。2002年、第9回川端龍子大賞展 龍子大賞。第13回臥龍桜日本画大賞展 優秀賞。2003年、第21回上野の森美術館大賞展 優秀賞・彫刻の森美術館賞。京都日本画家協会選抜展 京都新聞社賞(06京都日本画家協会賞)。2006年、第38回日展 特選(同11年)。2007年、2007京展 市長賞。2013年、第15回フィレンツェ賞展優秀賞。ベストセクション美術2013出品(東京都美術館)。2016年、第5回都美セクショングループ展 現在日本画研究会展出品。現在、日展準会員、日春展会員、京都日本画家協会会員。

西房浩二

金沢から南西へ車で四十分ほど、石川県能美市にある画家のアトリエに伺った。毎日の大半を過ごす、天井が高く明るいアトリエには、明日納品という完成間近の風景画がイーゼルに置かれていた。大きなスピーカーと数本のギター。音楽好きな一面も窺える。

奥能登の柳田村（現能登町）の寺に長男として生まれ、寺を継ぐことを前提に東京の美大で絵を学んだ後、石川県に戻って画家として活動している西房さん。画面構成に力点を置き、近年はヨーロッパの風景画を中心に描く。中学校での油絵との出会いから伺った。

教則本を頼りに中学一年で油絵を

中学一年の夏休みだった。見たこともない油絵を描いてみたい、そこからすべては始まった。
「なぜ油絵にしたのかわからないのですが、夏休みの個人研究に油絵を描こうと思って隣町までバスに乗って本や道具を買いに行った。油絵を見たこ

ともなかったのが、教則本を買ってきてそれを見ながら描いた覚えがあります」

西房さんは奥能登の柳田村で昭和三十五年に生まれ、育った。親戚で美術に携わる人もいない、美術の先生もいなかった。「好きだったとしか言いようがないです。最初に描いたのは水彩のような油絵です。その本には碌山美術館を描いている作例があつて、作家が誰だったかわからないけれど、それをよく見て描いた。それからゴッホの『ひまわり』みたいなものを描きたくて、校庭のひまわりを夏休みに描きに行ったりしました」。

高校の時から美大に行こうと思い、金沢の予備校に通って準備した。現役で受かった日本大学芸術学部へ進む。

「僕は実家が寺なんです。長男で継がないといけないという話をずっとされてきていて、宗教の大学に行くとなんまり免許ももらえてなれるのですが嫌だった。絵を描かせてくれれば戻ってきて仕事をするという約束をして美大に行きました。両

親は亡くなって、今は実家の寺も継いで、細々とやっています。昨日も能登にお参りに行ってきました」

大学を卒業後、地元に戻ると、中学校の美術教員、その後高校の教員となった。

教員と画家を両立

画家としての道のりはどのように始まったのだろうか？

「伊牟田經正先生に憧れて、光風会に出し始めました。日芸の学生時代、池袋西武が近かったので毎年安井賞展を見ていて伊牟田先生の存在を知り、それで先生と知り合いたくて光風会に入って、その後、日展にも出しましたのです」

一度目は落選。二度目に入選した。最初は人物画を描いていた。しかし、教員をしながらの制作活動はモデルと時間を合わせるのも難しく人物画を断念。静物は並べておけばいつでも描けるので静

物画を描き始めた。静物画で日展にも出品。しかし、六回連続で落選。七回目に入選したときは三十歳を過ぎ、それから落ちたり入ったりを繰り返してきたが、ずっと休まずに出品している。

「師匠の影響が強いときは、借り物なのでどうもうまくいかないのです。少し離れて自分なりのものが出てきたときに認められました」

特選受賞のきっかけは静物画の背景にあったという。「知り合いが、家に飾っていた赤い板がとても気に入って拝借して描きました。和船を解体するときに鋸で切って飾っていたそうなのですが、その

赤い背景にしてから認めてもらえました」。一回目の特選は二〇〇二年、力を入れて描いた絵で、自分の中に気持ちが残っているという。二〇〇六年の二回目の特選の作品も背景に和船の板を使った。

「静物画はいろいろアイデアを変えて描いても毎年同じと言われてしまう。背景は一番面積が大きいので赤の次は木の背景を白く塗ったり、次は黄色というように三種類回して描いていたのです。たまたま赤いのがあたって特選をいただきました。僕の絵はあまり細密ではなく見た目はなんとなく写真みたいと言われるが、近くで見るとそんなに細

かくもなく、絵画的に空気感とか光の、あまり目に見えないものを描きたいと意識しています」

ブラハに一年間留学

一度目の特選を受賞した後、二〇〇三年に大きな転機が訪れた。何度も応募していた文化庁の海外派遣制度に受かったのだ。当初は教職を一年休んで行くはずだった。しかし教育委員会の方針が変わり、それがなくなくなった。行くなら教員を辞める、二つに一つだと言われた。



夏の音 1996年



Largo(ラルゴ) 2006年 第38回日展 特選



「それで悩みましたが留学を選んで、絵描きになりました。今となつては良かった。四十ちよつとで辞めて、いい時に辞めたと思いますね」

単身留学し、チェコのプラハに一年間滞在した。具象の作品を描いているため、作品を描くときには写真を使うことが多い。そこで、写真と絵画の関係を研究したいと考えた。

「チェコには昔の白黒写真で風景や人物を撮っているいい作家がたくさんいます。絵画というのは描けば描くほどどうしても写真に寄つてしまふ。ではどのように写真と違うものを描くかというのが研究テーマでした」

唯一ある国立の美術大学に学生として通いながら、いろいろな所に車でかけた。留学生もたくさんいるが、アジア人はいなかった。

「一緒に油絵を描いているとあちらの人のしつこさを感じました。同じものを描いてもここまでやるかというくらい脂っこい。油絵の国だと思えますね。日本は水彩の文化で、さらつとしているなという気がします。特に金沢に住んでいると手わざ、工芸が盛んです。同じアジアでも中国は西洋と似ていて脂っこい。細部まで全部描き切るところがあります。日本人は省略して見せるところがあるから、大きく違うということが自分の中で実感でき、自分の立ち位置がわかった気がします。それであちらの名画に憧れるばかりではなくなり、じっくり腰を落ちつけてできるようになったのが大きな収穫でした」

また、生活やものを見る眼が変わった。絵が中心になって、絵のことをよりよく考えられるよう

になり、また絵を描くときの考え方をもっと深められるようになった。

帰国し、絵だけを描く毎日が始まった。朝起きてずつと描き、夕飯後も描き、一日十時間以上は描く。「教職を続けていたら無理です。具象ですから時間をかけて描かないと表現できないことが多いので、細かく描くのではなく眺める、考える、を含めて時間はかかると思います」。

二〇一四年頃からは、風景画を描くようになった。「静物画を二十年ほど頑張ったのですが、これ以上違うアイデアが出てこなくなった。また静物だと対象物との対決みたいなのでびりびりするのですが、風景を描くと気持ちも柔らかくなるりゆつたり描けるので、思い切つて替えたのです。構成は僕の中では大事な要素ですが、風景も静物画的に構成したものを、毎年場所を変えて描くようにしています。最初はフランスのモレーを取り上げた。去年、日展の都知事賞をもらったのもモレーなのです。前よりは光と空気感を描けるようになったなと思いながら描きました」。

毎年二回スケッチをするためにヨーロッパに行く。既に十数回行つており、有名な所は行きつくしたので、変わった所や水辺の風景を探して今回はポーランドを取材する。季節によって春と秋でもずいぶん違う。「チェコに滞在した経験や北陸に育っていることもあり、北の方の色のないものや淡い北の町が好きでした。青や黄色は描ぎにくかったのですが、最近はまだ少し色を使つたものも描けるかなと思ひ、イタリアやフランス南部、マルタ島等に行つて、色にも挑戦しているところです」。

実際の風景とはずいぶん違う。あつちによるのではなくこつちに引き寄せるという感じです。

描き方は、水彩で描いて取材して写真を撮つて、うちに帰つていろいろとひねくりまわして決めていきます。風景を選ぶのは勘ですが、風景は場所を変えると違う絵になるので、まだ描きたいものがあるうちは風景を描こうと思うのですけれど、人物で始めたので、いいモデルがいたらもう一度人物に戻つてもいいかなと思います」

最後に芸術家を目指す若い人へのメッセージを伺った。

「これはもう貧乏に負けないことです。とにかくがみついて、細くてもいいから止めない。それだけです。才能のある人は別ですが、普通の人にはねばりです。そう思います」。

絵というのはアイデアだけでなく、作家が考えて描いていく中の時間の積み重ねのようなものです。斬新で面白いものは考えられますが、それは作品ではなくただのアイデアで、毎回作るとそれで終わり。展開したところでそんなに深いものはできない。答えが出ないことです。が、ああでもないこうでもないと思ひながら描くのが絵だと思うのです。作品はみなそうです。止め時がない。要領よく感じのいいところで止めればいいのかもしれないけれど、それで満足できにくいところもあるし、展覧会が終わつて家に作品が戻つてくるとまた描いてしまひます。必ず描いて、その後しまひだけなんですけれども、どうしても描けなかつたなと残るのです。仕方がないですね」

深みのある日展 いい作家の絵が並ぶことが大切

週れば日展との出会いは高校のとき。金沢まで日展を見に行つて、こんなにきれいな絵があるのかと思つた。その時の印象は今も鮮明に覚えている。

その後日芸で出会つた先生は独立の方ばかりで、その絵は強烈なものだった。「でも、今、一時期流行つた強い絵が一般的に飽きられてきたというか、絵というのはアイデアだけで描くのではなく、もつと腰が座つたものの、単純なものを描いてもいかに深く見えるか、その作家の態度が大事な部分があるので、そういう意味で日展というのは深みがあるかなと思ひ直しています。評論家の先生も日展を見に来てくれる人が増えてきたし、在野の友達も日展を毎年見ている人が増えている。見直されている感じがすごくありますね。今後は、より開かれ、若い作家が見てもあまり敷居が高くないことが望まれます。あとはやはりいい作家がたくさん出てきて、若い人や絵が好きの人がまた見に行きたいと思うような作品がずらつと並ぶような会になるといいと思います」。

今後の作品について尋ねた。

「テーマはずつと変わらず、空間や光、匂いなど見えないものです。構成した絵を描きたいのです。どう構成したら表現しやすいか、絵画でしかない自分なりの絵の変形と画面の構成のバランスを意識しています。普通に見えても、実は



西 房 浩 二

Koji Nishifusa

1960年、石川県生まれ
1983年、日本大学芸術学部卒業
2000年、昭和会展 日動火災賞受賞
2001年、光風会 会員賞受賞、安田火災美術財団奨励賞展秀作賞受賞 前田寛治大賞展大賞受賞
2002年、日展 特選受賞
2003年、文化庁選抜美術展 文化庁 新進芸術家派遣によりチェコ・プラハに1年間派遣
2004年、Art Prague 出品(プラハ)
2005年、損保ジャパン美術財団選抜奨励賞展
2006年、光風会 辻永記念賞受賞、日展 特選受賞
2010年、光風会 文部科学大臣賞受賞
2012年、公募団体ベストセレクション 美術2012展(東京美術館)
2016年、改組 新 第3回日展 審査員・東京都知事賞受賞
現在、日展会員、光風会理事

M o e t 2016年 改組 新第3回日展 東京都知事賞





洋画家・日展準会員

Zeng Jianxiang

曾 剣 雄

名古屋から地下鉄に乗り換え一時間ほどで豊田市に着く。トヨタ自動車の本社をはじめ、関連会社が軒を連ねる町である。曾剣雄さんは中国から来日以来、二十数年間この地に根を下ろし作家活動を続けている。市役所や図書館には絵が展示されているほか、名誉市民を描いたり、トヨタ関連の企業の社長をはじめ、街ぐるみで作家を応援しているという。これまでの軌跡から、中国と日本の文化や芸術への取り組みの違いなど、明快に語ってください。

十五歳で湖南師範大学へ。油絵を学ぶ

一九六二年、中国湖南省長沙市で三人兄弟の次男として生まれた曾さんは、小学生の頃から鉛筆で絵を描くのが好きだった。その後はグワッシュや水彩で描いていたという。

そうしたなか中国では一九六六年から一九七七年まで文化大革命があり、その間、大学は一切募集

をしていなかった。曾さんが受験した一九七七年にはそれまで待っていた人々が一気に受験した。かなりの倍率で、年齢層も幅広く、曾さんは一番若い十五歳で長沙市にある湖南師範大学に合格した。「高校二年を終えて大学へ行きました。もしもあのとき大学の募集がなかったら、卒業後は田舎に行つて稲を蒔っていました。大学で初めて油絵を本格的に学びましたが、油絵を教える先生はほぼ全員、旧ソ連時代に影響を受けた人たちでした。そのため、見るものはレービンなどリアリズムの作品が多く、写実の基礎が学べました。あの時代の中国の画家はみなデッサンの基礎はしっかり勉強しました」。

て来日。一方、その後も二〇一一年まで毎年二カ月間中国に帰つて大学の仕事を続けた。

油絵専攻のため、最初はヨーロッパや米国に行くことを考えたが、武漢の大学院生のときに知り合った夫人が日本語専攻で、日本と中国の合併企業に勤めており、日本で仕事のチャンスがあった。「日本にもヨーロッパのコレクションがたくさんあるので良いかなと考えたのです」

名古屋と中国は、一九七二年から卓球を通して交流があったという。一年後からは芸術ビザに切り替え、後は永住、現在まで豊田市を基盤に活動している。豊田にはトヨタ自動車関連の企業がたくさんある。

「私は運が良くて、近辺の会社の社長さんが私をサポートしてくださっていて幸せだと思います」

湖北美術大学で教えながら一九九四年に来日

一九九四年に、名古屋芸術大学の留学生とし

日本の公募展に出品したのは一九九六年。中

部白日会のリーダーだった牧内則雄先生に「曾さんは写実の絵だから白日会に出してください」と誘われ、静物と人物の二枚を出した。すぐに入選し、白日会の佳作賞を受賞した。ただ、一枚しか展示しないのが基本だった。白日会のパーティーの時、亡くなった柳沢淑郎先生から「もう一枚の人物の絵は日展に出してください」と言われた。

「日展を知らなかったけれど、初めて出して入選しました。運がよかったです。白日会の先生にご指導いただき、大変お世話になりました。それから毎年、白日会と日展に出しています。白日会は九十六年に会友になって、二年目は準会員、三年目に富田賞をとつて会員になりました。日展の特選は八年目で二〇〇四年の『窓辺』です。長崎県美術館の巡回展ではポスターにもなりました。第二回目の特選は二〇一一年です」。

一方、ヨーロッパで油彩を多く見たいという夢がかなったのは、二〇〇〇年のことだった。「三カ月をかけてフランス、イタリア、ベルギー、オランダ、スペインなどゆったり回りました。やはりこういう風土、水、空気、土からヨーロッパの油絵が生まれると実感しました。それに對し、中国の風土、山や水や霧などはやはり水墨画になるのだと思いました」。

一番好きなのは北ヨーロッパ、オランダで、特にレンブラントが好きだと語る。アムステルダム国立美術館の「夜警」にはたいへん感銘を受けた。油絵が最初に発展したフランドル地方からオランダ、南ではイタリアのフレスコが良かった。貴重な経験となった。

二〇一一年には、中国の大学を辞めることになる。そして日本での仕事も多くなり、作家に専念するようになった。

「振り返れば日本のバブル時代が終わつて来日しました。今中国はバブル時代で、現代アートも写実も売れています。帰つて友人のアトリエを見ると二百平米は小さい方で、四百、一千平米のアトリエもあります。でも、今私は日本で静かに絵に

専念できる。自分のやりたいことができて、そういう意味では良かったと思います」

写実作品を描いて

作品は写実で、人物、風景、静物すべてを描く。制作にあたっては、歩いていて何か見て、これは絵になると思ったらすぐにメモし、構図をたくさん



窓辺 2004年 第36回日展 特選

考える。例えば手だけ、角度の違うものをいくつも描き、人物のだいたいのイメージができてからモデルを呼んで実際のポーズを決める。

「他の人と違うのは、描きながら考えが変わり、背景や、特にポーズが途中でよく変わっていきます。それでいつも締め切りぎりぎりまで徹夜で描いて搬入します。写実は時間がかかります。今はだいたい春一枚は白日会、秋一枚は日展で、その間に小さな絵を描いています。美術がいくら発展しても、現代アートがいくら生まれても、写実は基本的にわかりやすいので見る人は理解しやすいのではないのでしょうか」

中国の展覧会

来日前には中国でも展覧会に出品していたという曾さん。中国の公募展について語っていた。

「中国でも全国美術展が五年に一度あり、展示の一年前から募集します。水彩、油絵、中国画、版画があり、例えば水彩は湖北省に展示、中国画は上海、もう一カ所北京で何かを展示するというように、いろいろな所に展示します。選ばれた一番優秀な作品はまとめて北京でも展示し、全国へ巡回します。選考は毎回、各科で違う審査員が行います。応募資格は平等で、審査員も落ちる可能性があります。ただ審査員は賞を取ることができず、展示は別になっています。中国人の批評は厳しいので展示の後、「こんなにひどい絵で審査員の資格があるのか」とすぐにクレームがきま

す。一步間違えると大変で、いつも喧嘩するくらいになります」

日本独自の公募展

来日後、日展を見て驚いたという。それはまず入場者数である。当時名古屋展だけで十二万人以上の人が訪れた。「五科にわたり展示し、国民の美術教育として非常にいい展覧会だと思っています。日展は今年百十年、一つの展覧会をこんなに長く続ける日本人の団体意識、作家たちの団体への協力意識はすばらしいです。通常作家に団体の意識はありません。何人か組んでやってもやはり個性が強いのでなかなか一緒に難しい。日本では白日会、光風会も太平洋もいろいろな団体がみな百年近く続いて、これは日本だけができることです。

ただ、日展の作品を見ていると、人物を描いている人はずっと人物、静物はずっと静物、風景はずっと風景で、構図も描き方もほぼ同じという人が多いように思います。

日展は国際化をするべきだと思います。特に外国人から見ると違う意見があると思いますので、できるだけ海外と交流し、もっと刺激を受けたいほうが発展につながるのではないかと思います。例えば良い作品を選んで中国で展示する、中国の画家たちと一緒に展覧会を行うなど、私にできることはやりたいと考えています。

また、会費によつて団体が運営するのは当然のこと、中国の展覧会も会費は出しますが、政府

からの支援があります。中国では、文化は国のソフトの実力と考えています。経済はハードの実力。いい画家を選んでフランス、イギリス、アメリカで展覧会をする場合、全部政府が応援します。政府が国の顔を世界に見せたいのです」。

日展の魅力を広め、国際交流を

現在愛知教育大学の非常勤講師もしている曾さんは、美術専攻の学生二十人に日展についての簡単なアンケートを行ったという。その中で、日展を見た人は六人のみだった。チケットは自分で買った人はおらず、もらった人は三人、学校から配布された人は六人。日展に今年初めて行った人は一人。一年から三年前が五人。それより前は一人。日展の印象はほぼ普通という結果だった。日展の魅力をもっと広めなくてはと強く感じたという。

「みながどうしたら日展に関心をもつか。宿題のテーマとして日展を見に行くというのもありますが、これからはもっとインターネットを使つて情報発信するのが大切です。たとえば、インターネットで日展に投票するとか作品について意見を書けるシステムを作る。読んだ人は興味を持ち、会場に行つて実物を見るでしょう。今は誰もが毎日スマホを見えています。インターネットは信じられない威力があります。ただ、逆にインターネットを見たから会場へ行かなくてもいいという考え方もあります。これをどうやってうまくやっていくかです。



アトリエ・物語 2011年 第43回日展 特選



草原へ 2016年

また外国の美術館では巨匠の絵の前でよく説明をしています。先生が生徒を連れて行つて解説をするのもよいことです。小さい頃から興味を育てるべきで、年に一回でも学校から子供を連れて行けば、子供も楽しみだと思います」

「私が学生だった頃、武漢には何十という大学があり、美術専攻を募集していたのは二つの大学だけでした。今は三、四十の大学すべてが美術専攻を募集し、毎年一万から二万人の学生が卒業しています。日本の場合は逆に、美術を志す若い人が減っている。実際、子供時代、絵が好きな人は多いけれど美術の道は険しくて食べていけないというイメージが強くなっています。中国で増えているのは普通の学科よりも入りやすいというのと、絵だけでなく工芸、インテリアデザインなど、実用として仕事を探しやすい面もあること、また画家になりたい人にとっては、今の中国では絵が高くて売れるというのが原因の一つです」

最後に今後について尋ねた。

「今年の作品は少女の人物画です。日本で生まれて育った中国人をシリーズで描いています。こういう人の中国に対しての故郷のイメージ、それを表現したいなと思っています。

今後は絵画教室も考えています。絵ももちろん今までの道は続けていきたい。また、できるだけ国際交流的なこと、日本と中国の交流をしたい。今五十五歳ですが、芸術家にとってはこの十年くらいは良い時期です。考え方も技術面でも一番できる時代なので、この十年は一生懸命やりたいと思っています」

曾 剣 雄

Zeng Jianxiang

1962年、中国長沙市生まれ
1988年、中国湖北美術大学修士学位取得、同学校講師。2001年准教授になる
1994年、来日。'95年まで名古屋芸術大学研究生
1996年、第72回白日展 佳作賞受賞、以後毎年出品。第28回日展初入選、以後毎年 出品
1998年、第74回白日展 富田賞受賞 会員になる
2000年、第31回日展 東海展中日賞受賞。平成12年豊田文化奨励賞受賞
2004年、第36回日展 特選受賞
2005年、第81回白日展 アートもりもと賞受賞
2009年、第85回白日展 三洋美術賞受賞
2011年、第43回日展 特選受賞
2012年、第88回白日展 文部科学大臣賞受賞



前芝武史

学部生の数よりも大学院生が多いという兵庫教育大学…、学部ならびに、現職教員も含む大学院で博士課程修士課程・教職修士課程を担当する前芝さん。大阪から車で約一時間半、兵庫県加東市の広大なキャンパスにこの彫刻家を訪ねた。大学における研究では、人体塑造の制作とともに、彫刻芸術を文学や建築・音楽やデザイン等と同等の芸術・学問とみなし、リベラルアーツの視点でその特質を浮き彫りにすることを志向している。そんな氏の話は、小学生時代にさかのぼり、意外な展開をみせた。

美術が自分自身を成長させるきっかけに

研究室には、自身がデザインしたベースギターが置かれていた。人間工学というよりも自身の身体形状や演奏姿勢、志向する音楽・奏法等に基づき一からデザインされたもので、どのような高度なアプローチにも機敏に応える極めて機動性が高い楽器だそうだ。

「絵画・彫刻という純粹芸術は、応用芸術の基礎学。この楽器は、私の研究の一応用例です。実はジャズ音楽家を志していた時期も長いのですが、やはり美術も好きで、入った大学が教育学部の美術科…、自分自身が真剣にやれて一生をかけて成長させてくれると、一番感じたのが美術でした」

大阪で育った前芝さんは、絵が大好きな少年だった。「小学三年、屋外で植物を観察する授業があり、三時間目からお昼も帰りの時間も忘れ夢中になって描いていました」。午後の授業を完全に失念し、以後の授業を全て欠席…先生には叱られたが、「子どもなりに、なぜ水が吸い上げられる力が発生するのか、また葉に届いた後の水は血液のように循環せずそこで概ね蒸発するのだろうか…そんなことを考えていました」と話す。これは現在に至る構造観察や、前芝さんの得意とする解剖学の原点なのだろう。「例えば手首が回転するのは何故か…それは前腕の二本の骨がパラルルになるかクロスするかに依拠します。実際に見えない

皮下の力学構造やからくり、原理を感じ、知るところで表現は随分と奥行きを増します。構造を知り構成を考えるとというのはどの学術領域でも最も根本的な事だと考えます」。

中学高校と大阪で過ごし、滋賀大学教育学部小学校課程美術科に入学。「色々なことが勉強できそうだと思い、初等を志願したのです。また当時は応用芸術…デザインにも興味が行きましたが、より造形芸術の本源的本質的なことを深めたいと感じ、彫塑の門を叩きました」との事。

大学卒業後は、筑波大学大学院へ進学。「人体塑造をもっと専門的に勉強したい、修士論文もしっかりと書いてみたい、そんな思いからの進学でしたが、修士課程では彫刻とは何かという最も重要な課題にどっぷりと向き合う機会に恵まれました」。

修士課程修了後は、博士課程で教育学を専攻。「大学院では、彫塑教育をテーマとした教科内容的研究を目指し、これは現在も継続中ですが、当時は大学では論文、家では、ひたすら彫刻制作

という生活でした。しかし経済的に厳しい状況に陥り、退学を余儀なくされました」と話す。

養護学校でデッサンや具象彫刻を扱う

博士課程退学後は、筑波大学附属桐が丘養護学校高等部美術科に赴任、手や脚に障害がある高校生を授業の対象としたのだが、このことが一転機となる。「赴任当時、初めての授業でした。」明るく教室に入っていく、高校生に「やあ、みんな、美術は好きう」と聞くと、白けた表情で「嫌い」という一言の返事。「なぜ？」と聞くと「手が不自由で絵が下手だから」との答え。そこで「上手い下手だけが美術を決める訳ではないよ」という話をする。「そんなことは中学で飽きた」という冷たい返答がまたもや返ってくる。「じゃあ聞くけど、上手くなったら好きになるのかい？」「そりゃあ好きになるに決まっているで

しょ。」「じゃあそのことだけは僕と約束だ」、そのようなり取りが最初にあつたという。

そこで考案されたものが、大小の団子の組み立てで形を考えるというものだった。

「よし、今日は気楽に紙に小さきまざまな輪を重ねて描いてごらん」授業はそこから始まった。「じゃあ次は輪の中の線を消しゴムで消してみて。そうすると…、単なる輪の重なりが、まるで立体の団子が前後に置かれたみたいに変化したね!」画面の変容に驚く高校生たち。「よし、今度は手の写真を見て。組み合わさった団子に見えてきたかな。直接その写真に自分が感じた団子を描きこんでみて」。冷めた高校生たちの顔つきが徐々に変わってくる。「よし、じゃあ今度は僕が、粘土で同じことをするから見てね!」…団子状の粘土が並び積まれ組まれていくその形に尚一層驚く高校生。声を上げる高校生。興奮し、自分もやってみたいと名乗りを上げる高校生



南烏克蘭出の男Ⅳ 2012年 第44回日展無鑑査出品



南烏克蘭出の男 一夜半過ぎー 2012年 日影展

…。その授業で前芝さんは、やがて手先の器用不器用を越え、デッサンとは何か、彫刻とは何かを扱い、彼らを驚きと興奮で満たしたのだろう。

この取り組みは美術科教育学会の学会誌に掲載され、翌年、学会の年度最高賞に選ばれている。そして「美術を感性だけで語るのは、近代以後に於いてのみの傾向です。確かに私にも野性的な直観を頼りにすることもよくありますが、人間には悟性(理解能力)も理性(思考推論能力)もあります。感じる、理解する、感じさせるように考える…そのサイクルこそが本来のものです。造形の過程には、あなれば、こうなる、こうすればあなるという論理ともとれる造形的思考も、原理というものもきちんと存在しますが、この取り組みや論文ではそのことが証明でき、またこれが以後の研究の重要な一指针となつていきます」と話す。そして二年間の教職時代を経て現在の兵庫教育大学赴任に至る。

自然は神のデザイン、人間の考えがアート

「日展を初めて見たのは高校生の頃です。長期休みの美術の課題で大阪に行ったと思います。物凄いい数に圧倒され、この人たちは、どれだけ時間をかけて作ったのかと思いました。高校で美術は得意のつもりでしたが、明らかに大きな力の差を見せつけられ、がっくりとして家路についたのを思い出します」

その後、日展に出品することになるのは一九九七年。しかしながら二年連続で落選し、一九九九年に初入選を果たすことに。「初入選は、筑波大の院生時代でした。裸体男性の横臥した格好のトルソで、

大胆なモデリングで強い動きと豊かな量感の実現を無我夢中で目指した作品でした。今思えばたくさん間違いを含んでいたにも関わらず、恐らくは意気込みぐらいはあたたかい眼差しで評価してもらえたのかもしれないと話す。それからは連続入選しているが、博士課程後期二年生程まで、紆余曲折、迷いもあり、これだという根本の確証がつかめぬままやみくもに突っ込んだ苦しい時代も当然経験したという。その頃は人間の根っこを成長させる時代だったのかも知れないと前芝さんは追想した。特選は今から六年前。一回目の特選は男性の立像だ。二回目は女性の立像。日展の他には、白日会、日彫展に出品している。

「作品に関しては、私には無からの創造とか、そういった考えはありません。西洋思想で言うならば、神は無から万物を創造したということになります。生きとし生けるものを意味するcreatureという語は、その象徴ですよ。自然は何と美しい…その合理性！ その機能！ その存在！ これに対し、B.T.という言葉は人間が創造したものという定義があります。人間が思いつくこと等、大宇宙・自然界に於いては本当に知れたもの…西洋思想に則れば、我々は日展や具象というものを介して神のデザインを学んでいるのかもしれませんが。」と括った。

塊の建築と人体の構造をテーマに

「彫刻芸術は絵画芸術に比して形而下学的側面が強い芸術です。彫刻は物理的にも材質相当量の重量を有し、何かと不自由な芸術です。丸彫りに於いて



前芝氏の研究概要写真

は多視点を有するが故、特に創作には時間と労力を要します。そう、歌曲で言うならば、歌い手や歌詞が人間の精神を表すのに対し、低音楽器やリズム楽器は、音楽の実態…特にその基礎を構築するものですが、彫塑芸術はそうした低音楽器やリズム隊のような性格が強い領域としての印象があります。従って私の研究テーマはこうした形而下学的ともとれる造形それ自体に関心が向くのです」

そして「一方で芸術は人文科学系学問としての性格があります。自然科学系学問の終局の命題は自然とは何か、生命とは何か、宇宙とは何かを究明することにあるのに対し、人文科学系学問の同命題は、人間とは何か、人生とは何か、幸福とは何かを考究する学問です」とし、「構造研究に傾倒するときにはモデルを使います。逆に不協和音のような美

に芸術と向き合う様々な同志達から健全な友好友情関係が生まれます。様々な事を臆せず語り、相互の影響の中で、自らの研究の発想を柔軟に且つ自由に広げられたり、自らの内面と表現を深化・熟成させたりすることができるのは、最大の魅力じゃないでしょうか」と語る。

覚めやらぬ興奮、尽きない興味、飽くなき探求心―彫刻の学問としての側面を探究したい

芸術家を志す人へ、については、「覚めやらぬ興奮、尽きない興味、飽くなき探求心という言葉があります。穏やかな楽しみにこうした要素が加わっていくと面白さは加速度を大きく増します。その内容は人それぞれで良く、またそれが良いのかもしれない。素晴らしい作品を目指し、汗を流しその過

程で自分自身も強く、時に厳しく、面白く、魅力的で深みある人間に成長していくことこそが重要ではないでしょうか」とコメント。

前芝さんが探求していききたいことは、学問としての彫刻である。

「時間・空間・エネルギー…私の好きな言葉です。こんなことを申し上げると貴方は物理学者か？と言われそうですが…例えば歴史学は時間を軸とした人間の関係学ですし、地理学は空間前提の社会学。そして話を広げていくと…」

「時間軸の上に音を置いていく」作曲。時間軸の音を拾い上げる」演奏。時間軸に言葉で話を構成する」文学。空間上に箱状の塊で構成する」建築。空間上の色彩構成」絵画、空間上の塊の構成」彫刻。…となり、これらは全て抑揚なり変化なりエネルギーの蠢きが見えるものです」



時 2014年 改組新第1回日展 無鑑査出品

を求め、形を崩すときや、人文科学系の命題に向かおうとするときには敢えてモデルから離れる事もあります」と話す。

展覧会は高度の専門の研究・教育機関

そんな前芝さんに日展の魅力を伺った。

「展覧会とは、高度の専門の研究・教育機関です。色々な展覧会を拝見しましたが、造形芸術の本質を学ぶならば、質・数からみて日展が最も深く勉強させてもらえる展覧会だと判断しました。日展は言わずと知れた国内最大の展覧会…大先輩や大作家、専門家、大学、高校、中学、予備校などの教員をずらりと擁します。時に厳しく、時にあたたかく貴重な助言、指導が得られるのは勿論、他にも、真剣

「そしてコンポジションという言葉が美術でも言われますが、この和訳は構成、作文、組み立て、作曲となります。いずれの領域でもこの事柄は最重要事項の一つとして扱われる訳ですが、この語の和訳からしても特に英語圏ではリベラルアーツ的に事象をとらえようとすると性格がよく見て取れます。これに対し、文学や、建築、音楽は学問的な認知が世間一般でなされていますが、美術だけが授業時間が割かれたり、一体何をやっているのか、何を教えているのかと言われたりします。こうやって周囲を見回すと人間が生み出したありとあらゆる物体には全てデザインが関わっているにもかかわらず、全くおかしな話ですが、私たちは言わばその基礎学をやっているのです」と話す。そして、「今後は彫塑は勿論、自らの塊の構築の手法をデジタル3Dで行う手法等についても探求していききたい」と締め括った。



前芝 武史

Takeshi Maeshiba

1972年、大阪府生まれ
1997年、滋賀大学教育学部小学校教員養成課程美術専修卒業
1999年、日展初入選
2000年、白日展 白日賞受賞
2000年、筑波大学大学院修士課程芸術研究科美術専攻(彫塑分野)修了
2003年、筑波大学大学院博士課程芸術学研究科芸術学専攻(芸術教育学分野)単位取得退学
2005年、兵庫教育大学実技教育研究指導センター助教授、翌年大学院助教授
2006年、美術科教育学会『美術教育学』賞奨励賞受賞(年度最高賞)
2008年、兵庫教育大学大学院連合博士課程Dマル合(学位審査主任等資格)取得
2009年、日彫展優秀賞受賞
2010年、大学美術教育学会・教科内容学検討委員会 彫塑部門代表委員
2011年、2013年 日展特選受賞
2012年、国立大学法人兵庫教育大学優秀教員表彰
2013年、白日会吉田賞受賞(彫刻部最高賞)
2015年、神戸大学大学院人間環境科学研究科博士課程学外学位審査員
2015年、公募団体ベストセレクション美術現在、兵庫教育大学大学院学校教育研究科准教授。日展準会員、日本彫刻会無鑑査会員、白日会彫刻部会員・関西支部副支部長

紺谷 武



京都南部、伏見区の住宅街に彫刻制作のアトリエを

もつ紺谷さん。出身は金沢で、地元の金沢美術工芸大学大学院博士後期課程を経て、京都教育大学で制作を続け、現在は大阪成蹊短期大学の幼児教育学科で、子どもの情操教育を目的とした図画工作などの講義を担当する。一方、日展を含め年に三つの展覧会に積極的に出品を続けている。アトリエには、展示から戻ってきた作品やこれから日展に向けて構想中の小さな粘土作品、素材などが置かれていた。

もの作りの環境と出会い

父親は日本工芸会に所属し、創作人形の世界で活動しており、その制作する姿を小さい頃から見ていたという紺谷さん。初めて日展を見たのは小学生の時。父に連れられていろいろな展覧会を見た。

「高校一年の終わり頃、父となんとなく将来ど

うするかという話をしていたとき、『金沢美大に

行ってみようかな』と話していたら、偶然ですがそのタイミングで二軒隣にアトリエを構える日展の石田康夫先生が来られて、受けるならデッサンの勉強をしなくてはとアドバイスをいただき、習いに行くようになりました」

金沢美術工芸大学の彫刻科には現役合格。日展に出したのは学部四年生の時だ。「新制作の清水良治先生もいらして、出そうかと思ったこともあったが、『君は日展に出しなさい』と言われました。宮瀬富之先生が金沢美大に来られたということもあり、いろいろなタイミングで日展に出品しようと決めました」。

大学院に進学し、主に日展、市展、国民文化祭等に出品を続けた。修士課程に二年、その後博士課程に三年、計九年間、金沢美大に在籍。

その間、宮瀬先生が京都に戻られ、県外に出た気持ちもあり京都教育大で履修生として制作を続けた。現在は幼稚園教諭・保育士を養成す

る短期大学で図工などを教えている。

「父の跡を継ぐことを考えなかったかというとうそになりますが、それは言いませんでした。祖父はお土産物を作ったり、親戚も鉄工所をしていたりもの作りをしている人がいます。僕は三人姉の一番下で、兄姉はみんな異なる道に進んでいます。自分がもの作りという意味では父が一番近いところにいます。父はものを作って食べていくことの厳しさが身に染みっているので、僕の進路を喜んだかもしれないが心配はしていたと思います。でも反対はしないで応援してくれました」

日展では初出品で初入選してから十二回目で落選し、翌年に特選。その五年後に二回目の特選を受賞している。「賞をとって父親は喜んでくれました。初めは受賞の実感はありませんでしたが、喜んでくれていた姿をみてうれしかった。ぐるっと回って来て、実感してくると思いますか。いろんな人に感謝しました」。

堅い粘土で作り、石膏になってさらに手を加える

制作の過程は、基本はモデルに来てもらう。モデルの持つしつくりくるポジションがあるので、話をしながらそれを導き粘土をつけていくのが通常のスタイル。だが時間がかかる。最近は何もってスケッチしていたイメージを参考にポーズをとってもらうことも。去年の特選の作品も何年前に落書きのようなスケッチをしていたものだ。また、制作過程で普通と違うのは粘土の扱いだという。

「普通は柔らかい粘土を使います。最初は僕も柔らかい粘土で作りますが、作っている最中にどんどん硬い状態になります。それがくせなんです。柔らかい粘土にへらをいれるとへらについてくる形になるが、硬い粘土はナイフで切ったようなすっとした形になる。触っても指紋もつかない。叩くとそこに違う硬質な面が出てきたり、作っているうちにしつくりきていいなと思う価値観になっていった。

型を取って、石膏になってからも触る。プラスチックだと堅すぎて何もできないが、石膏だと可塑性も粘土に近い。茶色の風合いは上からお茶をかけているという。お茶の色を引き立てるためにアクリル絵具を使うことも。

表現は苦手。そこにある形を写す

そうした紺谷さんから意外な話が出た。「小さなときから、迷路を書いたり、塗り絵をし

たり、見ているものを描いたりするのは好きでした。自分の気持ち表現するのは苦手でした。日展に出した頃は、彫刻とは人体を使つて表現したものだと思っていたし、それも楽しいと思っていました。ただ人から見られると思うられるかわからないですが、自分は表現という感覚があまりない。こういうことを作者として表現したいというのはないんです。制作するときモデルをものとして見ている。だから、デッサンや写すのは好き。表現としての形ではなく、そこにある形を写す。これが美しいなと思ったらそれを写してみようという感覚が近いんです。モデルさんの寸法も

徹底的に測ります。でもそうやって写しても実際とは違うものが表出されます。それを繰り返し繰り返し、消そう消そうと思っても、消し切れない部分が作家としての密な個性だと思います」

日展の魅力を尋ねると「数が多いので、いろいろな年代の作品を見れます。ただ、伝統歴史だけだとそういうものを見慣れていない人にはわかりにくいと思います。昔は美術といえば彫刻、絵画とわかりやすかったが、今はいろいろなジャンルの表現がある。スマホアプリもひとつの表現ツールになつていて、SNSなど情報がすぐに入る魅力ある時代になっているが、そういうなかでどうする

見る人（大学院時代2004年に制作）





孤雲 1999年 第31回日展 初入選



きのう見た夢 2014年 改組 新 第1回日展

か考えています」。

便利な今の時代にあつて彫刻家としてのあり方も昔とは違うと感じている。

「ふだん相手にしている短大生を見てみると、PCやスマホなど僕が知らなかったネット環境の経験を生まれたときからしているのですから、汚い部屋で埃だらけで彫刻を作る必要があるかと言われたら、悩みますね」

若い人にはとにかくたくさん見てほしい

若い人へのアドバイスとしては、「とにかくたくさん数を見てほしい。見ることに慣れるために学生に学割を使つて美術館に行くように言うんですが、タダでも見に行かない傾向にある。

NYのメトロポリタンでも子供の鑑賞プログラムがあります。日本も取り入れてはいますが、日

本は美術が崇高なものだという文化で入ってきて、その教育は今も続いている。外国では日常と同一目線に美術があるんだと思います。町中にありますし。日本では、美術という言葉が生まれて百年以上経つてもまだ日常に入ってきていない。その辺がうまく溶け込んでくるといいなと思います。

見ることに慣れている人は彫刻を見て作品と対話できるが、そうでない人はポケモンGOや、友達とお茶をしながらおしゃべりをしたり、プロジェクトジョンマッピングなど体験型に行つてしまう。もつと展覧会や彫刻に、身近に接することができる環境になるといいですね。そうになると、もつとこんなものを見てみたいとかこんなものがないとかフィードバックがあると思う。僕は伝統的なところを見て育っているタイプなので、もつと若い人には先のほうを見て、日本の美術・文化を変えていってほしいと思います」。

また、彫刻というのはコミュニケーションのひとつだと語る。「それが真ん中にあつて人との関係ができる。でも、それにはものすごく時間がかかるんです。今日主流のスピード感のあるSNSに興味はあるが怖い。たとえば、どんな作品作っているのと言われたら、フェイスブックがあればとりあえずはすぐわかるし、今まで伝えにくかったことも伝えられる。ただものと写真は全く違うものです。どちらがいいということではないですが、こちらはものすごくアナログで、人の温度というか熱が感じられます」。

ロダンの彫刻を覗いて見つけた指紋

オーギュスト・ロダンの展覧会を見にいったときのことだ。ブロンズのトルソがあった。穴があきっぱなしで、中を覗き込んだら、指紋が残っていた。

その指紋はロダンの指紋ではない。鑑型にして制作しているので、職人の指紋だった。

「それにものすごく感動しました。ここに誰かが仕事をした痕跡がある。そういう情報はスマホには映らない。そういうところに価値観を持つて見ていきたいなと思う。若い人もただ単に形として見るだけではなく、そうした情緒というか作品の向こうにある作り手の温もりを感じる力を持つてほしいと思います」。

リキテンシュタインのドットも手書きですごくあたたかいんです。シルクでやったものではない。実際は誰が描いたかはわかりませんが全部人の手で描いている。その辺も共通すると思います。

あと、イタリアのポンペイの遺跡にヴェスヴィオ火山の噴火で灰の中に埋もれて命を落とした人々の姿を石膏像にしたもの(空洞になったところに石膏を流し込んだもの)があります。『そこに』『それ』があったということが、指紋と同じです。そこ魅力です。それは決して表現ではないです。そこからいろんな物語を思う人はいるかと思いますが、自分にとつてその痕跡は表現以上にとても魅力です」

影響を受けた人々

好きな作家は舟越保武。初めて見たのは高校の教科書に載っていた「萩原朔太郎」だ。実際には、旭川市彫刻美術館で「ダミアン神父」を見た。「あれは衝撃でした。あと『原の城』を見たときも時間が止まったような感覚を味わいました。二十五、

六のときだったと思います。舟越さんの作品は表現だと思いますが、僕には時間を飛びこえた痕跡のようで、ものすごく好きな作家です」。

「造形的に影響を受けているのは宮瀬先生です。彫刻の本では『マスで見るとか、単に『つながりを見なさい』という言い方をする。でも宮瀬先生にはもつと具体的に、マスとマスの間のここに二センチくらいの立ち上がりがあるとモデルを指さして説明された。首とか全部こうなっているのかとじっくりきた。表現としての見方ではなく、人をもつとして見始めたのはその時かもしれないです」

振り返ればいろいろな出会いがあり、身近にいた父親、宮瀬富之先生、金属彫刻の篠田守男先生や京都で出会った大倉侍郎先生のものと考え方や母や妻にも影響を受けた。「そういう先生達やその周りに集う人たちと話しているうちにいろいろ考えるようになりました。父は人形を作っているの、僕の作品を表現として見ている。美術を表現だと教えてくれたのは父かもしれないですが、いろいろな出会いが僕を、表現に固執しない方向に向わせたのかもしれないと思います」。

今後については「四十にして惑わずと言いますが、惑うことばかりです。昔のように彫刻を売ってそれだけで生活するということはできないだろうと思つています。でもそれでいいと思つています。学生時代から等身サイズの作品はたくさん作ってきましたが、僕はあまり作つたものに固執しないたちです。だから今この時間にこの環境でできることを探しながら制作していこうと思つています」。

紺谷 武

Takeshi Kontani

1977年、石川県金沢市生まれ

1996年、金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科彫刻専攻に入学

1999年、「孤雲」が第31回日展に初入選

2005年、金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科博士後期課程彫刻専攻 博士課程単位取得満期退学

2011年、「おしゃべりな董」が第43回日展で特選を受賞

2016年、「空気の底」が改組 新 第3回日展で特選を受賞



林香君

宇都宮から北東へ車で四十分ほど、自然豊かな芳賀町の山間に陶芸家・林香君さんのアトリエはある。明治時代の納屋を改造した建物内には大小五つの窯があり、所々に陶芸だけでなく、彫刻など様々な作品が置かれている。庭には、十数年育てているアジサイが咲き、自然の草木が美しい。

古陶磁を愛した祖父の元で

林さんは、九歳の時に家族とともに台湾の台南市から東京都文京区に移り住んだ。
「私の陶芸の原点は、祖父と過ごした台湾での日々にあると思っています。祖父は医師で宋代から秦代までの古陶磁を集めていて、私が歩けるようになると、毎週土曜日に骨董屋に連れていきました。二歳のころからです。祖父が話をしている間、私はそこでさまざまな焼き物を目にし、その色合いや姿、形を自然と心に焼き付けた

のです」

子どものころの記憶に、診察室の机上のライトに古陶磁を愛でる祖父の手が照らし出されるのが鮮明に残っている。その祖父が高校時代に亡くなった。その死を受け入れる悲しみの中で、祖父が愛した芸術の道に進もうという思いが芽生え、蕾がふくらむように徐々に大きく、確かなものになっていった。

紆余曲折を経て東京藝術大学陶芸科へ

しかし、道はすんなりとは開けなかった。父親は数学者だったが、その兄弟はほとんど医者という家系。父親が芸術の道を許さなかった。隠れて勉強したが、東京藝術大学入学はかなわなかった。言われるまま理工系に進んだ。

ただ、ここでちょっとした異変があった。内緒で藝大を受験した際に面影橋のアトリエのリーフレットをもらい、そのアトリエに通うことに

なったのだ。

「藝大のデザインを出られた石黒弥生さんが先生でした。先生に子供が生まれてアトリエを移すことになって、通えなくなると思ったら不思議にも自宅と父の仕事場を結んだ真ん中にアトリエができたんです。父から見える範囲に私が入り、私が真剣なのが伝わったのでしょうか。父から藝大受験の許しを得たのです」

藝大では、陶芸を学ぶ前に漆、鍍金や染色などいろいろ学ぶが、その中で唯一、いくらやってもできなかったのが陶芸だった。

「他の人が四十個も作っているときに私はたった二個しかできない。自分が知っている古陶磁とは程遠い。削っても変だし、重い。釉薬がかかって窯から出てきてもやっぱり変だし、ひどい。祖父が持っていた杯の絵を染付で描いてみたんですが、これも良くない。それで、もうちょっとやってみようと思い、陶芸に進みました。できないからやろうと思ったんです。チャレンジでした」

栃木芳賀の自然の中で

日展に初めて出品したのが一九九〇年か一九九一年。そのころ、ある青年が笠間で陶芸の修業をしていて、藝大の大学院入学のためにデッサン、墨、作品の下図や轆轤などをゼロから教えることになった。基礎を一から組み立て直す中で、自分がもう一度ゼロからスタートしなければいけないということに気づいた。カメラを持って、百メートル以内にある心に触れるものの撮影から始め、一キロそして十キロへと距離を少しずつ伸ばして「自分はなにを美しいと思ったか」「なにに感動したのか」「なにを表現したいのか」、もう一度自分自身に問い掛け、見つめ直した。

「芳賀の田んぼには蛙がいるし、大きな建物がないので空が広い。空の色によって田んぼの水の色が変わる。夕方は全てが金色に染まり、四季折々、時々刻々の微細な色合い、自然の美しい変化を肌で感じました。それがいま、自分の財産になっっているなと思います」

自分の内側を見詰め、大自然と一体となる経験を通して、林さんの中から新しい作品が生まれ、それが次々に賞を受けて、朝日陶芸のグランプリにも輝いた。

一九九〇年から数々の受賞

現代工芸に出品して三年目には、湾岸戦争で海鳥が油にまみれていたことを表現した「ひと

すくい海」という作品を作った。

「その前には普賢岳の爆発があり、火砕流が人や町を飲み込んでいったのを『シティエクス』という作品にしました。栃木で女性のアーティストの百人展があつて瀬戸浩先生が世界に通用するのはこれしかないと言ってくださり、大賞をいただきました」

こうして伝統工芸から徐々に現代的な作風に変わり、やがて劇的な変化を遂げる。一九八九年十一月九日、ベルリンの壁が壊れ、平和というのは風の標がないと消えてしまうという思いで作った「風標」が女流陶芸で京都府知事賞を受ける。また九六年に開いた初個展のために準備した作品が、現代工芸の大賞、河北（倫明）記念賞など一気に五つの賞に輝いた。

九〇年代は、同時に建築とアートの研究に力を入れ、公共建築のオートコンペに積極的に参入した。そこから壁面・オブジェの制作へと幅を広げていった。

さらに、もうひとつ仕事を大きく変えるきっかけになったのが二〇〇五年に自治医科大学の子供医療センターの外装と内装を手がけたことだった。このとき、制作の中でアートが社会に役立てる可能性を考え続け、それがその後の創作の要にもなった。

「いの指先に、心を集め」

盲学校、聾学校、養護学校とは以前から関わってきた。



華厳09 2009年 第41回日展 特選





ゼロの軌跡 2010年



雪月花 2016年 改組新第3回日展

「盲学校のボランティアを始めて十八年になります。陶芸を立ち上げたときに、車いす用の轆轤も入れました。病院で育っているからでしょうか。放っておけないんです」

盲学校の子供たちは指先だけで全部の文字を読み取る。そのことにもすごく驚かされた。

盲学校の子供に音で焼物を理解させるという

ユニークな試みも行った。焼き物は焼く温度で音に変化する。この性質を利用して、八〇〇度から一三〇〇度まで一〇度ずつ温度を上げて焼いた「灯金」を開発。また、盲学校の百周年の際には百という文字をデザインした型を作り、触って文字を感じられるようにした。

この盲学校では思わぬ「言葉との出会い」も

の考え方の根源にある。

素晴らしい日展の工芸

「日展の工芸は世界一だと思っています。技法、素材の豊かさと創造性の高さ、仕上がりの美しさなど他にないのではないのでしょうか。私は日展に育てられました。いろいろな作家の作品にすごく感動するし、先生方と会うようになって、皆さんが日展や工芸のことを真剣に考えていらっしやることを知りました。自分が今後どう手伝えるかなというところ です」

生活の中から生まれ出るもの

最後に、若い人へ向けてのメッセージをいただきました。

「私は芸術は日常だと思っています。例えば、今はスマホの時代ですが、映画、演劇、能、写真など芸術はいろいろな広がりがあり、さらに核分裂、核融合が起きると思うのです。だから若い芸術家には自由な発想で、細かいことにこだわらずに違うジャンルの芸術をもっと楽しんでほしいと思います。もともと芸術は思いや心を形に結晶化させていくもの。その根源は人間自身とその社会

あった。それは体育館に飾ってあった校歌だった。その歌詞を目にしたとき、心を揺さぶられて涙が止まらなかった。

『「この指先にこの指先に、心を集め」と書いてあったんです。私たちの仕事はまさにそういうものではないですか」

二〇一七年六月には、児童養護施設に石のミニメントを設置した。その際、施設の十二の玄関全部にオブジェを作って贈った。

「心と芸術をつなぐ役目をしたいんです。作品は遠い存在でなく、すぐそばにある近い存在であってほしい。一つの大きなミニメントがあるのが大事なのでなくて、アートが点としてあって、線になって、さらに面になって環境を変えていく。そういうことをしたいんです」

制作に人の三倍時間をかける

制作の構想には納得いくまで時間をかける。

「取材して三カ月はかけます。私の場合、人の三倍はやらないとだめと思っています。粘土でメケツト的なことをしたり、一窯、二窯、三窯と試行錯誤します。どんなに生地がうまくいっても釉薬で失敗するとだめなので、これでいいと納得できるものが出るまで作り続ける。そういう性分です」

かつて数学者の父から「定理は見つけるものだ。覚えるな」と何度も言われた。数学は一つの答えにたどりつくのにどれだけの手法があるかを楽しむべきものだ。その父の教えが、試行錯誤を繰り返して陶芸に取り組む陶芸家・林香君

なので、まずはそこをしつかり楽しんでほしい。そしてバーチャルの世界や映像でなく、生身の自分が生きて実際に生活しているこの世界で自分が身をもってやるということ。そのことの大切さを知ってほしい。子供たちに教えるのに、創造の『創』という字を説明します。ここに『り』と『刀』がある。創傷というのは切り傷。ではなぜ創造と創傷が同じ文字なのか。身をもつて切った下から新しい皮膚が上がってくるのが創造なのです。そう考えるとやはり新しいものを生み出すための切り傷です。私たちの先祖が古代からこんな文字を創り出したことに感動します」



林 香 君

Kaku Hayashi

1978年、東京藝術大学 安宅賞

1990年、国際陶芸展 '90 文化庁庁賞

1992年、女流陶芸 京都府知事賞・新人賞

1993年、朝日陶芸展 グランプリ受賞(朝日新聞社主催)

1997年、日本現代工芸美術展 大賞受賞(現代工芸美術家協会主催)、マロニエ文化賞受賞、北関東陶芸展準大賞受賞(毎日新聞社主催)、女流陶芸展 河北賞、栃木県文化奨励賞

2000年、特別支援盲学校・聾学校の支援交流を始める

2006年、女流陶芸・なにわ国際留学賞受賞

2009年、第42回日本現代工芸美術展 本会員賞、第41回日展特選『華厳'09』(国立新美術館)、宮澤賢治・子どもたちの壁画プロジェクト(～現在/131畳分・64作品)

2012年、第44回日展 特選『祈りのかたちー第二楽章』(国立新美術館)

2015年、改組新第2回日展審査員『道一無為』、自治医科大学こども医療センター内アートプロジェクトチーム

2016年、文星芸術大学名誉教授になる

2017年、日本現代工芸美術展 NHK会長賞、MOA美術館岡田茂吉賞展招待作家

作品収蔵: LACMA美術館; ポートランド美術館; ミネアポリス美術館; オーチャードアーツミュージアムなど

鍛金作家・日展会友

Goro Tezumi

手銭吾郎



金属を金槌などで叩いて形を成形する鍛金技法の変形絞り技法と板状の金属を加エローラやへらで押し付けて成形するへら絞り（スピニング）技法を使って、独特な人形を制作している手銭吾郎さん。

二〇〇六年には在外派遣研修制度でイギリスに一年間滞在。へら絞りで交流し研究を深めた。現在は長岡造形大学を基盤に数力所の大学で教えながら制作活動が続いている。長岡駅から車で十分ほどの大学は広大な敷地に、グレーのモダンな校舎。丸窓から光を取り入れた美しい廊下に名作家家具などが置かれ、デザインを学ぶのに抜群の環境だ。そこでスピニングの機械をはじめ制作現場を見せていただきお話を伺った。

美術と音楽に囲まれた環境で育つ

神奈川県横浜市に生まれ、藤沢の高校へ通った。兄弟は兄が一人で、美術や音楽が好きな家族だったという。父親は日産自動車のプロダクトデザイナー

ナーであったが、独立後は新幹線の車両デザイナーとして活躍した。

「家は古道具屋敷のようで、古いラジオやプロダクトなど、好きなアンティークに囲まれていました。その影響はどうしてもありますね」

高校時代に美大に進もうと決めた。父は自分と違う道として工芸が面白いのではというアドバイスをくれて東京藝術大学の工芸を目指した。子供の頃に体験した陶芸の轆轤が好きで興味をもっていたのだ。二浪して藝大に合格する。

東京藝大の鍛金科に進んで

工芸科に入ると、宮田亮平先生との出会いがあった。「一年生のときにほとんどの科を回るのがですが、鍛金は先生も厳しく先輩も怖かった。工場みたいな所でみな黙ってひたすらバーンと叩いていました。三年から専攻が分かれますが鍛金、彫金、陶芸で悩みました。基本的には回転しながらみるみ

る形ができるのが好きなのです。ただ鍛金はダイレクトに素材を触って形を作る、それが性に合っているかなと思いつめました。窯に預けたり、見えない時間が僕には合わないと思ったのです」。

その後大学院へ進む。一年生の時、茨城県取手校舎で、機械加工で作品を作るのがメインの授業があった。その時は旋盤で削るのにはまっていた。作品制作にへら絞りの技法を取り入れたのは、宮田先生に勧められたのがきっかけだった。

「照明の笠を大量に作る依頼を受けた時、『同じ形を作るにはへら絞り（スピニング）が向いているだろう』と。最初はこわごわやっていたのですが、だんだん慣れてきました」

このへら絞りがその後、手銭さんの研究テーマとなり、イギリス留学にも結びついていく。

「当時、宮田先生は助教教授で、厳しい指導で僕らの面倒を見てくれました。鍛金の助手時代は楽しいことも辛いことも全部一緒にありました。僕は内向的な性格だったのですが、人の縁がないと続かな

いと思い、変わってきました。宮田先生との出会いが大きかったです」

照明の笠の造形からヒントを得て、現在につながる独特の人形を作ることになるのだ。

「大きな笠に装飾をつけたランプシェードを大小二十個ほどスピニングで作って重ねたとき、板厚がずれて動く形が有機的に見えたのです。瞬間、フレキシブルに動く鎧をつけた人体のイメージが浮かんで、修了制作で作ってみたのがきっかけです。僕よりも絞りが上手な先輩や同級生がいたので、勝負するには一つ自分の違う方向性を見せなければいけないと思い、へら絞りを加えるのが重要でした。頭部はあえて一枚絞りという技法を組み合わせると面白いかなと思いました。最初はもう少し幼児体型のグロテスクな人形で、球体関節人形の世界のようなものを意識して作っていました」

毎年、一、二作、マイナーチェンジして作りながら考え発表していくようになる。

取手で五年間助手を務めた後、上野の鍛金研究室に二〇〇六年まで勤めた。

文化庁の在外派遣で一年間イギリスへ

その後文化庁の在外派遣で、一年間イギリスに滞在することになる。

「四十歳近くだったのでそろそろ考えなければいけないと思っていた時、現代工芸美術家協会から推薦で文化庁の海外留学制度に応募しないかと言われて、受けたところ通ったんです」

イギリスの文化、特に映画や音楽、骨董品やプロ

ダクトが好きだったというのは昔からあったが、イギリスを選んだ一番の理由は、産業革命以降の機械加工の技術が優れておりへら絞りを勉強するには間違いないと思ったためだ。また、それが研究テーマとなった。

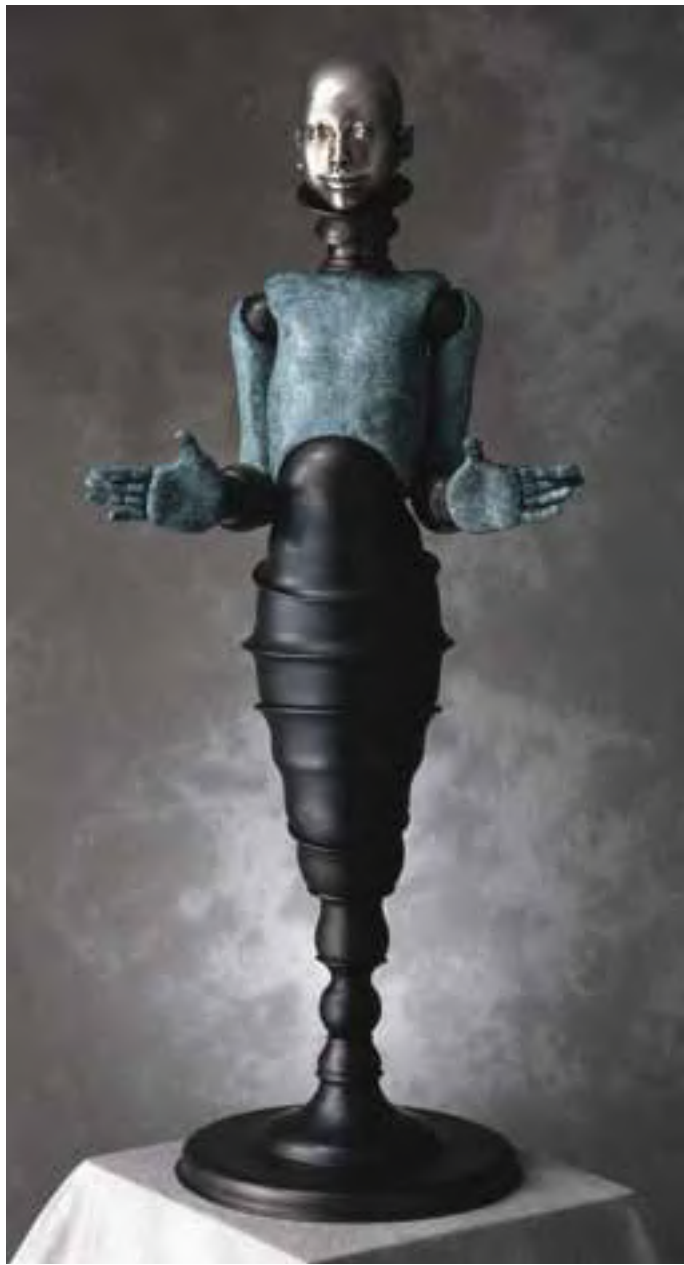
東京藝大に留学していたアイルランド人で鍛金の先生を頼りに地方の四カ所の大学に招聘してもらった。そこでは研究する代わりにレクチャーをするようになった。へら絞りの職人は日本と同じで少なく、教えている人があまりいない。

「機械はまったく同じなので苦労はないのですが、

英語が上手に喋れないので実演でへら絞りを教えました。また向こうの職人さんを紹介してもらい工房などに連れて行ってもらいました。わずか一年でしたが良い経験でした」

産業革命で発展した、燕三条のような金属工芸の町バーミンガムにはジュエリーの学校があり、鍛金もあれば時計科もあった。北の方ではスコットランドの美しい町エジンバラやグラスゴウの大学にも行った。

イギリスでは銀器でないと作品と認められないところがあったという。日本の工芸では素材に垣根



たたずむ 2008年 撮影：丸子成明



Fumble 2011年 撮影 丸子成明



Fileable 2012年 改組 新第1回日展 特選 撮影 丸子成明

がないが、イギリスは階級のある国で、職人も使う素材で分かれていた。ゴールドスミス、シルバースミス、ジュエリー職人、銅は鍋など生活用品になる。鉄になると野鍛冶、農業系や工業系というように全く工房が分かれる。「銀などは必ず刻印を打たない」と売ってはいけません。混ぜ物をしたらペナルティをくらう。銅で作品を作っていると、それをどうするのと。技術はすごいが、これはコップとして使うのか、ジュエリーなのかという感じに受け止められてしまうのです。銀なら何かの象徴的なものととらえてくれるのですが、そこが面白かったです」。日本は鍛、鑄、彫、ガラス、漆など、素材が技術で多岐に分かれる。金工にしても伝統工芸、現代工芸、クラフトもあるから、向こうからすればどこに

アプローチしたらいいのかわからないと言われたという。

一枚絞りと同転体を組み合わせて作る 独自の世界観

一枚の金属の板から時間をかけて徐々に絞り出して丸い頭の形を作り出す変形絞り。それぞれ顔の表情は違うがモデルはいないという。自分の中の流行や気になる人の顔を見たりするが、似せようということではなく、その時の感じで変わる。素材を銀や銅に替えることでも表情が変わる。性別も年齢も設定していないので、子供のようにも大人のようにも見える。パーツによってイメージが変わる

ため、作りながら考え、スケッチはするが、図面を書いたりモデルを粘土で作ることはしないという。そのほうが飽きなくてよいと思うからだ。「イギリスでは、一枚の金属板からここまでできるのか」という意味では評価されました。またこういう人形の造形は彫刻的で面白いと言ってくれました」。

制作には二、三カ月を要する。作品を作っているときはいつも何か発見ができればいいと思っている。

「僕はテレビで育った世代なのでどうしてもSFやロボットチックなものになります。美術解剖学的な、筋肉骨の動きでいったらめちゃくちゃなのですが、同転体の組み合わせが柔らかな線に見えたり、顔に見えるようなことがあります。パーツの繋がりが何か

有機的に魅力ある形に見えるなら、同転体でもいろいろ表現ができるのかなと思って進めています」

日本に戻ってからは、作品に銀を使うようになった。また顔つきも西欧人的な顔に自然になったという。「アトリエでは、先輩から古いヘラ絞りの機械を譲り受けていたので、すぐに制作にとりかかることができました。しばらくして日展に出すようになりました」。

非常勤講師として多摩美術大学、東海大学、静岡文化芸術大学にも何年かお世話になっている。以前から知っていた長岡造形大学にも呼んでいたが、三年前に准教授になった。

若い人へ。始めるためのきっかけ

現代工芸は助手になった年から出品し二十一年になるが、日展はまだ五、六回の出品であるという。「初出品で初入選し、五年ほど前に特選をいただきました。地方から大学に来た学生は日展の巡回展で僕の作品を見ましたという。東京でいろいろなものを見る機会がある若い人にはあまり興味を示してもらえない。出品者も僕より下の世代があまりいないと言われると、そうだなと思ってしまいますし、日展に、ある変わらないイメージを持っていらつしやる方が多い。歴史があつて当然なのですが、僕はまずは出してみたいとわからないとあるとき気づいて出し始めたのです」

「最近『刀剣女子』と言われるように刀剣をテーマにしたゲームが流行っていて、僕より詳しい学生がいます。刀の魅力に取り憑かれたら怖いので僕は

あえて勉強しませんでした。きっかけはなんだろうと若い人に興味を持たれるのは、すごいなと思います。それは実在とその歴史、ストーリーが面白いわけです。外国人も日本的なものをアニメから知ったり、フレキシブルに動くフィギュアの造形が好きな若者は僕の作品に反応します。逆に日本のアニメを教えてもらいました。また自在置物も人気です。若い作家で、超絶技巧で虫を作っている者もいます。僕はどちらかというと外国のものに抵抗があつたりしますが、今の子は逆に和のものに抵抗がなく伝統工芸に興味を持ったりします。始めるには何かしらのきっかけを持てばいいのかと思います。

現代工芸で最初に僕がこういうものを作ったとき、ちよつと浮いていたのですが『こういうのいいよ。現代工芸が始まった頃を思い出すよ』と言ってくれる先生がいました。今までの工芸と違うアプローチという意味でおっしゃったと思うのですが、こんなへんてこなものも入れてもらえるのだと思いました」

帰国後は、二年に一回のペースで知り合いのギャラリーで個展を開いている。

「受賞作や記念碑的な作品は手放したくないというのがあります。やはりシリーズ化するというのは重要で、成功したからシリーズにするのではなく、続けないとシリーズにならないし評価にならない。同じような作品を見て飽きる人もいれば何回も見かけることで覚えてもらえる人もいます。飽きずに作るのは必要だと、何の世界でもそうだと思います」

手 銭 吾 郎

Goro Tezeni

1967年、神奈川県生まれ

1994年、東京藝術大学大学院美術研究科修士

課程鍛金専攻修了 同修了制作 サロン・ド・プラン

タン賞 日本現代工芸美術展 初入選

2006年、日本現代工芸美術展 本会員賞

2007年、文化庁新進芸術家海外留学制度 派遣

研修員(英国)

2012年、改組 新 第1回日展 特選受賞

日展会友 現代工芸美術家協会本会員



井上清雅



「作品一枚書くのに気力というか、『気』をとられるのです。一枚書いたら同じ時間横になっていないとだめなんです」。広々とした天井の高いアトリエでは、書きあげた十尺までの画箋紙を自動で壁に高く掲げることができ

る。両脇には対称に黄色い中国式の椅子をはじめ、青銅器、さまざまな筆や書物などが置かれ、中国の書斎を思わせる重厚な趣きである。中国には数え切れないほど出かけ、古代、紀元前の文字を研究テーマとするという書家の井上さんのアトリエを三郷に訪ねた。

兄と習った書道、そして生涯の師・兄弟子との出会い

福岡の八女に生まれ育った。中村勇（文検合格者）先生が、我が家の二階で書道塾を始め、習っていた兄の隣で座って遊んでいたのが筆を持った最初で、まだ五歳だった。

その地域は書がさかんところで、二十年ほど

前に八女で個展をしたところ、農家の人がたくさん見に来て、みな芳名帳に筆で名をさらさら書く。文字を書く文化が根付いている地域だった。

その後、中学生頃までは中村先生の所へ通っていたが、高校では芸術科の書道を一年学び、あとはテニスに打ち込んだ。「当時私は理数系が好きで、東京理科大などを考えていましたが、両親は兄と同じ大学に行って書道をやると勝手に決めていたようです。兄は大東文化大学で書道を専攻し、青山杉雨先生についていました。結局兄が行っている大学を選び、四畳半にふたりで一年間住み大東へ通いました。

大学入学と共に、杉友会（青山杉雨先生に授業以外で指導を仰ぐ学生グループ）に所属、全国から結集した錚々たるメンバーの中、そのカルチャーショックは大変なものでしたが『さあ、やらなくては』という感じになったのです。

兄は途中で書道をやめてしまったが、当時の四年生には今の書道界を牽引する、高木聖雨氏、有岡郊崖氏、（故）佐川倩崖氏、永守蒼穹氏、川嶋毛古氏、山

中翠谷氏、大橋修一氏など、多趣多様、さながら群雄割拠を見るがごときの先輩方のありさまを手本として、書の道のスタートを切りました。

卒業後も青山先生に指導を受けることを許され、生涯の師として今日まで、その書法・書学における学書の方法論は私の作家としての根幹をなしていると思っています。また同門の兄弟子には学生時代からその生き方や人生観を学び、その目を通して書の世界を見てきた気がします。こうした出会いがなければ、『多岐亡羊』の書の世界において、現在の私はまずなかったでしょう」。

教育職から研究職へ

大学卒業と同時に都内の私立順天高校の教員になった。当時、教員は仕事の後は同僚と飲みに行くことが多かったが、五時になったら家に帰って、それから三、四時間は字を書いていた。展覧会前は大きな作品を朝方までかかって書く。ほとんど教員と作



詩経・秦風・小戎 2006年 第38回日展 特選

家の二重生活だった。日展と読売書法展、謙慎書道会展への出品のために三カ月ずつ準備し九カ月。土曜は毎週青山先生に作品を見ていただき、その後『書道グラフ』の編集を夜二、三時くらいまでお手伝いした。

そんな生活の中で日展に出し始め、五、六回落ちて二十八で初入選。初入選する前の年に結婚した。三十九まで私立の高校教員を続け、その後千葉の和洋女子大学に移った。当時は週三日の責任出校で書の研究日も二日あり「古代文字書法の研究」をテーマに、その研究成果を作品として発表することに集中できるようになった。大学に勤務、ちょうど一年経った頃に青山先生が亡くなった。

数え切れないほど中国を訪ねて

その頃から訪中の機会が多くなった。それまでは数回、師及び兄弟子訪中団の一員としての参加だった。書を育んだ文化、空気に魅せられ中国三千五百年にわたる、それぞれの王朝の首都を訪問した。特に紀元前のおもだった都市をことごとく訪れた。「私の専門はいわゆる古代文字です。楷書・行書・草書のように時代が下ってでき上がったものではなく秦の始皇帝以前の文字なので、資料は当然そういうところに行かないとありませんでした」。長い時間で半年、二週間、一週間、短くて四日とその回数は年々増えていった。

詩文・文字、書風、レイアウトを決め、線質を模索する

書の題材は中国最古の詩集である『詩経』が多い。素材は周の時代の文字で、その時代の詩を当時の文字で書く。

「約三千年前、殷・周時代の字は拓本でしか見られませんが。青銅品に鑄造した文字で、そこにはいくつかの戦いでどういう功績があったか、最後に子々孫々長く家宝にしたいと彫ってあるものが多いです。時代や政治的な記録もありますが、基本的には賞揚のための文章でした。やがて漢の時代は頌徳碑といわれるものになります。

実際に拓本を見て習うわけです。東周時代後半は、都市国家が二百くらいに分裂し最終的には七つの国になり、それぞれに地域色鮮やかな文字を使うようになって文字のスタイルが増えました。こうしたあらゆる文字を書いてきました。

文字は象形文字が原点です。物の形と物の形がくっついて会意文字ができて、国字を含め漢字は増えていきます。字に関する文字学的なことも当然やっていたいかなってはいけないうわけです」

書くときは頭の中で詩の意味内容を読んで味わうことはもちろん、字面を追うという。字にはそれぞれの顔があるので、この字はここに置くと恰好がいいなど、考えるのに時間がかかる。次に青銅器に鑄造した文字のイメージとしてどういう書風で書くかを決める。

「それからレイアウトする。絵でいえばやつと鉛筆デッサンです。そこから書き始めますが、本題は最後にどういう線質で書くかなのです」

数回目の訪中時、河南省安陽殷墟にて発掘間近な青銅器をこの手で味わう好機を得た。そのブツ



詩經 大雅・文王有聲 2009年 第41回日展 特選



歐陽修句 2016年 改組 新 第3回日展

リとした重量感、ヒンヤリとした冷たさ、指で弾いた時の澄んだ金属質の響きなど、青銅器に鑄造されたその銘文の息吹を五感をもつて受けとめた気がした。その体感を通した殷周代の文字の宇宙的世界が、以後の作品制作、特に線質の方向性を決定付ける事となったという。「最終的にどんな線質でやるか。何を頭にイメージして古代文字を書くかはそれぞれの作家の個性です」。

金属質を一旦置いて、次に取り組んだのが石鼓文である。秦の始皇帝よりも少し前のもので、石に彫られたので金属に比べて柔らかい線に膨らみなどが出てくる。「北京の故宮博物院の大和殿の隣に石鼓館ができて十個の石を集めて展示しています。その石鼓を何十回と見てそこから受けた僕のイメージは、上がぼこんと柔らかい丸なのでそれを出したくて、こぶを作っています。今は金属ではなく石刻のぬくもりが私のテーマです。この石刻にもう五、六年取り組んでいます。去年よりまた違うイメージを載せて、おそらくあと二、三年はやるでしょう。だんだん石から金属へ

本当に石刻と青銅器もどこに着地点を求めるかわかりませんが、「金石の氣を発する書、それが私が求めてきた最後の線、方向性かなと思うのです」。

制作について伺った。

「一年を通してメインが日展です。制作する七、九月の三か月は一年の中で体調をベストにして、仕事もあまり入れないようにします。一年間の蓄積を日展にぶつけ、自分というものを発表する。僕の作品の場合の一つの様式美を数年かけて追求していきます。一年ずつ積み重ねる中で感性を高め、作品にならないと思ったものが十年後の作品になることもあります」

「日展に初入選して二十二回、特選を一回取って、翌年が無鑑査で、次が入選で次に特選。二十四回目の特選。皆そうでしょうが、大変な、死ぬくらいの苦勞をして特選を取っています。そんな人々の感性を通してできた線質なので、その線質にある魅力、違う新しい息吹を感じてくれているというのが、徐々にわかる。一気に感じるものではありません。皆がそういうものを内に持つて線を引っぱっている。だから日展の

書は、書く側も審査する側も本当に真剣にやっていると思います。書では、へたすると自己満足だろうで終わることもある。日展は、挑む意識を持つていない人はだめですね」

長い年月をかけて一つのこと挑むこと

日展について尋ねると、「改組になってある意味、いい方向に向いていると思いますが、若い人たちが挑む意識がなかなか湧いてこない。では早く入選させるかというためなのです。逆に小中高、大学で、長い年月をかけてあるひとつのことに挑んでいくことの必要性を学ぶことができればと思います。今私は大学にいますが、本当に突き詰めて一つのことをできない子が多い。結果を早く求める。昔石の上にも三年といいましたが、もう三カ月で辞めます。そういう時代にこのアカデミックなジャンルの書や日展を広めるには、やはり教育の現場で、日本の伝統的な文化を推奨し、書の価値を広めていかないとだめですね。その先で日展に挑むという。だから学校で『どう生きるか』の教育をもう少しやっていかなければならないと思います」。

書を見る方へのアドバイスをいただいた。

「書いた人の心情を想像して見てくださーいと言いたいです。力強いとか優美で優雅だとか気持ち落ち着くという見方で最初はいいと思うのです。書はアートではありませんが絵画的な要素は十分持っています。井茂圭洞先生は黒の周りの白を余白ではなく、『要白』だとおっしゃるのです。この白を作るために線を引いている。僕は太賛成なのです。実は線質に

よって白が生きたり死んだりするのです。作品を見るときにこの人がここに白を求めた感性、美意識の根源はどこにあるのかという見方をしてみらうと楽しいかなと思います」

他からは得られない日展の充実感

「書はそのときどきの自分を表現できるジャンルです。例えば、うちの大学で書道専攻の学生は卒業するときに、住んでいる市町村の施設で教育委員会の後援をもらって個展をします。『四年間私はこう生きてきました』というのが作品によって発表でき本人も達成感を得ることができ、良い経験と思っています」。

一年研鑽して日展に挑む。結果が良からうが悪からうが、毎年頑張ろうということです。それには時間と経済的なものと、モチベーションが保てないといけない。それがなかなか難しい。でもやってみるとその充実感是他からは得ることはできないでしょう」

「中国では近年、小学校一年生から毛筆授業を復活しています。『九成宮醴泉銘』などを小学校一年生から一生懸命臨書させる。結局、書を啓蒙していくには教育だと思っています。日本でも小学校一年生から毛筆を体験させる時間を設けることが決まりました。私が小さい時は校長先生が書写を教え、卒業証書を書きました。今は機械で打ったような証書です。もつと巷に筆の文字があふれなくてはいけない。その文字もアートの、デザインの的なものではなくて、きちんと古典を背景に置いたその人自身が表れるような文字が巷にあふれるのがいいと思っています」



井上 清雅

Seiga Inoue

1953年、福岡県八女市に生まれる。1972年、青山杉雨に師事。1976年、大東文化大学卒業。1979年、日中書法交流団として中国を訪問。1981年、第13回日展初入選。1992年、和洋女子大学専任講師となる。第9回読売書法展にて読売新聞社賞受賞。1994年、第56回謙慎書道会展にて梅花賞受賞。1995年、日展会友となる。1997年、和洋女子大学助教授となる。2006年、和洋女子大学教授となる。第38回日展にて特選受賞。2009年、第26回読売書法展にて読売大賞受賞。第41回日展にて特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展審査員となる。2016年、日展会員となる。

書家・日展会員

Tetsuo Tanaka

田中徹夫



現在は書道教室で大人に教えながら、日展等に出品を続けている。書に入ったきっかけを尋ねると

兵庫県南西部に位置するたつの市川西は、白壁、日本瓦で、西の小京都といわれる町の一つ。約五百年前に赤松村秀が鶏籠山の山頂に山城を築城。五万三千石の城下町として文化が栄えた。童謡「赤とんぼ」の作詞者三木露風や哲学者三木清などの文化人を輩出し、田中徹夫さんも祖父が俳句、父が書を、という家に生まれた。二階のアトリエからは緑豊かな景色が広がり右手に龍野城、手前に赤とんぼ荘が見える。田中さんはこの地で育った後、学生時代を含め六年を東京で過ごし、Uターンした。たつのをこなく愛し、創作に最高の環境だと語る。また子供に長年教え、子供のときに書に触れる経験がとても大切と語る。

三歳から書を学んで

「私は二十五歳から子供に書を教え始めて三十年間続け、一番多い時には一人で四百人教えていました」

なと瞬時に思い、次の日には辞表を書きました」。

次に何をするかも決めず、四月一日に故郷に帰った。さて何をするか。父から離れ、書が好きだということを再認識し、また父が書塾をしていることもあり、書塾でやっていけるかなと考えた。三歳から十八まで書を学び、大学時代は漢字を習っていたので、子供を教える術はあった。父の名もあり、始めた書塾の生徒は五十人百人二百人と増えて、最後は十三か所の出稽古を一日二か所こなさないとやっていけないくらい人気を博した。「若くて元気で子供に力を入れたのも事実で評判が良くここまで来れたのが現実なんです。父と塾は別々にしましたが、結局は親のおかげです」。

二十五歳で師と出会い、三十五歳で入選

一方、二十五歳の九月に師匠との運命的な

出会いがあった。たつのに戻り書道でやっているかと決めたが、誰に師事すれば一番いいのか。父親が正筆会で現日展理事の黒田賢一先生を薦めてくれた。当時先生は六歳上の三十一歳だったが、長く師事できる先生がいいと直感した。最初は「プロを目指しているような若い人は教えていない」と断られたが、熱意が通じ、姫路の東山のご自宅に通うことになった。それから四十年。「書の技術から生活、書家の根幹をすべて指導していただきました。師匠との出会いがなければここまで来れなかった。それが自分のすべてです。感謝しかありません。今は後進へどう申し送っていくかを強く感じています」。

当時は毎日元気でエネルギーが溢れ、一日八―十時間筆を持ち、一カ月に何百枚と書いたという。

「私がかなを始めたのは二十五歳。大学で始めた人より七、八年遅れていて、来る日も来る日も死に物狂いで書きました」

翌年から初心者同然で日展に出し、三十五歳で第十九回日展に初入選を果たす。

「十年目に入れた訳ですが、その時はびっくりして天にも昇るような気持ちでした」

当時は、安東・西谷先生が亡くなられて歴史ある正筆会は不遇の時代。それでも黒田先生が必死で会を牽引されていた。

「父は二回目の特選を報告をして、その後調子が悪くなりましたが、そのときは涙を流して喜んでくれました」



秋 2007年 第39回日展 特選

初入選の次の年は落選。それから特選をとるまで連続二十二回入選した。

「大変恵まれていたと思います。自分も頑張っているという意識はありますが、世の中そんな甘いものではありません。読売展でも連続四回落ちて五回目に入りました。落選からすべてが始まっています。だからありがたさがよくわかります。不器用な私はいつも人の倍書くことを目標にしてみました。自分の思い通りに書けるのは百のうち一つあるかないかです」

書く題材については、毎年正月に歌集を見て、その年の約十回の大小の展覧会のために選んで書き写すなどして、自分の歌集を作る。ひな形で徹底的に煮詰めてから実作の紙に展開し修正をし、それから書き込みに入る。

それで師匠に批評を仰いだり、線の方向性や長さ等いろいろな書の要素を考える。清書は、そろそろピークに達したなと思うと早朝、午前中までで勝負をかけて一心不乱に書く。しかし気分、体調など微妙なものが影響するという。

「それまでの長い間、何百枚書くなかで腕に染み込み体中に入った作品が、肩から力が抜けたときに自分にとっては一番ましな作品というか。自分では気楽には書けたけれどもどうかと思うのを、師匠が見ると『これや!!』と。自分でいいと思うのは四角四面で無難な書。芸術の書は線の冴えや、特にかなでは余白が美しいか、墨量の対比です。かなは画数

が少ないので一本一本の線にこだわって書いています」

十回入選で日展会友になった。

「情性は怖いので、少しでも上を目指すためにやらないと自分がだめになっていきます。師匠が常に前を向き頑張られているのに弟子として自分が甘えていいのか、今は自分に厳しく高みを目指して頑張っていくべきと思っています。日展だけは自分の十八番を出したいという思いがあって、和歌一首で、伸びやかさと力強さ、勢いを表現したなかにも品格がある字が書きたいと思っています。書道家としてまだまだこれから変わろうと思うし、今後は力強さだけでなくあたたかさのある、見た人の気が休まるような書を目指したいと思います」

子どもの時から日展を鑑賞することが大切

日展についての思いを尋ねると、「日展は総合美術展の最たるものです。だからそれをもっとアピールして次世代の人をどう引き込んでいくか。小さい時から鑑賞して慣れることがいちばん大切なことで、そうした広報活動が必要だと思います。確実な線を引くために子どもの頃から書写をし、墨の匂いを嗅いでいないと大人になって続けてくれませんね。」

芸術に理屈はありません。読める読めないではなく、かなでは料紙の美しさや字がマッチしているとか、白がきれいとか、力強い線を

見て力づけられたとか、そういう見方をしていただくことではないでしょうか。書をもっと絵画的に、客観的な感じで見られると有難いです。

漢字は近文、象形文字のような字から草書隷書など、かなでは大字、中字、細字があります。薄い墨で書かれている人もいれば、濃い人もいる。そのマッチングです。日展の書は漢字、かな、篆刻、調和体もあり、また日本画、洋画、彫刻、工芸美術もあります。当番の時は全部回ってずっと見えますが、白黒の世界から色彩の世界を見て、自分の黒の濃さにおいてももっと意識するようになったし、そういうものは大切です」。

自分のライフワークで

何が心地良いかを選択する

最後に、若い人へのメッセージをいただいた。

「書家にとって今本当に難しい時代。私たちは子供を教えてどうにか生活できました。子供の習い事で書道は三番以内でしたが、今は十位に入っています。限界はありますが、夢を持って自分の好きな道を頑張って追求してほしいですね。今活躍されている先生も必ず苦しい時代はあったと思います。自分のライフワークと思って頑張ってこられた人が続けていられるわけです。若い人には夢を持って、自分の好きな道なら継続してほしい。それしかエールを送ることはないですね。できるだけ

お金がかからない形で、安い紙でもいいから枚数だけは重ねなくては。若い時に積んだ基礎が最終的に大きな花を咲かせる。失敗してもいいんです。若い時は冒険したり、でも、それすら今しようとしにくい人が多い。必ず反省も不可欠ですが、作品についてはいかなる場合も妥協しないで自分を通すことが確固とした信念につながるし、やり通してほしいです。」

ただ自分たちの通ってきた道だけが正しいとは思っていない。純粹にやってきましたので、打算的に考えてはできないです。だが生活ができないとやっていけないので、そのバランスを考えて。自分が書に対してどこまで思っているか、それを同じ環境でも苦しいと思うか、当たり前と思うか、ありがたい、楽しいと思えるか、その思考回路です。それが最終的に生き残ったり。そうなんでもうまくいきやすいですね」

自分を振り返って、「大学へ行くときに書を選ばはできなかったが、私も鮭ですかね。自然回帰で。自分の原点は書なんだということに帰ってきました。今では本当に良かったと思います。生きていく中で自分のライフワークで何が一番心地良いか、それを選択することです。確固たる自分の意志をもってほしい。それは芸術家でなくても、サラリーマンでも、それが自分の一生かけて進む道と確信したらその道を邁進して欲しいと思います」。



神なび 2016年 改組 新 第3回日展



田中 徹夫

Tetsuo Tanaka

1952年、兵庫県たつの市生まれ

1977年、黒田賢一に師事

1987年、日展初入選

1995年、日本書芸院史巴賞

1996年、日本書芸院史巴賞

2007年、日展特選受賞

2010年、日展特選受賞

2014年、日展審査員

現在 日展会員、読売書法会常任理事、

日本書芸院常任理事、兵庫県書作家協会参事、

正筆会副理事長、景水会主宰



日展
会期中の
イベント

主催:国立新美術館・公益社団法人 日展

親子鑑賞教室

〔後援: 〆 こころの東京革命協会〕

実施日程	時間	部門 (希望する部門を選択)		
11月12日(日)	午前 10:30～	日本画	洋画	書
	午後 2:00～	彫刻	工芸美術	
11月19日(日)	午前 10:30～	日本画	洋画	書
	午後 2:00～	彫刻	工芸美術	
11月26日(日)	午前 10:30～	日本画	洋画	書
	午後 2:00～	彫刻	工芸美術	

※各回約2時間

親子で記憶に残る体験をしてみませんか！

- 日展作家が直接指導します。
 - 対象: 小・中学生とその保護者
(参加費は無料、保護者は入場券を各自ご用意ください。)
 - 場所: 国立新美術館 3階 講堂
 - 申込受付: 往復ハガキに参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門(※第2希望まで)を明記のうえ、下記までお申し込みください。申し込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。(受付締切 11/3 必着)
 - 受付人数: 各部門10組(20名程度)
- [お申し込み・お問い合わせ]
〒110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1
日展事務局・親子鑑賞教室係
(TEL.03-3823-5701)

らくらく鑑賞会

出品作家達とゆっくり日展を鑑賞したい方に

- 開催日程
11月6日(月)・13日(月)・20日(月)・27日(月)
 - 定員: 各回10～15名
 - 参加費: 1名5,000円(入場料、昼食、テキスト他)
 - 時間: 10:30集合、16:10解散(昼食つき)
- ※予約制

ミニ解説会

会期中の 平日開催

一人からでも解説が受けられる

- 開催日程
改組新 第4回日展会期中の平日(土・日・祝日・初日・11/10を除く)
午後1時30分～(30分程度)
- 定員: 各部門20名(5部門)
※参加費無料 各自入場券をご用意ください。
※予約制(当日受付あり)

グループ作品解説

平日(月～金)に15名前後の
団体で作品解説をご希望の方に

- 日展作家が会場をご案内いたします。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書のいずれか1部門をお選びいただき、約1時間で主要作品をご説明いたします。ご希望のグループは、事前にご予約ください。
- 校外学習やクラブ活動など、学校のグループにも学年や目的に応じた解説をいたしますので、ご相談ください。

「日展の日」特典

11月10日(金)は「日展の日」
入場無料になります。

イベント予約お申し込み・お問い合わせ

〒110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1
日展事務局・展覧会係(TEL.03-3823-5701)

講堂でのイベント

場所: 国立新美術館3階講堂(入場無料)

※変更となる場合があります。

開催日	時間 ※途中10分休憩	講演会・シンポジウム・映像による作品解説等
11月 4日(土)	午後 1:30～3:30	映像による作品解説「自作を語る」(日本画) 今年度受賞者 今年度審査員と新入選者による座談会 今年度審査員・今年度新入選者
11月 5日(日)	午後 1:30～3:30	「今年度の受賞者と作品の紹介」 今年度審査員 座談会「日展の洋画について」 佐藤 哲・今年度審査員・今年度特選受賞者 (司会)丸山 勉
11月10日(金) [日展の日]	午後 1:30～3:50	基調講演「日展の巨匠たち」—伝説はその場から生まれた— 京都国立近代美術館 館長 柳原正樹氏 シンポジウム 日展110年「日展の歴史と未来を語る」 京都国立近代美術館 館長 柳原正樹氏 奥田小由女・土屋禮一・佐藤 哲・能島征二・井茂圭洞 (司会)三田村有純
11月11日(土)	午後 1:30～3:30	シンポジウムによる討論会「彫刻を語る」 石黒光二・木代喜司・紺谷 武・安田陽子・鈴木紹陶武 映像による作品解説「彫刻」 山田朝彦・西村祐一・寺山三佳
11月18日(土)	午前 11:00～ 午後 1:00	シンポジウムによる討論会「日展の工芸美術を語る」 武腰敏昭・石川充宏・河野榮一・内藤英治・原 典生・藤田 仁・三田村有純
11月23日(木・祝)	午後 1:30～3:30	シンポジウムによる討論会「日展の書」 高木聖雨(進行)・河野 隆・中村伸夫・原田玉童・日比野 実
11月25日(土)	午前 11:00～12:00	映像による作品解説「日本画」 池内璋美・岩田壮平・片山侑胤
12月 2日(土)	午前 11:00～12:00	座談会「日展の洋画について」 岡田征彦・難波 滋・今年度新入選者
12月 3日(日)	午後 12:30～1:30 午後 1:40～2:40 午後 2:50～3:50	映像による作品解説「彫刻」 谷村俊英・加茂為男・田中厚好 映像による作品解説「工芸美術」 今年度審査員 映像による作品解説「書」 高木厚人・永守蒼穹・綿引滔天

開催概要

展覧会名改組 新 第4回 日本美術展覧会
 The 4th Reorganized New NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition
 会期平成29年11月3日(金・祝)～12月10日(日)
 [休館日] 毎週火曜日
 [観覧時間] 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
 ※11月10日(金)は「日展の日」として、入場無料となります。
 会場国立新美術館 東京都港区六本木 7-22-2
 東京メトロ千代田線乃木坂駅6番出口直結 都営地下鉄大江戸線六本木駅7番出口から徒歩約4分
 東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口から徒歩約5分
 主催公益社団法人 日展
 後援文化庁／東京都
 一般問い合わせ [代表] 03-3821-0453 [展覧会関係] 03-3823-5701

入場料	一 般	高・大学生
	当日券	1,200円 700円
	前売券・団体券	1,000円 500円

小・中学生は無料。団体券は20名以上。20枚購入につき招待券を1枚進呈。前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、CNプレイガイドほか主要プレイガイド、デパート友の会、画廊、画材店、JTB、近畿日本ツーリストなどで発売。(前売券販売期間 :9月1日～11月2日)

★お得なチケット★

◆ ペアチケット (前売りコンピューターチケットのみ)

1枚 1,800円。お二人で入場の方、またはお一人で会期中2回入場いただく方にお得なチケットです(他の割引との併用はできません。販売期間は前売券と同じ)。

◆ トワイライトチケット (時間限定入場券・会場窓口販売)

観覧時間:午後4時～午後6時
 入場料:一般300円／高・大学生200円
 作品点数が多いので、部門ごとにご覧になるなど、何度も分けてご覧いただく方にもお得なチケットです。

巡回展 京都、大阪、大分、金沢

現代の日展作家たち
— 日本 の 美 —

平成29年9月25日発行

【企画・制作】(株)IMPRESSION

【デザイン】高田恵子 瀧澤弘樹

【印刷】(株)井上総合印刷

【編集・発行】公益社団法人日展

〒110-0002
東京都台東区上野桜木2-4-1

電話 03(3821)0453

http://www.nitten.or.jp/

office@nitten.jp

© 2017 NITTEN

日展



日展110年